

秋田県文化財調査報告書第443集

沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡

—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2009・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂(しろざか)遺跡出土
の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭。1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

おき　た　い　せき　　おき　た　に　い　せき

沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡

—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2009・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に先だって、平成19年度に実施した沖田遺跡と平成20年度に実施した沖田Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

調査の結果、沖田遺跡からは平安時代の掘立柱建物跡、土坑などの遺構とともに、墨書きされた土師器や須恵器などの遺物が発見され、当時の人びとの生活の一端が明らかになりました。

また、沖田Ⅱ遺跡からは江戸時代の掘立柱建物跡、かまと状遺構、井戸跡などの遺構とともに、陶磁器や煙管などの遺物が発見されました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、大仙市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

秋田県教育委員会

教育長 根 岸 均

例　　言

- 1 本書は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の3冊目である。
- 2 本書は、平成19(2007)年度に調査した秋田県大仙市北橋岡字沖田に所在する沖田遺跡と、平成20(2008)年度に調査した沖田II遺跡の調査成果とを収めたものである。
- 3 調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本書を正式なものとする。
- 4 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1『大曲』・『刈和野』、25,000分の1『大曲』・『刈和野東部』、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供の1,000分の1工事路線計画図である。
- 5 遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』2004年版に依拠した。
- 6 沖田遺跡の空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
- 7 自然科学的分析は、株式会社加速器分析研究所とパレオラボに委託し、その分析結果を掲載した。
- 8 本書の草稿執筆は、沖田遺跡を栗澤光男、杉井克之、佐々木公法が、沖田II遺跡を山村剛、袴田道郎、菅原博志、長谷川幹子が行った。
- 9 本書の編集は、栗澤光男、山村 剛、菅原博志が行った。

凡　　例

- 1 遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。また、柱穴様ビットが掘立柱建物跡や柱列を構成すると判断できた場合は欠番とし、掘立柱建物跡に新たな番号を付した。

S Q	・	・	配石遺構	S B	・	・	掘立柱建物跡	S K	・	・	土坑	S E	・	・	井戸跡
S O	・	・	かまど状遺構	S N	・	・	焼土遺構	S L	・	・	河道跡	S D	・	・	溝跡
S A	・	・	柱列	S X	・	・	性格不明遺構	S K P	・	・	柱穴様ビット				
- 2 遺跡基本土層にはローマ数字を、遺構土層には算用数字を使用した。
- 3 古代の土器のうち、須恵器には断面にスクリーントーンを貼って土師器と区別した。
- 4 陶磁器の施釉範囲にはスクリーントーンを貼ったが、染付の文様が隠れてしまう恐れがある場合は省略した。
- 5 土器の拓影配置は、表裏を採拓した場合は、断面の左側に裏面、右側に表面を配置した。表面だけ採拓した場合は、断面の左側に配置した。
- 6 插図に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。



接土



炭化物

須恵器
断面

軸



黒斑

目 次

序	
例言・凡例	
目次	
はじめに	1
調査に至る経過	1
調査要項	3
遺跡の環境	4
遺跡の位置と立地	4
歴史的環境	5
沖田遺跡	
第1章 発掘調査の概要	11
第1節 遺跡の概観	11
第2節 調査の方法	11
第3節 調査の経過	16
第4節 整理作業の方法と経過	18
第2章 調査の記録	19
第1節 楠文時代の遺構と遺物	19
1 検出遺構	19
2 遺構外出土遺物	19
第2節 平安時代の遺構と遺物	23
1 検出遺構と遺物	23
2 遺構外出土遺物	55
第3節 近世以降の遺構と遺物	62
1 検出遺構と遺物	62
2 遺構外出土遺物	75
第3章 まとめ	76
図版	
沖田II遺跡	
第1章 発掘調査の概要	83
第1節 遺跡の概観	83
第2節 調査の方法	84
第3節 調査の経過	85
第4節 整理作業の方法と経過	87
第2章 調査の記録	88
第1節 遺構と遺物	88
1 検出遺構と遺物	88
2 遺構外出土遺物	124
第3章 まとめ	127
図版	
報告書抄録	

はじめに

調査に至る経過

一般国道13号神宮寺バイパス建設事業は、大仙市花館から大仙市北橋間に至る全長9.6kmを自動車専用道路として整備する事業である。

神宮寺バイパスが整備されることにより、交通混雑の解消と冬期における道路交通の安全性の向上が図られるとともに、平成13年度に完成した刈和野バイパス及び大曲バイパスと一緒に機能することで、大曲都市圏の産業・経済・文化の一層の発展が期待される。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所より、文化財保護法に基づいて埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査を実施し、記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施することになった。

平成14(2001)年度に薬師遺跡の確認調査を行い、中世の遺構と遺物を確認したことから、翌15(2002)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、12世紀後半から13世紀半ばにわたる掘立柱建物跡13棟、かまと状遺構11基、井戸跡1基、道路跡3条、溝跡19条、土坑61基など111遺構と、須恵器系中世陶器や瓷器系中世陶器が出土し、中世の集落跡と確認した。

平成17(2005)年度に布田谷地遺跡の確認調査を行い、平安時代の遺構と遺物を確認したことから、翌18(2006)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の陥し穴2基、平安時代の堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡9棟、井戸跡7基、土坑19基、焼土遺構9基、溝跡2条などの遺構と、縄文土器、石器、土師器、墨書き土器、須恵器、曲げ物などが出土し、縄文時代には狩猟場として使われ、平安時代には集落として使われたことがわかった。

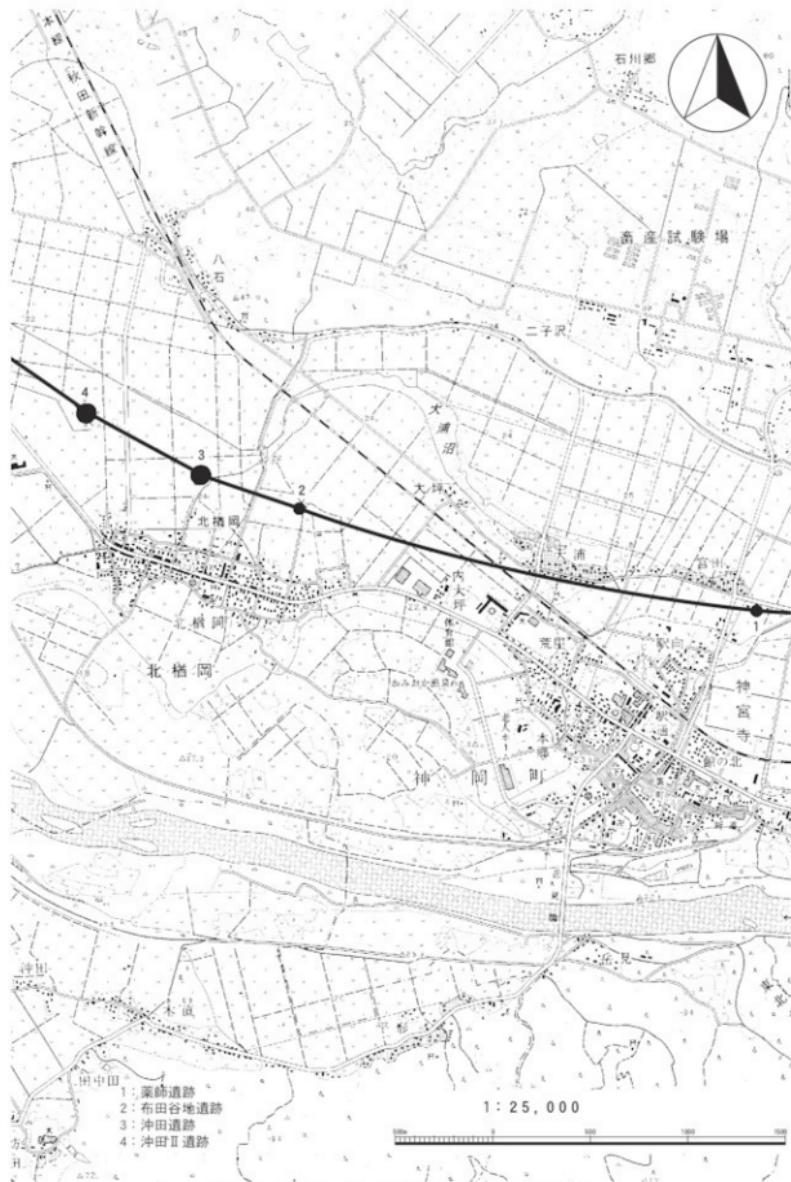
平成18(2006)年度に沖田遺跡の確認調査を行い、縄文時代の遺物及び平安時代の遺構と遺物を確認したことから、翌19(2007)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、縄文時代の配石遺構1基、平安時代の掘立柱建物跡1棟、土坑4基、河道跡3条、近世の井戸跡8基などの遺構と、縄文土器、土師器、須恵器、墨書き土器、陶磁器、曲げ物などが出土し、平安時代には集落として使われたことがわかった。また、近世にも集落の一部として使われたと考えられる。

平成19(2007)年度に沖田II遺跡の確認調査を行い、近世の遺構と遺物を確認したことから、翌20(2008)年度に発掘調査を実施した。調査の結果、近世の掘立柱建物跡18棟、かまと状遺構9基、井戸跡4基、柱列4条、溝跡22条、河道跡2条などの遺構と、近世の陶磁器や煙管などが出土したことから、近世の集落跡の一部であると考えられる。

参考文献

秋田県教育委員会 「薬師遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－」 秋田県文化財調査報告書第388集 2005(平成17)年

秋田県教育委員会 「布田谷地遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II－」 秋田県文化財調査報告書第433集 2007(平成19)年



第1図 神宮寺バイパス建設予定地内の遺跡位置

調査要項

遺 跡 名 沖田遺跡(おきた いせき) 遺跡略番号: 7 O T

遺 跡 所 在 地 秋田県大仙市北楢岡字沖田60番地外

調 査 期 間 平成19年5月31日～11月15日

調 査 目 的 一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る事前調査

調 査 面 積 8,040m²

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 栗澤 光男(秋田県埋蔵文化財センター南調査課 副主幹兼調査班長)
菅原 幹夫(秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事)
杉井 克之(秋田県埋蔵文化財センター南調査課 学芸主事)
伊藤 佳瑞(秋田県埋蔵文化財センター南調査課 調査研究員)
佐々木公法(秋田県埋蔵文化財センター南調査課 調査研究員)

総務担当者 千田 喜博(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主査)
佐々木和幸(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事)
(担当者・職名は調査時のものである)

遺 跡 名 沖田II遺跡(おきた に いせき) 遺跡略番号: 7 O T II

遺 跡 所 在 地 秋田県大仙市北楢岡字沖田387番地外

調 査 期 間 平成20年6月9日～9月10日

調 査 目 的 一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る事前調査

調 査 面 積 2,900m²

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 山村 剛(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)
袴田 道郎(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事)
菅原 博志(秋田県埋蔵文化財センター南調査班 調査研究員)
佐々木公法(秋田県埋蔵文化財センター南調査班 調査研究員)
長谷川幹子(秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 調査研究員)

総務担当者 千田 喜博(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主査)
高村知恵子(秋田県埋蔵文化財センター総務課 主事)

調査協力機関 国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所・大仙市教育委員会

遺跡の環境

遺跡の位置と立地

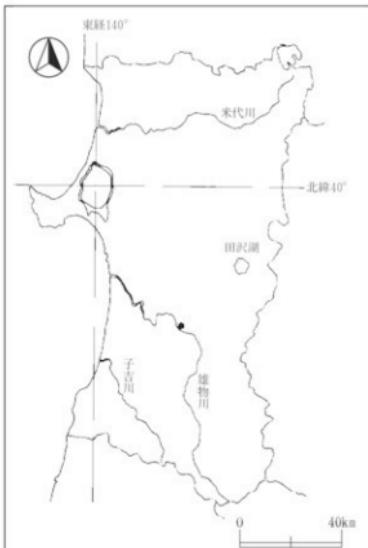
沖田遺跡及び沖田II遺跡のある大仙市は、秋田県の南東部に位置する。平成17(2005)年3月、大仙市、神岡町、西仙北町、中仙町、協和町、南外村、仙北町、太田町の一市六町一村が合併し、現在の大仙市が誕生した。東は仙北市・岩手県和賀郡西和賀町と、西は秋田市・由利本荘市と、南は横手市・美郷町と、北は仙北市と接している。古くから県南の交通の要衝であり、現在でも秋田新幹線や秋田自動車道などの陸路・鉄路の結節点として拠点機能の強化が進んでいる。

沖田遺跡は旧神岡町のJR奥羽本線神宮寺駅から北西約2.5kmの北緯39度30分08秒、東経140度24分11秒、沖田II遺跡は沖田遺跡の西側約400mの北緯39度30分25秒、東経140度23分36秒に位置する(第2図)。

遺跡の南約2kmを、横手盆地南端の山地を源流にする雄物川が西流しており、出羽山地を先行的に横断し、秋田平野に出て日本海に注いでいる。遺跡周辺の地形は、山地、丘陵地、台地(段丘地)、低地によって構成される。遺跡の北側一帯は、高野台地が広がっている。高野台地の段丘面は、かつては草地として重視された歴史もあるが、近年は田地や畑地の耕地化が進み、また段丘崖とともに杉の人工林が目立っている。

一方、雄物川を挟んだ南東側には出羽山地に属する姫神山山地があり、姫神山(387.6m)や神宮寺嶽(277m)がそびえ、その側辺は段丘や低地になっている。遺跡の東西および南側の低地(中央低台地)は雄物川によって形成された先行谷の中にあり、独特の幅狭い狭窄部低地といった峡谷の景観ではなく、広々とした氾濫平野の感じを強く印象づける眺望である。現在は水田地帯として整備されているが、先行谷最下位の低地には、河原、氾濫平野、砂堆地、旧河道などが散在する。先行谷の広がりは、雄物川下流の刈和野地区や強首地区まで続き、特に強首地区の左岸一帯は、曲流部の緩やかな滑走斜面で、そこには広大な七段の砂礫段丘が、反対の攻撃的斜面には河触崖がみられる。

両遺跡は、西流する雄物川右岸に形成された標高約20~21mの河岸段丘上に立地している。地質は、第四紀洪積世に形成された疊・砂および泥層である。



第2図 沖田遺跡・沖田II遺跡位置図

歴史的環境

沖田遺跡(26)は平安時代を主体とする遺跡で縄文時代後期や近世の遺物も出土している。沖田Ⅱ遺跡(27)は近世の遺跡である。二つの遺跡の周囲に所在する縄文時代から近世までの主要な遺跡について概観する。なお、遺跡名の次の()内の数字は、第1表と第2図の表示番号に対応している。

縄文時代の遺跡では、中期から晚期までの計12遺跡が確認されており、晚期の遺跡が多い。中期の高野Ⅰ遺跡(6)・筆倉遺跡(9)、中期～後期の愛宕下遺跡(12)、後期～晚期の薬師遺跡(23)、晚期の萩の台遺跡(3)・上高野遺跡(5)・小沢遺跡(13)・落貝遺跡(14)・茨野遺跡(24)、時期不詳の八石遺跡(4)・北田遺跡(20)・山王台遺跡(22)がある。高野Ⅰ遺跡と筆倉遺跡は、昭和28・29(1953・1954)年に武藤鉄城氏によって発掘調査が行われ、高野Ⅰ遺跡では中期の大木式土器が出土し、筆倉遺跡では7基の組石造構を検出した。薬師遺跡は平成15(2003)年に発掘調査が行われ、後期と晚期の土器、石鏃・石匙・磨製石斧などの石器類が出土した。小沢遺跡は昭和60(1985)年に確認調査、平成元(1988)年に発掘調査が行われ、晚期の大洞B～A式の土器が出土し、時期不明のかまと跡が検出されている。落貝遺跡は、昭和40(1965)年に豈島昂氏によって発掘調査され、2基の組石棺を検出し、晚期の粗製土器も出土した。茨野遺跡は、平成14・15(2002・2003)年に旧神岡町教育委員会によって発掘調査が行われ、縄文時代後期と中世の集落跡が発見された。愛宕下遺跡からは、青龍刀形石器、石鏃、石棒が出土している。

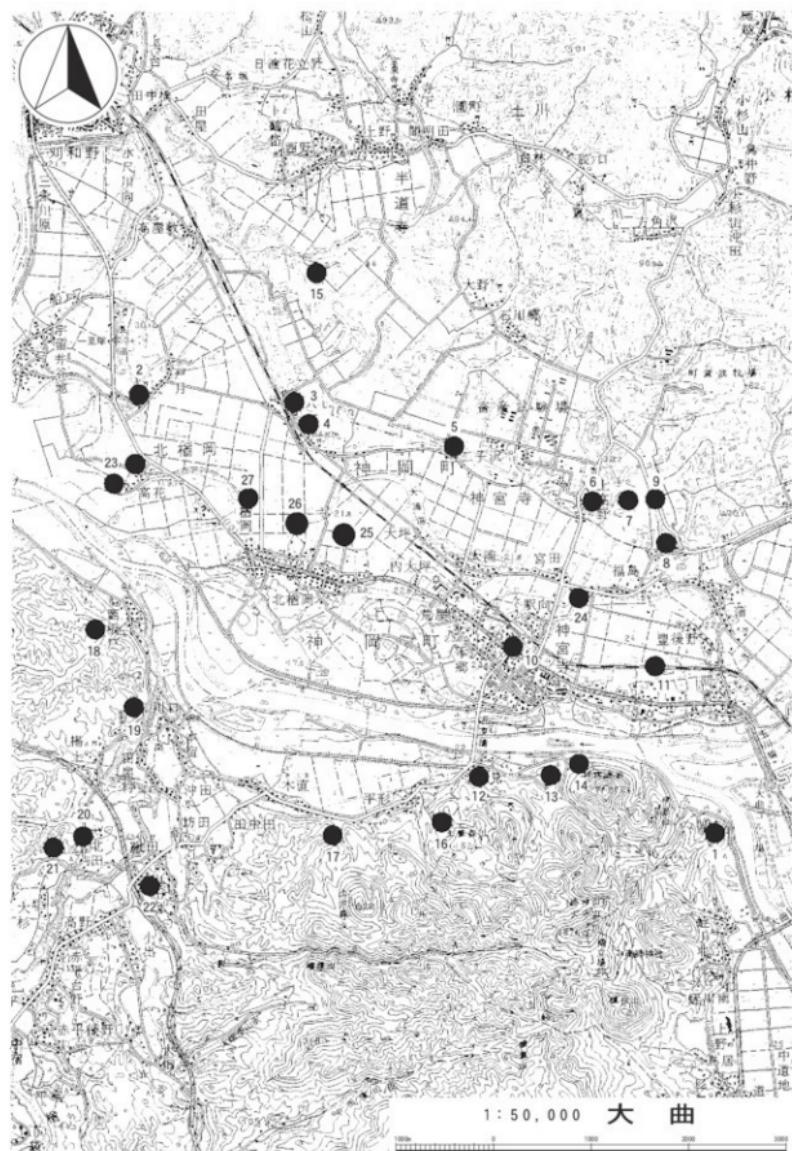
弥生時代の遺跡は、二つの遺跡周辺では確認されていない。

古代の遺跡では、高野Ⅱ遺跡(7)・坊ヶ沢遺跡(8)・布田谷地遺跡(25)の計3遺跡が確認されている。坊ヶ沢遺跡では須恵器の大甕が出土した。布田谷地遺跡は平成18(2006)年に発掘調査が行われ、平安時代の集落跡から、「大」「万」を縦に重ね合わせた吉祥文字を記した墨書き土器が出土した。

また、図幅外であるが沖田遺跡から東南東に約13.3kmの位置に、平安時代の城柵である国史跡払田柵跡がある。

中世の遺跡では、昭和50年代に行われた分布調査などにより、丘陵上または平地に立地する多数の中世城館が確認されており、松山城(1)・龍藏寺館(2)・富樫館(10)・神宮寺掃部館(11)・朝夷奈古柵(15)・平形館(16)・木直沢館(17)・猪倉沢館(18)・橋岡城(19)・壇ノ平館(21)が知られている。出羽山地の北東に突出した丘陵端に位置する松山城は、北東方向に並列する2つの崖上にあり、2つの郭からなる城跡で、前九年の役の頃、阿部貞任・宗任が居城していたと言われている。馬場跡や湧水の存在も指摘されており、須恵器が出土している。龍藏寺館は、比高およそ5mの単郭の館で、郭はほぼ台形である。北東隅に大山祇神社が祭られ、その近くに井戸跡がある。郭の北縁に、土塁が築かれ、その下方には空堀が存在する。郭の西麓には長沼があつて内濠の役目を果たしたと推定されている。この館には、長禄(1457～60年)の頃、雄勝松岡城主柴田平九郎の老臣龍藏寺伯耆守が移り住み、永禄8(1565)年落城したという。昭和50(1975)年に、この館付近で直径30～40cm、長さ3mの、下部が削られ上部が朽ちた杉丸太がほど5m間隔で出土した。富樫館は、かつて四方を川や沼沢で囲まれた天然の要塞であったと伝えられる。館を築いたのは富樫佐衛門朝誠白で、文和3(1254)年には氏神白山権現を勧請し、永徳2(1382)年に宝蔵寺を建立している。館跡の東側には蓮沼、北から西へ栗谷田に字名があり、栗谷田は厨田の当て字とも言われる。栗谷田との境には濠跡といわれる用水路があ

遺跡の環境



第3図 沖田遺跡(26)・沖田II遺跡(27)と周辺遺跡位置図

り、また、駅前を東西に横切る水濠があったといわれ、台地の両側にはその跡と思われる幅約30mのくびれが見られる。神宮寺掃部館は長方形の単郭で、周囲の水田より3mほど高くなっている。北西の隅に土塁らしき土盛り、東側に犬走り状の低地がある。四周水濠によって囲まれていたと伝えられるが、現在は水田となっており痕跡不明である。館は正慶(1332~34年)の頃に築かれたという。また、平成15(2003)年に発掘調査が行われた薬師遺跡では、12世紀後半から13世紀半ばにわたる掘立柱建物跡、道路跡、かまと状遺構などからなる集落跡が検出され、須恵器系中世陶器や瓷器系中世陶器が出土した。

近世の遺跡では、三本杉経塚・三本塚一里塚・龍藏台経塚・小豆沢一里塚がある。三本塚一里塚は県史跡になっている。

引用・参考文献

- 神宮寺公民館『籠倉・東高野遺跡発掘調査報告書』1955(昭和30)年
 秋田県『土地分類基本調査 大曲』1977(昭和52)年
 秋田県『土地分類基本調査 刈田野』1979(昭和54)年
 秋田県文化財保護協会『秋田県の中世城館』1981(昭和56)年
 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年
 秋田県神岡町教育委員会『小沢遺跡発掘調査報告書』神岡町文化財調査報告書 1990(平成2)年
 秋田県教育委員会『薬師遺跡—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書388集 2005(平成17)年
 秋田県教育委員会『布田谷地遺跡—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II—』秋田県文化財調査報告書第433集 2007(平成19)年

第1表 沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	種別	主な遺構・遺物
1	松山城	212-8-30	熊跡	須恵器
2	龍藏寺館	212-45-3	熊跡	土塁・空堀・井戸跡(陥没)
3	萩の台	212-45-5	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石礫・石棒
4	八石	212-45-6	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石礫・石匙・石斧
5	上高野	212-45-7	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石斧
6	高野Ⅰ	212-45-9	遺物包含地	縄文土器(後期・晚期)・土版・石匙・石錐・石斧
7	高野Ⅱ	212-45-10	遺物包含地	須恵器
8	坊ヶ沢	212-45-11	遺物包含地	須恵器(形繋縄)
9	籠倉	212-45-12	遺物包含地	縄文土器(後期・晚期)・凹石
10	富樫館	212-45-13	熊跡	
11	神宮寺掃部館	212-45-14	熊跡	
12	安富下	212-45-15	遺物包含地	青竜刀型石器・石錐・石棒
13	小沢	212-45-16	遺物包含地	縄文土器(晚期)・石匙・石棒
14	落貝	212-45-18	遺物包含地	石棺・縄文土器・石錐
15	朝内奈古墳	212-45-35	熊跡	
16	平形館	212-55-1	熊跡	主郭・堅塙
17	木直武館	212-55-2	熊跡	空塙
18	猿倉沢館	212-55-3	熊跡	
19	柄岡城	212-55-4	熊跡	主郭・腰郭・馬場跡・井戸跡・青磁
20	北田	212-55-5	遺物包含地	縄文土器・有柄石鍬・石匙・石錐・磨製石斧
21	境ノ平館	212-55-6	熊跡	主郭
22	山王台	212-55-7	遺物包含地	堅穴住居跡・縄文土器・石匙・石なた・石棒
23	茨野	212-45-19	集落跡	堅穴住居跡・掘立柱建物跡・縄文土器・石器・青磁・青白磁・須恵器系中世陶器・フイゴ羽口・錢貨
24	薬師	212-45-20	集落跡	掘立柱建物跡・かまと状遺構・土坑・溝跡・縄文土器・須恵器系中世陶器・瓷器系中世陶器
25	布田谷地	212-45-21	狩獵場・集落跡	階段穴・堅穴住居跡・掘立柱建物跡・縄文土器・土器・須恵器
26	沖田	212-45-22	集落跡	配石遺構・掘立柱建物跡・土坑・河道路・井戸跡・溝跡・縄文土器・土器・須恵器・墨書き土器・陶磁器
27	沖田Ⅱ		集落跡	掘立柱建物跡・かまと状遺構・井戸跡・溝跡・土器・須恵器・陶磁器

沖田遺跡
(7 O T)

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

沖田遺跡は、JR奥羽本線神宮寺駅から北西へ約2.5kmに位置し、遺跡の南方を西流する雄物川右岸に形成された標高約21mの河岸段丘上に立地している。雄物川は古来幾度となく氾濫を繰り返し、遺跡周辺には旧河道や砂堆地、河原、氾濫平野などが散在する。遺跡の北側一帯には丘陵地が広がり、北東には雄物川の残存湖である大浦沼がある。また、南東には姫神山や神宮寺獄の連なる姫神山山地を望む。遺跡の南東約500mには、平成18年度に調査を行った布田谷地遺跡がある。

遺跡の現況は休耕田であり、ほぼ平坦な地形である。なお、調査区内を南北に走る市道北橘岡山岸線により調査区が二分されており、便宜的に市道より西側の調査区をA区、東側をB区、市道をC区と呼称した。

調査区の基本土層は、LTラインに設けた土層観察用トレーンチで5層に分層できた(第3図)が、調査区には第Ⅲ層と第Ⅳ層を欠如する箇所が多く見受けられた。おそらく、過去の水田造成などによって削平されたものと思われる。

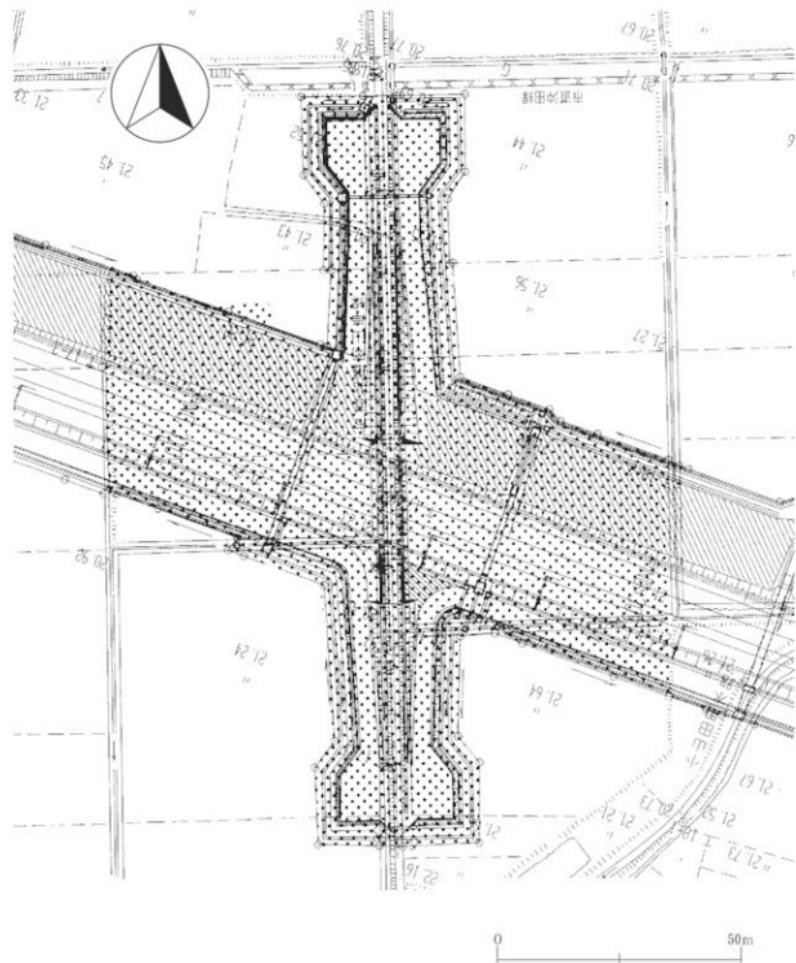
第2節 調査の方法

計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。設定方法は調査区に設置されていた一般国道13号神宮寺バイパス建設の道路中心杭(NO.307、X=-54816.565、Y=-37313.970)をグリッド原点MA50として、この杭から国家座標第X系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って4×4mのグリッドを設定し、グリッド原点MA50を起点に、東西方向には東から西へ4mごとに「LK・LL・・・・LT・MA・MB・・・・MR・MS」という2文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ4mごとに「33・34・・・・48・49・50・・・・69・70」という2桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は4m間隔の東西基線と南北基線の交点すべてに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

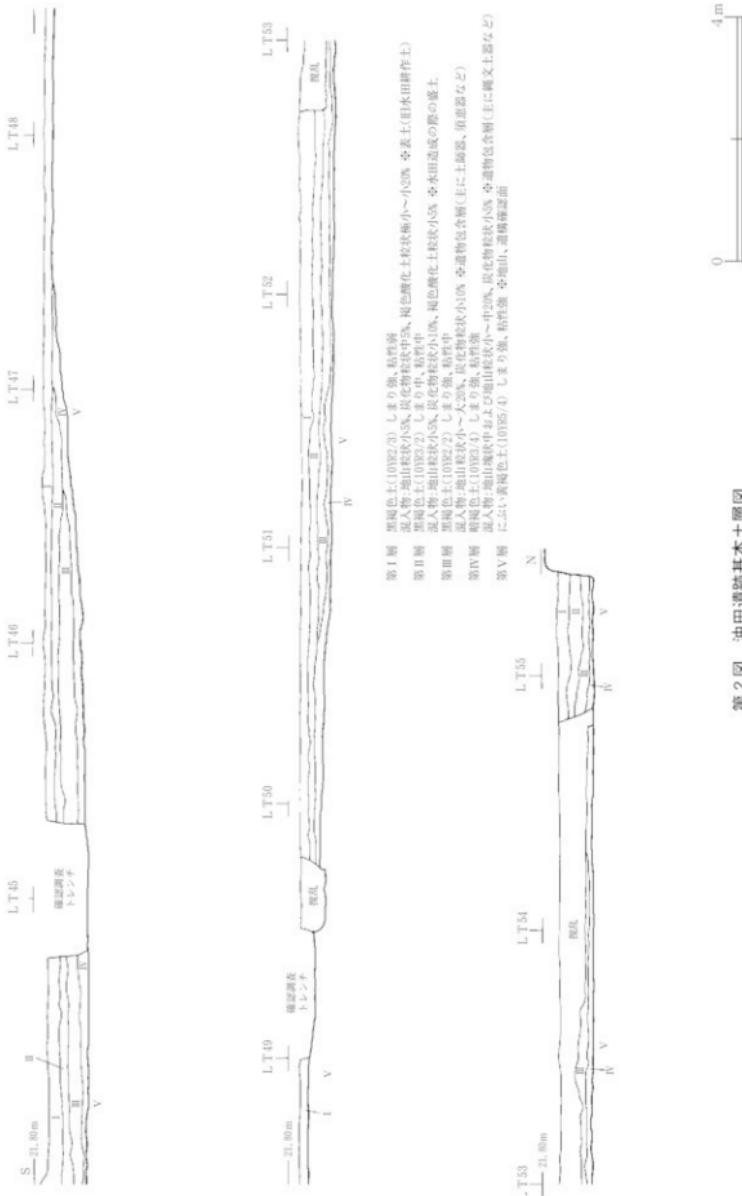
調査は確認調査の結果に基づき、調査区の東側と西側の一部を除き、バックホーにより表土除去を行った。包含層の掘り下げは大半は手作業で行い、B区の北側の一部で重機を使用した。遺構精査は全て手作業で行った。検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は、平面図・断面図の作製および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影には35mmモノクロ・カラー・リバーサルフィルムおよびデジタルカメラを使用した。

沖田遺跡

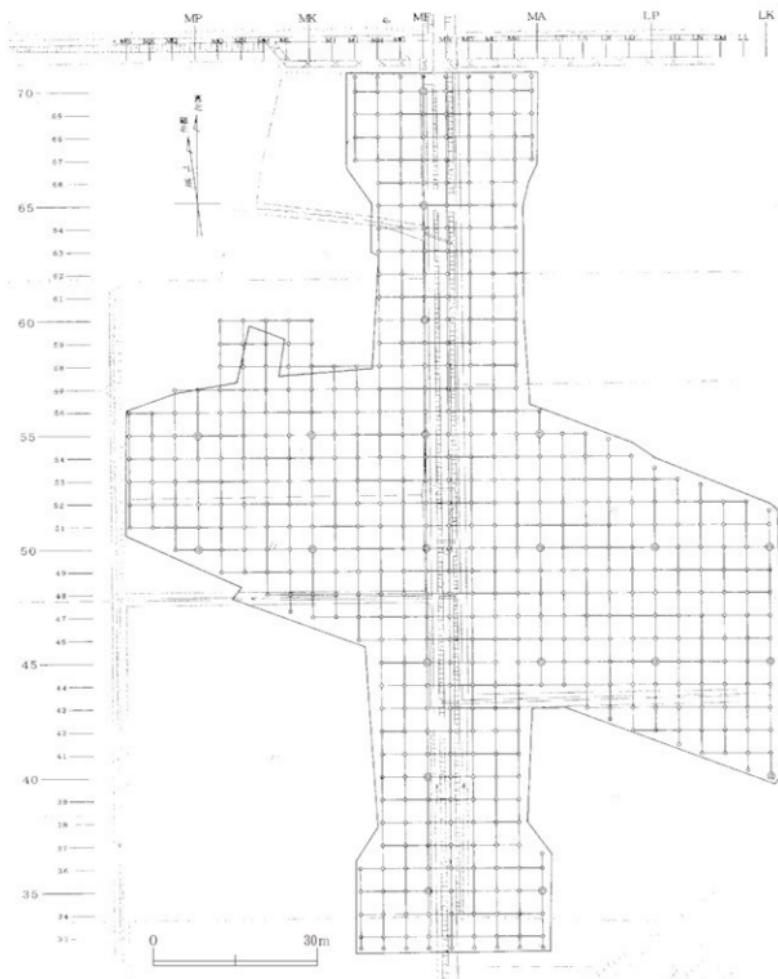


第1図 沖田遺跡発掘調査対象範囲図

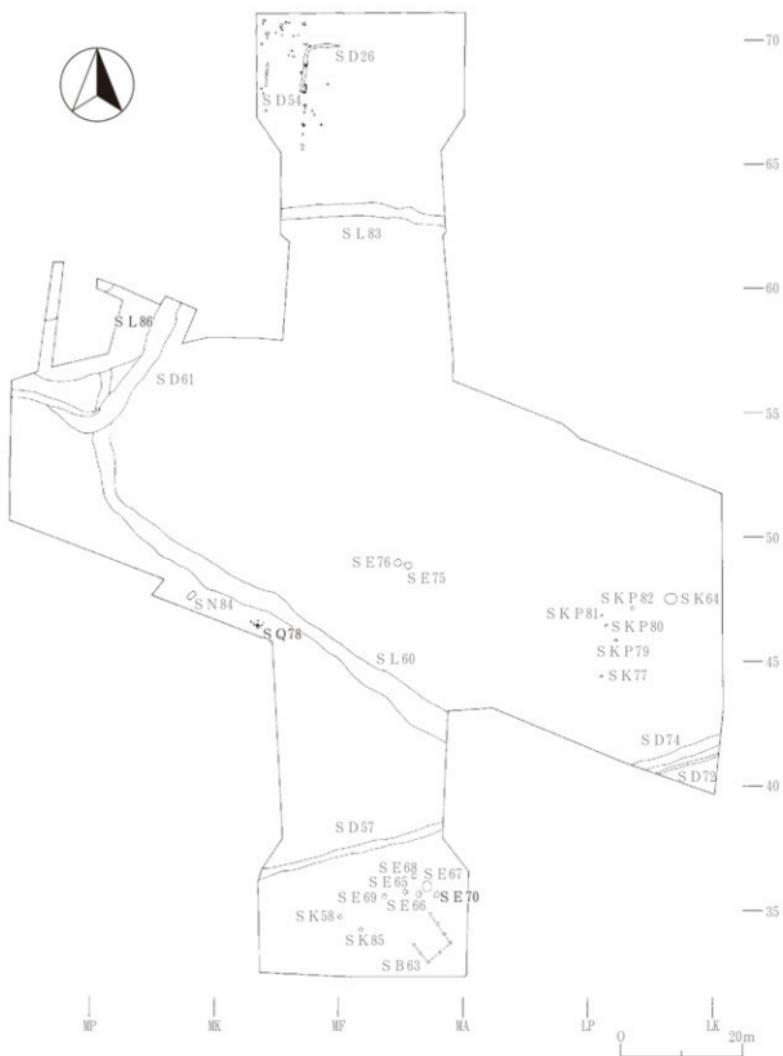


第2図 沖田遺跡基本土層図

沖田遺跡



第3図 沖田遺跡グリッド設定図



第4図 沖田遺跡遺構配置図

第3節 調査の経過

沖田遺跡の発掘調査は、平成19年5月31日から11月15日まで実施した。以下に各週ごとの調査経過を記述する。

【第1週】5月31日～6月1日

31日、現場事務所の引き渡しを発掘委託業者である宮原組より受けた。1日、大仙市神岡支所、歴史館、警察、消防へ調査開始の挨拶を行った。

【第2週】6月4日～6月8日

4日、発掘機材の搬入と環境整備、ベルトコンベアの搬入・設置作業を行った。5日、A区北端から調査を開始する。7日は、A区中央部に基本土層観察ベルトの設定作業を開始した。4日、埋蔵文化財センター熊谷所長が作業員へ調査開始の挨拶のため来跡。

【第3週】6月11日～6月15日

A区北側と中央部市道沿いで調査を行い、北端部で溝跡2条と柱穴様ピット50基ほど検出した。中央部に設定した東西基本土層の作図を行った。また、東西土層に直交させて南北に土層観察用ベルトを設定した。

【第4週】6月18日～6月22日

A区北側で遺構精査を行った。また、ベルトコンベアを移動して、A区南側の調査を開始した。さらに、B区南端でも調査を開始し、土坑1基、溝跡1条を検出した。

【第5週】6月25日～6月29日

A区中央部の調査、北側と南側で遺構精査を行った。また、A区南北方向の土層観察用ベルトの精査を行い、写真撮影をした。

【第6週】7月2日～7月6日

A区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第V層面までの掘り下げを行った。北端部では検出した遺構の精査と実測を行った。降雨で冠水するとA区は発掘調査ができないため、B区にベルトコンベアを移動し粗掘りを行った。

【第7週】7月9日～7月13日

A区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第V層面までの掘り下げを行った。北端部では検出した遺構実測を行った。11日と12日の両日は降雨でA区が冠水したため、B区中央部の粗掘りを行った。M054グリッドより「人」と書かれた墨書き器が出土した。

【第8週】7月17日～7月20日

A区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第V層面までの掘り下げを行った。北端部で平面図を作成した。20日は降雨でA区が冠水したため、B区南端と中央部の粗掘りを行った。18日、中国甘肃省交流員の趙建龍氏、埋蔵文化財センター南調査課長、発掘調査見学のため来跡。19日、大仙市立豊成中学校2年生2名、体験学習のため来跡して発掘調査を体験する。

【第9週】7月23日～7月27日

A区中央部と北西部で遺構確認作業をしながら、第V層面までの掘り下げを行い、河道路1条を検出した。また、北端部で遺構の作図を全て完了し、調査を終了した。24日、国交省湯沢河川国道工事

事務所の齊藤建設監督官が現場視察のため来跡。

【第10週】7月30日～8月3日

A区の東西ベルトの除去と北西部で第V層面までの掘り下げを行った。また、南側で検出した遺構の実測を行った。B区中央部と南端部で遺構確認作業を行い、南端部で掘立柱建物跡1棟を検出した。7月31日から8月2日まで県立大曲工業高校土木建築科2年生5名がインターンシップを行った。8月1日、埋蔵文化財センター所長、大曲工業高校教諭2名、視察のため来跡。

【第11週】8月6日～8月10日

A区全体の調査範囲及び遺構配置図を作成した。また、B区中央部と南部で、粗掘りと遺構確認作業を行った。今週は降雨の日が多く、A区は常に冠水状態であり、B区での作業を中心となった。

【第12週】8月21日～8月24日

B区中央部と南部で粗掘りと遺構確認作業を行った。21日の午後と22日は雷を伴う豪雨のため、遺物や写真整理を行った。22日、神岡獄雄館へ沖田遺跡の発掘状況を撮影した写真パネルを展示した。

【第13週】8月27日～8月31日

B区中央部と南部で粗掘りと遺構確認作業を、北部で粗掘を行った。A区南部の精査を行い、調査後の全景写真を撮影して調査を終了した。また、B区東端で多数の土器片が入っている焼土遺構(後に土坑)を1基検出した。28日、中国甘粛省交流員の趙建龍氏が調査視察のため来跡。29日、文化財保護室菊池主任学芸主事、秋田大学の学生2名遺跡見学のため来跡。

【第14週】9月3日～9月7日

B区全体で遺構確認作業を行った。東端で検出した土坑の精査を行い、200片以上の土器片が出土した。7日は台風接近のため作業を休止し、遺物や写真の整理を行った。

【第15週】9月10日～9月14日

B区全体で遺構確認作業を行った。B区北側でバックホーにより表土除去を実施した。B区南端で土坑(後に井戸跡)を、東端で溝跡を検出した。

【第16週】9月18日～9月21日

B区全体で遺構確認作業を行った。B区南端の遺構の実測図を作成した。中央部で井戸跡2基を検出した。

【第17週】9月25日～9月28日

A区中央部と北西部で河道跡の堆積土除去を行い、遺物の取り上げをした。また、B区南端の遺構の実測図を作成した。

【第18週】10月1日～10月5日

B区南側で遺構の実測を全て完了し、調査を終了した。B区北側と中央部で遺構確認作業を行った。S L60河道跡の堆積土中から「寺」と墨書きされた土器が出土した。2日、取付道路の打ち合せのため、国交省湯沢河川国道工事事務所齊藤建設監督官、文化財保護室菊池主任学芸主事、埋蔵文化財センター南調査課長が来跡。

【第19週】10月9日～10月12日

A区でS L60河道跡の精査を行い、遺物の取り上げをした。B区北側と中央部で遺構確認作業を行い、河道跡1条を検出した。C区を調査するための取付道路の工事を開始した。A区北西部で河道跡

沖田遺跡

が伸びる方向を確認するため、調査範囲を拡張した。12日、大仙市教育委員会煙山文化財保護課長、渡邊主事、大仙市文化財巡りの参加者21名、見学のため来跡。

【第20週】10月15日～10月19日

市道の付け替え工事が完了し、C区の調査を開始した。A区でS L60河道跡と拡張部分の精査を、B区北側でS L83河道跡の精査を行い、遺物の取り上げをした。A区南端中央部で焼土遺構1基を検出した。

【第21週】10月22日～10月26日

27日に実施予定の沖田遺跡見学会と30日の航空写真撮影に備えて、環境整備を行った。またC区で遺構確認作業を行い、南端で土坑を1基検出した。27日、遺跡見学会を実施した。

【第22週】10月29日～11月2日

調査区全体で遺構の精査と実測、遺物の取り上げ作業を行った。30日、(株)シン技術コンサルにより空中写真撮影を実施した。

【第23週】11月5日～11月9日

全調査区で遺構の精査と実測、遺物の取り上げ作業を行い、全ての調査を終了した。S L60河道跡の堆積土から「寺」「人」の2文字が書かれた墨書き土器が出土した。安全対策として、深い箇所の埋め戻しを重機で行った。9日、埋蔵文化財センター熊谷所長が作業員へ調査終了の挨拶のため来跡。

【第24週】11月12日～11月15日

安全対策として深い箇所の埋め戻しを重機で行った。13日、シン技術コンサルが空中写真パネル選定のため来跡。14日、午前10時より埋蔵文化財センター南調査課長立ち会いのもと、国交省湯沢河川国道工事事務所齊藤建設監督官へ調査終了の確認と現場引き渡しを行った。同日午後3時、発掘機材を撤収し埋蔵文化財センターへ搬送した。翌15日、大仙市神岡支所、歴史館、警察、消防へ調査終了の挨拶を行った。同日、発掘業務を委託した宮原組へコンテナハウス等の引き渡しを行い、調査を終了した。

第4節 整理作業の方法と経過

整理作業は、秋田県埋蔵文化財センター南調査課で行った。出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測・採拓・トレースなどを行った。また、遺構図面については、発掘現場で実測した実測図をもとに第2原図を作製し、それをトレースした。放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

第2章 調査の記録

本調査で検出された遺構は、縄文時代の配石遺構1基、平安時代の掘立柱建物跡1棟、土坑4基、焼土遺構1基、河道跡3条、近世以降の井戸跡8基、溝跡5条、柱穴様ピット55基である(第2図)。これらの遺構は調査区全体にかけて検出された。このうち縄文時代の配石遺構は第IV層中で検出されたが、以外の遺構は第V層(地山)上面で検出された。

遺物は主に第I・II層で近世以降の陶磁器、第III層で平安時代の土師器、須恵器、第IV層で縄文時代の土器などが出土した。また、遺構堆積土中から平安時代の土師器、須恵器、近世の陶磁器などが出土した。

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1 検出遺構

配石遺構

S Q78配石遺構(第5図、図版2-1)

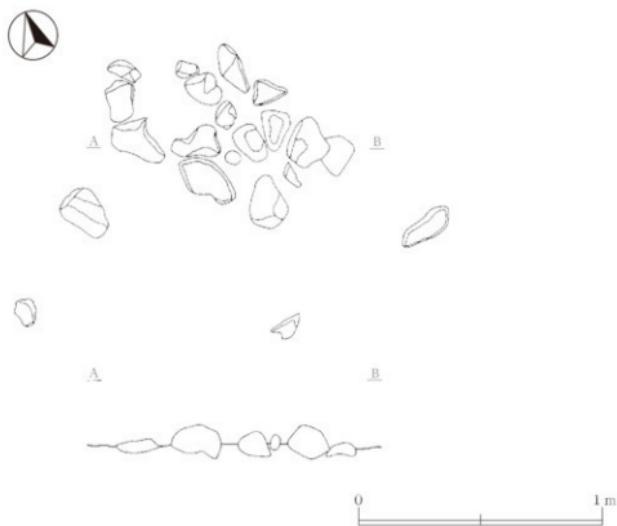
M I 46グリッドの第IV層中で検出した。長軸(北西-南東)1.52m×短軸(北東-南西)1.4mの楕円形の範囲内に、長さ20~55cm・幅10~33cmの扁平な礫と拳大~人頭大の角礫計21個が集められていた。いずれの礫にも加工痕や被熱痕跡は見られない。礫群を取りあげた後に掘り込みは検出されなかった。

遺構に伴う遺物は出土しなかったが、本遺構を検出した付近の第IV層中で縄文時代後期の土器細片が出土していることから、本遺構の所属時期は縄文時代後期に位置するものと考えられる。

2 遺構外出土遺物

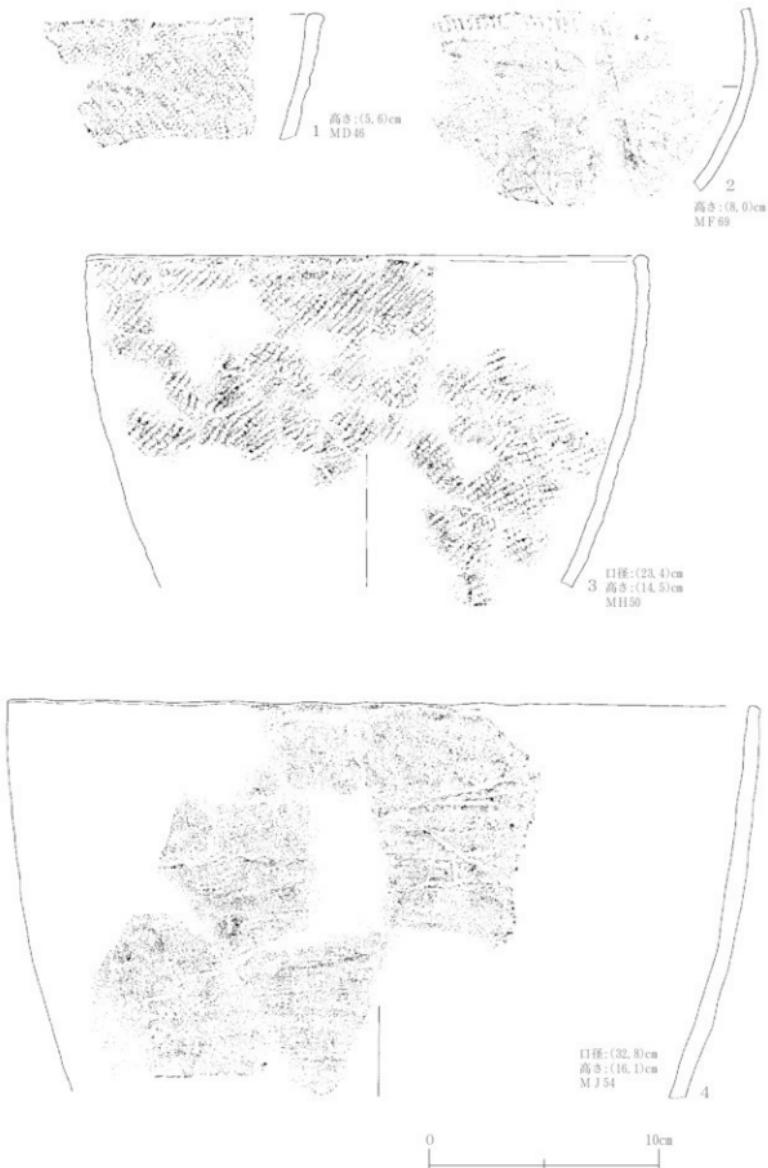
遺構外からは、縄文時代後期の土器片が240点ほど出土した。なお、全体の形状を把握できる接合資料はなかったが、接合復元した土器資料を9点掲載した(第6図1~4、第7図5~9)。

1は深鉢形土器の口縁部の破片である。R L縄文が横位回転施文されている。2は深鉢形土器の胴部下半の破片である。胴部上位には横位に2条施された沈線間に刻み目が施され、その刻み目上の1カ所には瘤状の小突起が付けられている。この文様下の胴部は無文である。3と4は深鉢形土器の口縁部~胴部上半の破片である。3にはR L縄文が縦位回転施文されているが、4は無文である。5と6は深鉢形土器の胴部下半~底部の破片である。5は胴部に結節のあるL R縄文が縦位回転施文されており、底面には木葉痕が認められる。6の胴部は無文である。底部はその下面内周側がくぼんでおり、いわゆる輪高台状もしくは上げ底をなしている。7と8は深鉢形土器の破片で、同一個体である。7は口縁部の破片である。R L縄文を縦位回転施文した後で、口縁と平行する沈線が2条施され、その沈線間には横位に断続的に沈線が施されている。この下部には縄文を地文として、やや傾いた状態で沈線が施されている。また、口縁には山形の小突起がある。8は口縁部下半から胴部の破片である。口縁部にはR L縄文が縦位回転施文された後に入組状の文様が施されている。また、口縁部下位には横位に2条の平行沈線が施されおり、この沈線間には横位に断続的に沈線が施されている。胴部には

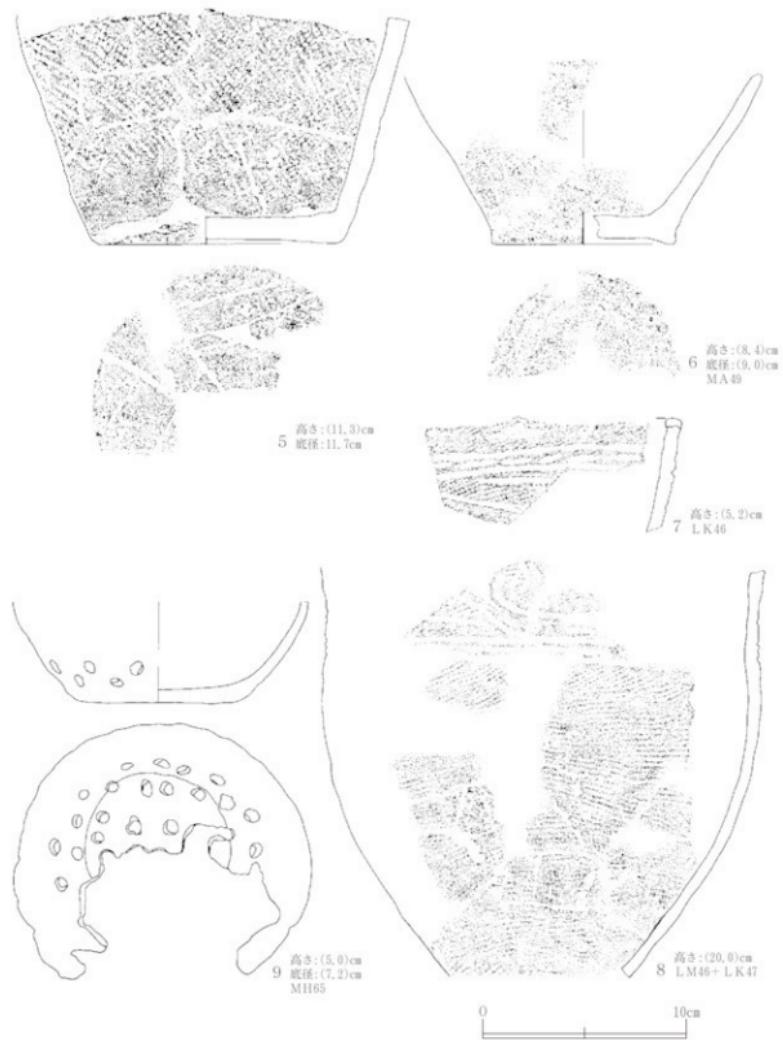


第5図 S Q 78配石遺構実測図

RL縄文が縦位と斜位に回転施文されている。9は小型の鉢形を呈する多孔底土器の底部破片である。無文の底部破片の下位側面から底面には孔が20コ穿たれており、孔は内側から外側に向けて穿たれたものと思われる。



第6図 繩文土器実測図(1)



第7図 繩文土器実測図(2)

第2節 平安時代の遺構と遺物

1 検出遺構と遺物

(1) 堀立柱建物跡

S B 63堀立柱建物跡(第8図、図版2-2)

MB32、MA・MB・MC33、MA・MB34グリッドの第V層の地山上面において、規則的に配列する8基の柱穴を検出した。本来は北西側にもう2基の柱穴があったと思われるが、田地の耕作等によって地山まで削平されていたため検出できなかった。

桁行3間×梁行1間の堀立柱建物跡である。桁行総長は東側柱列(P 1～P 4)で5.62m、柱間距離は北からP 1～P 2間1.94m、P 2～P 3間1.86m、P 3～P 4間1.82m、梁行総長は南側柱列(P 4～P 6)で5.0m、柱間距離は東からP 4～P 5間2.46m、P 5～P 6間2.54mである。柱掘形は径0.42～0.55mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.15～0.32mである。堆積土は黒褐色土の1層であり、柱痕は認められなかった。建物方位は東側柱列でN-38°-Wである。

遺物は出土しなかったが、周辺から土師器甕の破片が出土しており、本遺構の所属時期は平安時代と考えられる。

(2) 土坑

S K 58土坑(第9図)

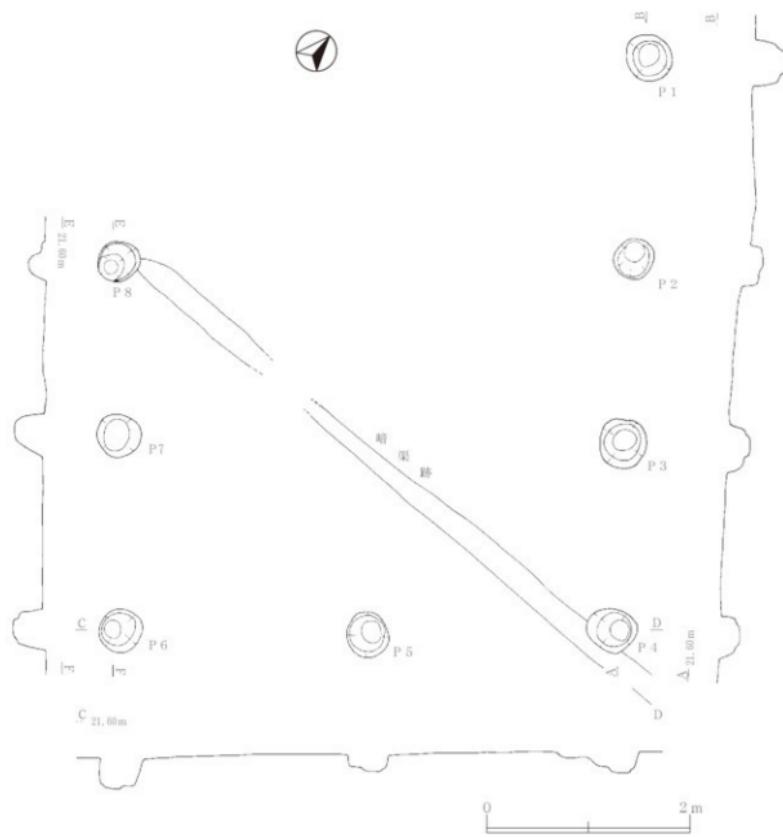
ME・MF34グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはSK 85土坑がある。平面形は長軸(北東-南西)0.77m×短軸(北西-南東)0.77mの不整円形を呈し、検出面からの深さは0.1mである。底面は凸凹しており、壁の傾きは緩やかである。堆積土は1層である。1～2cm大の黒褐色土塊、炭化物粒、土器片が混在している。なお、土坑内に被熱痕は認められず、焼土や土器片などは本土坑に投棄されたものと考えられる。遺物は土師器甕の破片が32点出土した。

S K 64土坑(第9図、図版2-3・4)

L L47グリッドの第V層上面で検出した。北側の3分の1程度を確認調査トレーニチのため、欠損している。平面形は長軸(北西-南東)1.95m×短軸(北東-南西)1.76mの梢円形を呈し、検出面からの深さは0.36mである。底面は部分的に凸凹している。壁の傾きは北と南側がやや急で、東と西側は緩やかである。堆積土は13層に分けられた。全層ともかたくしまっており、堆積土の上位層から下位層にかけて土器片が混入している。これらの土器片は投棄されたものであり、本土坑は人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器甕の破片、土師器甕の破片、土師器鍋の破片、須恵器甕の破片、土製品(土鍾)1点を含め計257点出土した。そのうち11点を掲載した(第10・11図)。

S K 77土坑(第9図、図版2-7)

LO 44グリッドの第V層上面で検出した。平面形は長軸(東-西)0.57m×短軸(北-南)0.45mの梢円形を呈し、検出面からの深さは0.15mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは東側がやや急で、西側は緩やかである。堆積土は4層に分けられた。全層に土器片が混入しており、3層には焼土

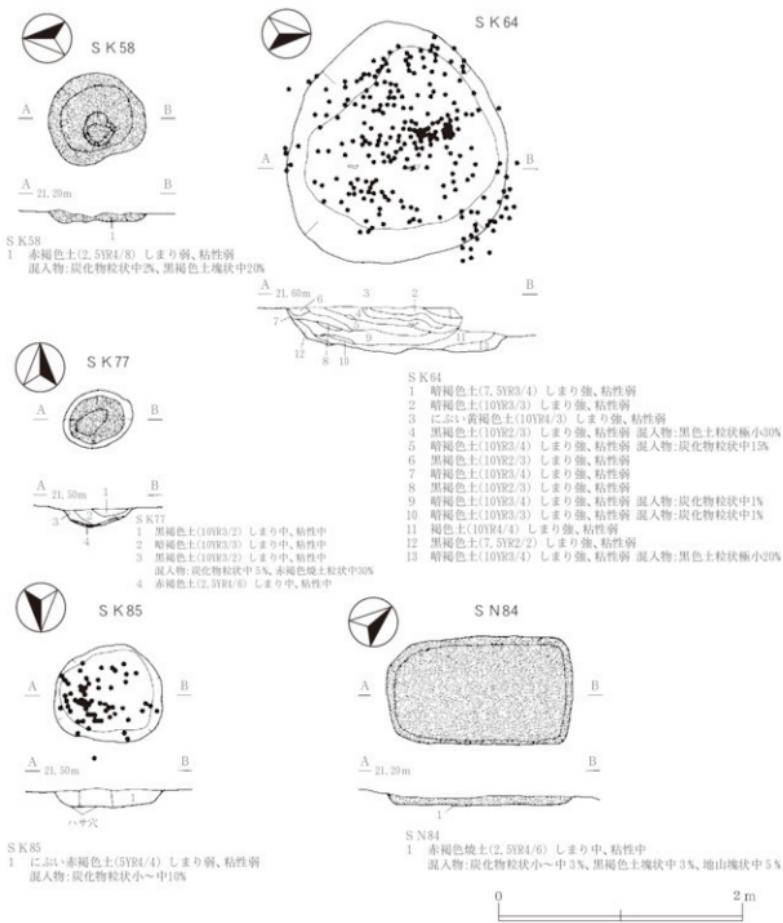


第8図 S B 63掘立柱建物跡実測図

粒が多量に混入している。また、4層は赤褐色焼土であるが、土坑内に被熱痕は認められなかったことから、焼土や土器片は本土坑に投棄されたものと考えられる。遺物は土師器壺の破片、土師器甕の破片などが9点出土した。遺物は2点掲載した(第12図1・2)。なお、本遺構の3層中から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は 1110 ± 30 yr BP (890~925AD, 935~980AD)であった。

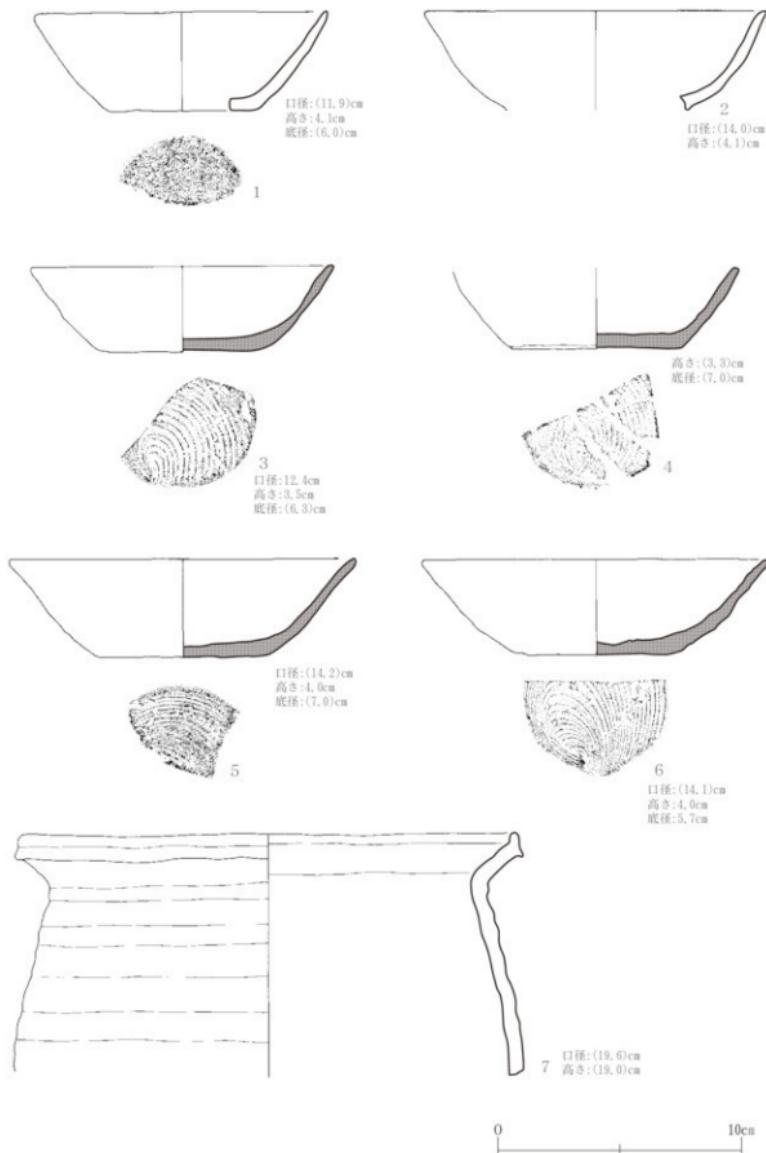
SK85土坑(第9図、図版2-5・6)

M E 34グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはSK58土坑がある。東側を近現代の柱穴に切られている。平面形は長軸(北東-南西)0.9m×短軸(北西-南東)0.8mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.14mである。底面は平坦で、壁の傾きはやや急である。堆積土は4層に分けられた。1~3層は近現代の柱穴の埋土である。4層は本土坑の堆積土である。本層には土器片が混在しており、人

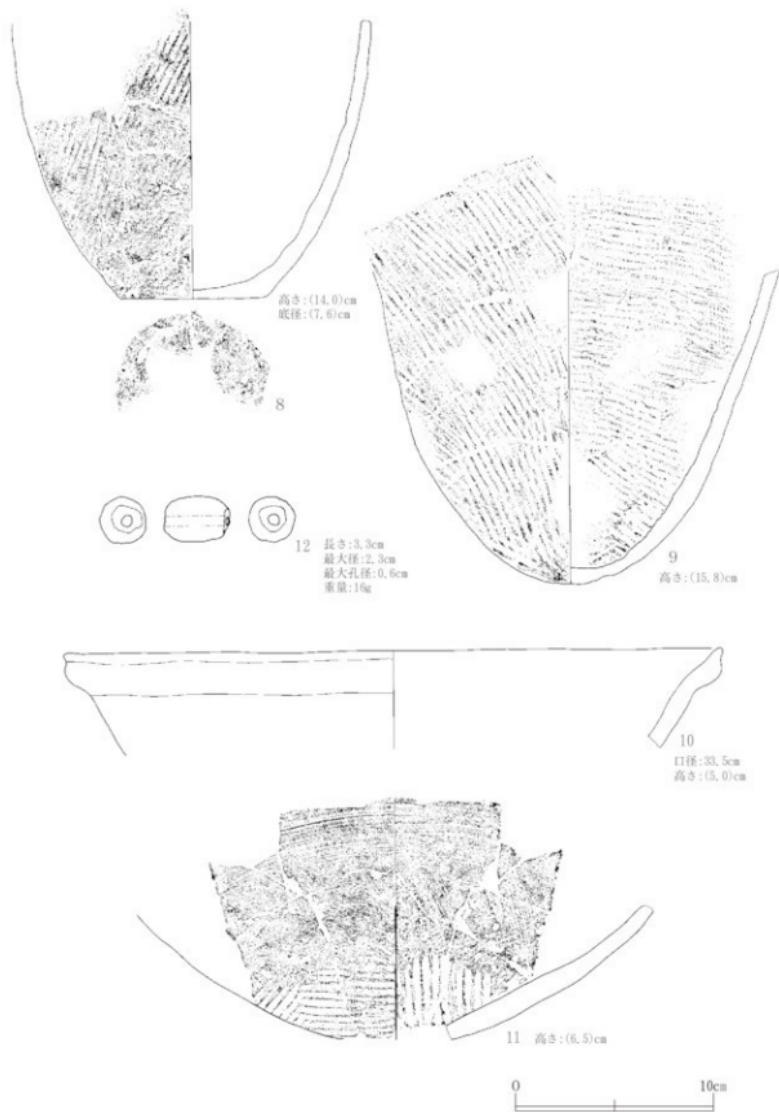


第9図 S K 58・64・77・85土坑、S N 84焼土遺構実測図

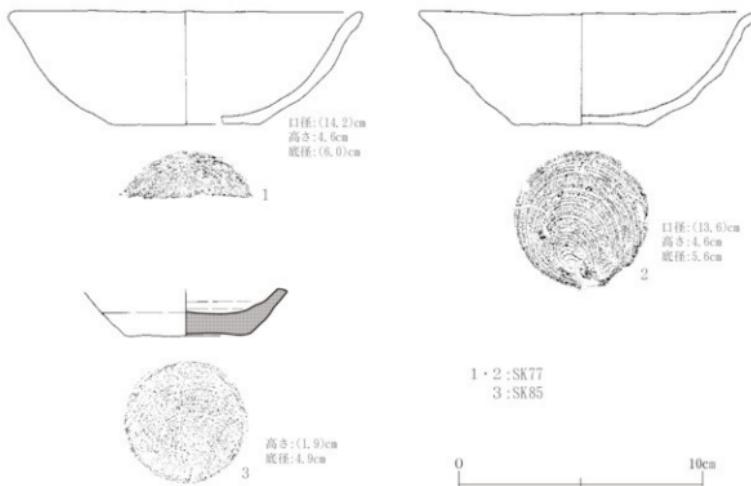
為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器環の破片、土師器甕の破片などが62点出土した。そのうち1点を掲載した(第12図3)。



第10図 SK 64土坑出土土師器、須恵器実測図(1)



第11図 SK64土坑出土土師器、土製品実測図(2)



第12図 S K77土坑出土土師器、S K85土坑出土須恵器実測図

(3) 焼土遺構

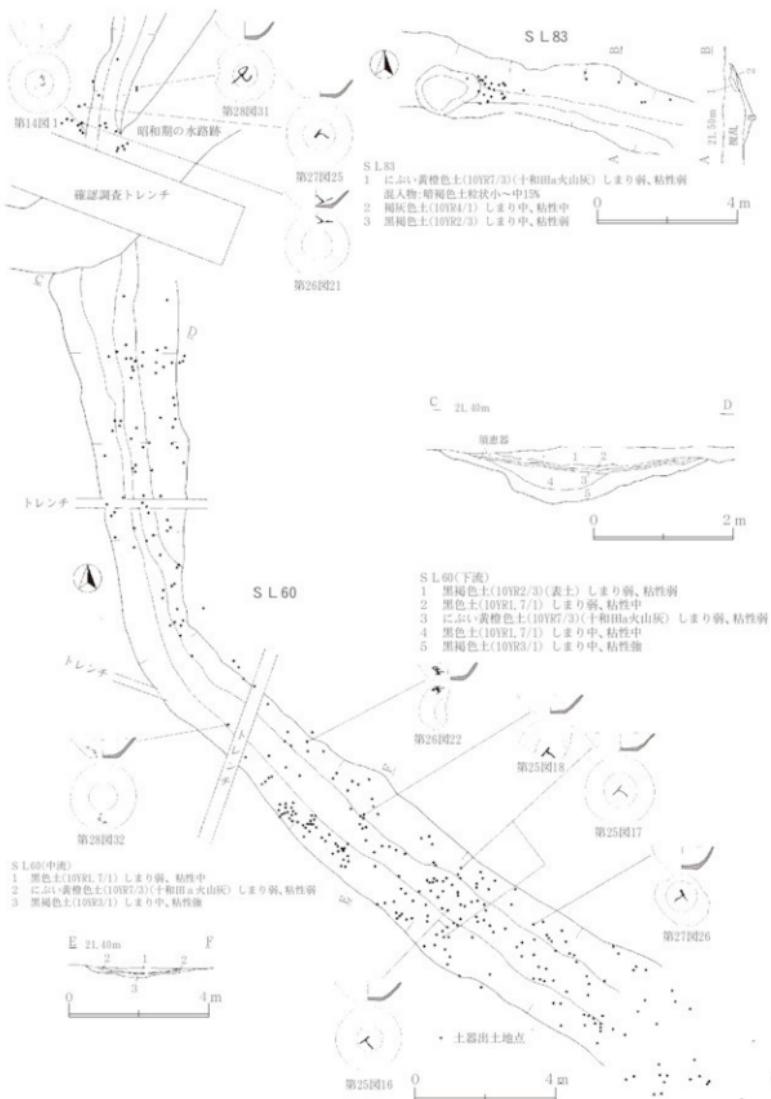
S N84焼土遺構(第9図、図版2-8)

MK・ML47グリッドの第V層上面で検出した。S L60河道跡に隣接している。被熱範囲は長軸(北東-南西)1.53m×短軸(北西-南東)0.93mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.07mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。この底面や壁面には被熱を受けて硬化した箇所が部分的に認められた。堆積土は1層である。炭化物粒と黒褐色土塊や地山塊が混入している。遺物は出土しなかった。なお、本遺構の層下部から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は 1190 ± 30 yr B P (780~890AD)であった。

(4) 河道跡

S L60河道跡(第13図、図版3-1~4)

MA・MB・MC・MD42、MB・MC・MD43、MD・ME44、ME・MF・MG46、MH・MI・MJ・MK47、MI・MJ・MK・ML48、MK・ML・MM・MN49、MM・MN・MO50、MN・MO51、MN・MO52、MN・MO53、MN・MO54、MO55、MO56グリッドの第V層上面で検出した。調査区の南東から北西にかけて延びる河道跡で、下流部はS L86河道跡に流れ込んでいる。検出した範囲で長さ約86.6m、幅1.0m~3.6m、最深0.8mである。平均の河幅は約2.3mである。上・中流部の底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。勾配も緩やかで、検出面からの深さは0.3m~0.4mである。堆積土は3層に分けられた。このうち2層はにぶい黄橙色を呈する十和田a火山灰の堆積層であった。レンズ状に堆積していることから自然流入の堆積と考えられる。下流部の上部は昭和時代の水路や確認調査トレッチによって欠損している。底面は小さな凹凸がある。



第13図 S L 60・83河道路跡実測図

沖田遺跡

見られやや丸みを帯びており、壁の傾きは東側は急で段差もあるが、西側は緩やかである。勾配は上・中流部に比べて急であり、検出面からの深さは0.5m～0.8mである。堆積土は5層に分けられた。このうち3層は厚さ3～6cmで、にぶい黄橙色を呈する十和田a火山灰の堆積層であった。上・中・下流部とも河川の堆積であることを示すようにやや色を変えながら層状にしま模様が見られる。

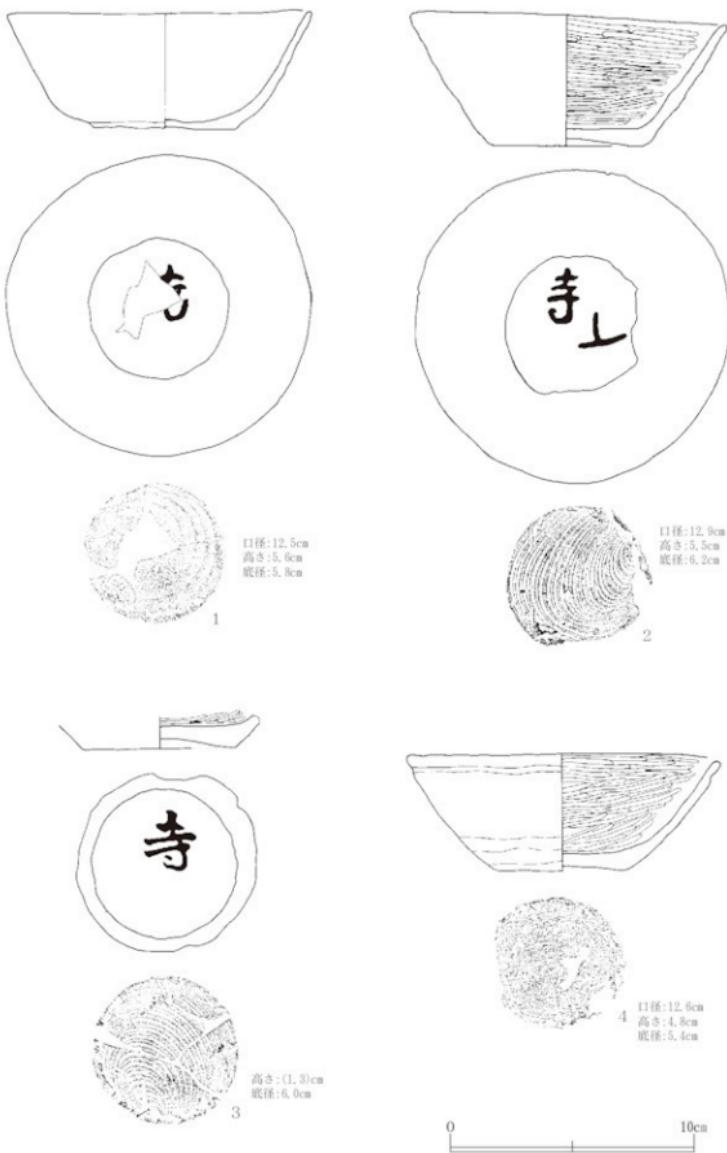
遺物は本遺構の上位～下位層全体から出土した。上流部では土師器環の破片、土師器甕の破片、須恵器甕の破片等が少量出土した。中流部のMK48、ML・MM49、MM・MN50、MN51グリッドでは土師器環の破片、土師器高台付环の破片、土師器蓋の破片、土師器甕の破片、土師器鍋の破片、須恵器環の破片、須恵器高台付环の破片、須恵器甕の破片、須恵器壺の破片が多量に出土し、これに混じって土製品(土鍤)が4点、石製品(砥石)が1点出土した。下流部ではMO55グリッドを中心に、土師器環の破片、土師器蓋の破片、土師器甕の破片、須恵器環の破片、須恵器甕の破片、須恵器壺の破片などが多量に出土した。出土した遺物のうち139点を掲載した(第14～35図)。これらのうち土師器環3点(第14図1～3、図版3-7・8、図版4-1)と須恵器環12点(第25・26図20～23、第27図25・26、第28図31・32、図版4-2～6)の計15点は墨書き器である。なお、本遺構から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は 1210 ± 30 yr B P (775～875AD)であった。

S L 83河道跡(第13図、図版3-5・6)

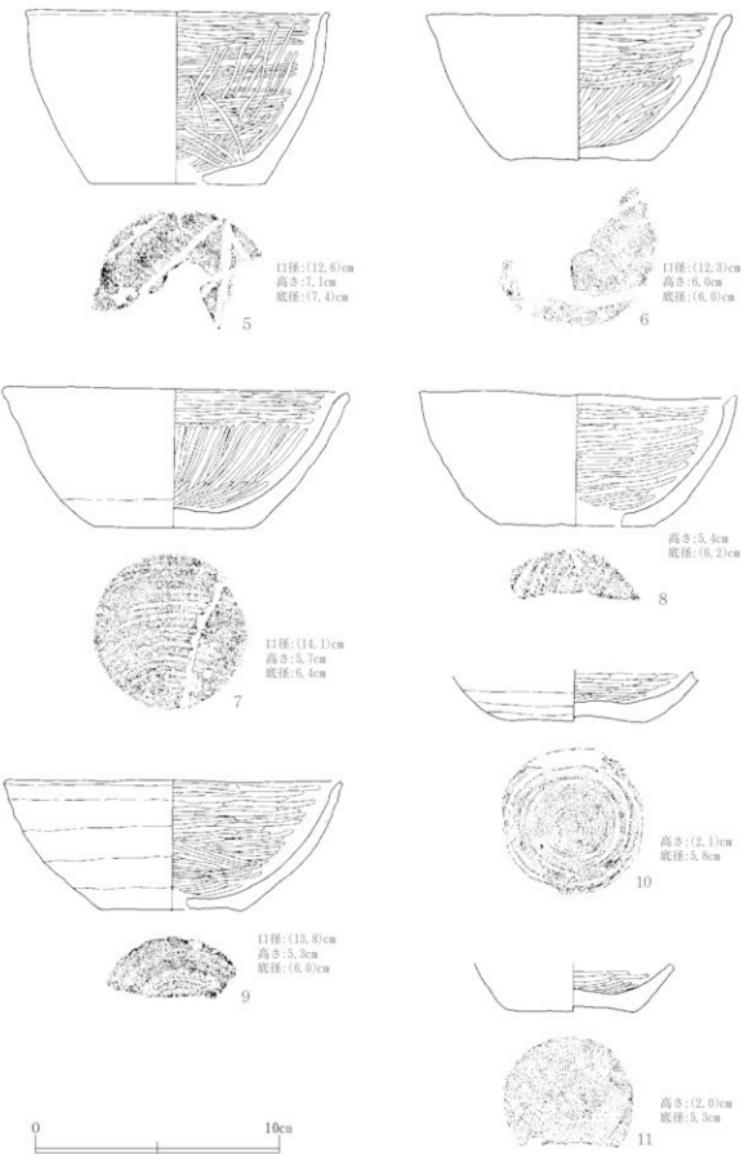
MB・MC・MD62、MB・MC・MD63グリッドの第V層上面で検出した。調査区北側を東～西に直線的に延びる河道跡で、東端・西端はそれぞれ調査区外に延伸している。本遺構の上部は土地造成によって削平されている。検出した範囲で長さ約8m、幅1.28m～2.2m、深さ0.86mである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は3層に分けられた。このうち1層は十和田a火山灰の堆積層であった。遺物は底部西端の凹み部分を中心にして、土師器環の破片、土師器甕の破片、須恵器甕の破片、須恵器壺の破片など多量に出土した。そのうち12点を掲載した(第36・37図)。

S L 86河道跡(第38図)

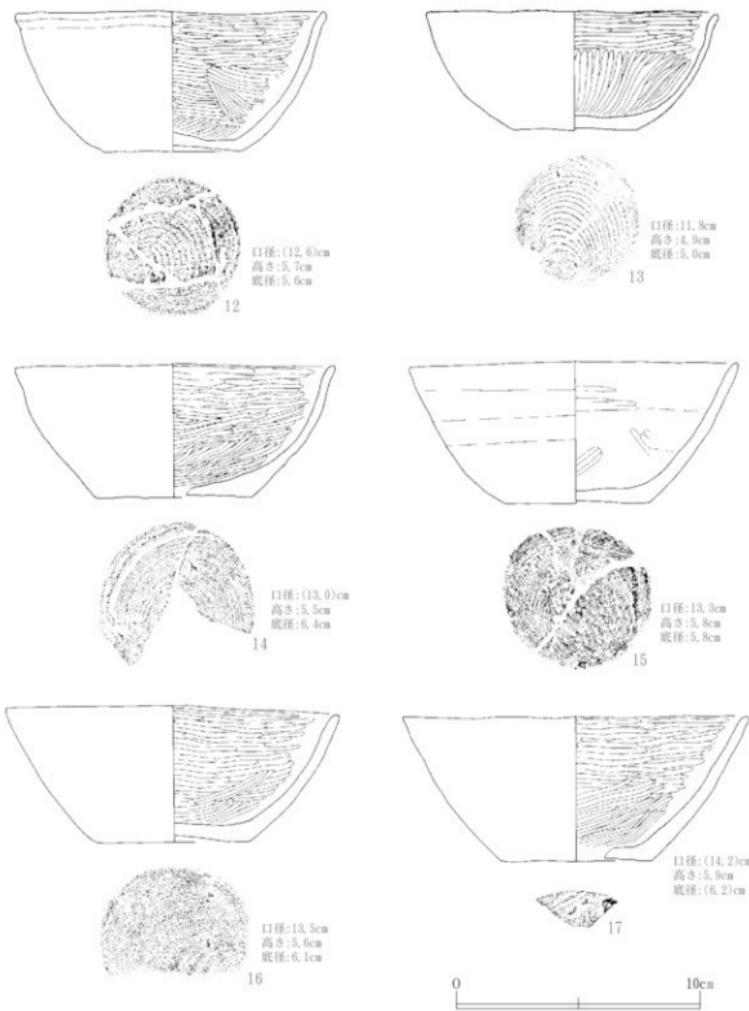
調査区北西端部のMN・MO・MP・MQ・MR・MS56、MM・MN・MO・MP・MQ57、MN・MO・MP・MQ58、MN・MO・MP・MQ59グリッドの第V層上面で検出した。北東から南西にかけてL字状に延びる河道跡で、下流部は調査区外南西に延伸しているものと思われる。東側上端は昭和の水路に切られている。長さ19.6m、幅12.48m、検出面からの深さは1.68mである。底面は平坦で、壁の傾きは緩やかである。堆積土は9層に分けられた。本堆積土中において十和田a火山灰は確認されなかった。遺物は土師器環の破片、須恵器環の破片などが9点出土した。なお、本遺構から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は 1510 ± 30 yr B P (535～605AD)であった。



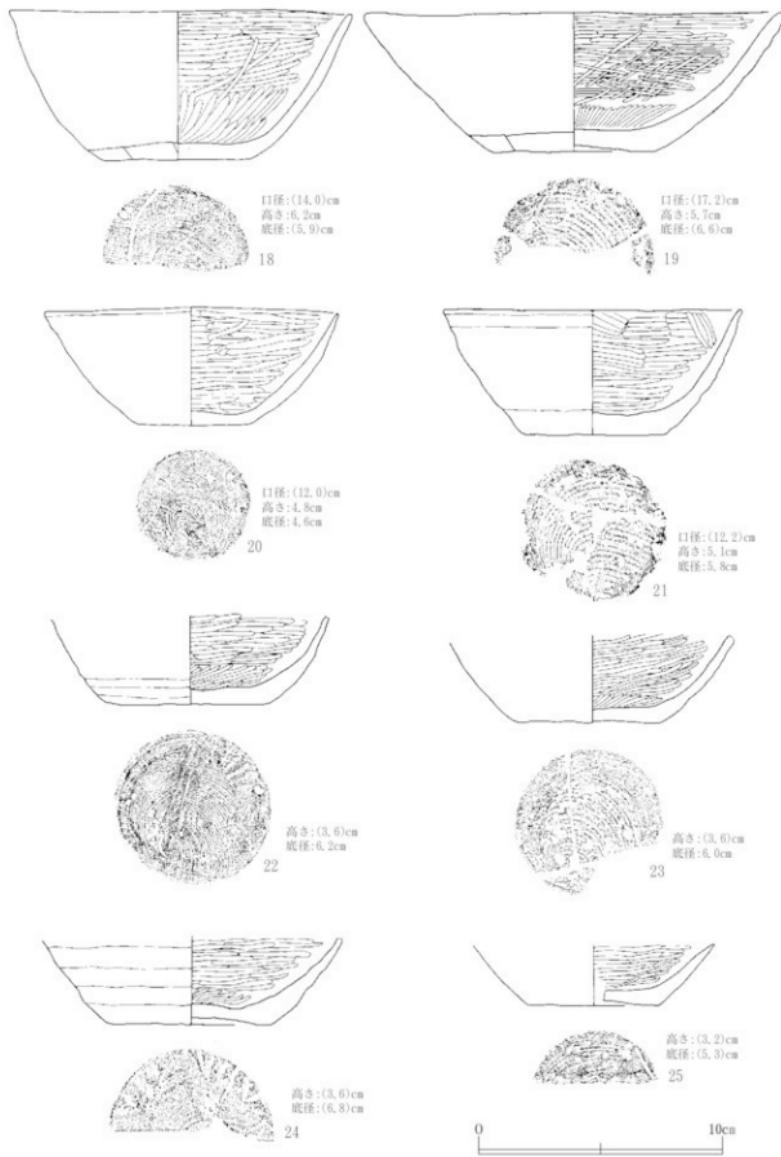
第14図 S L 60河道跡出土土師器実測図(1)



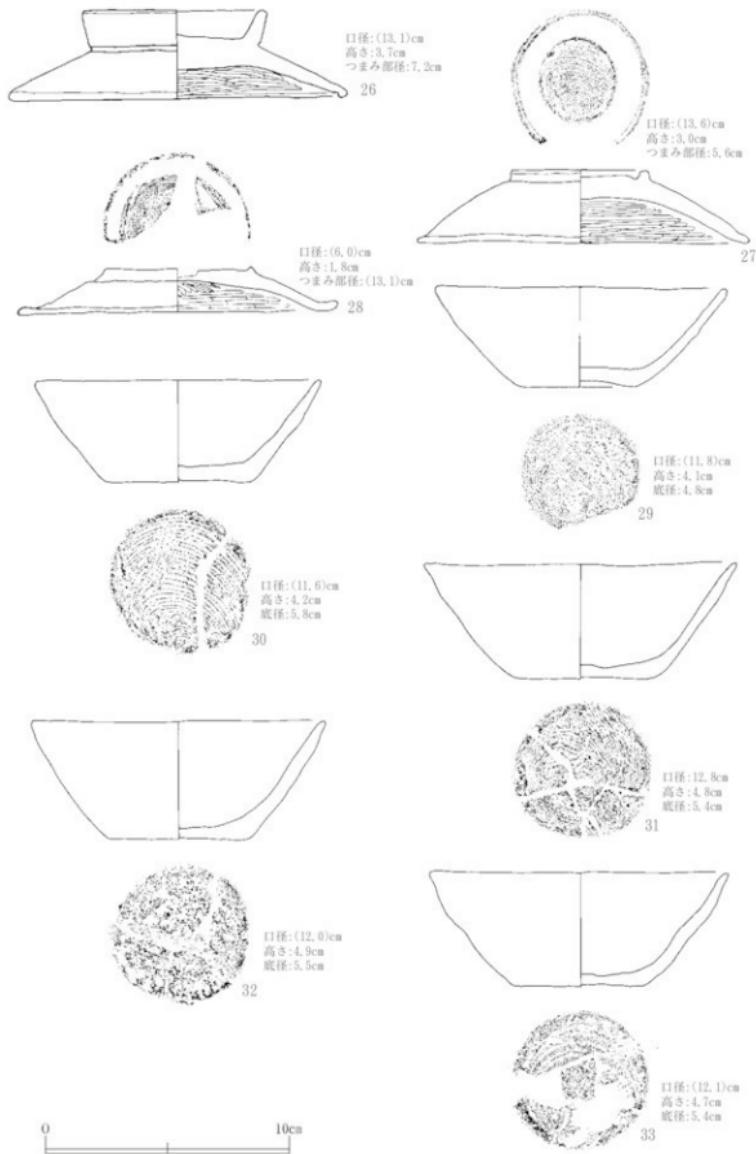
第15図 S L60河道跡出土土師器実測図(2)



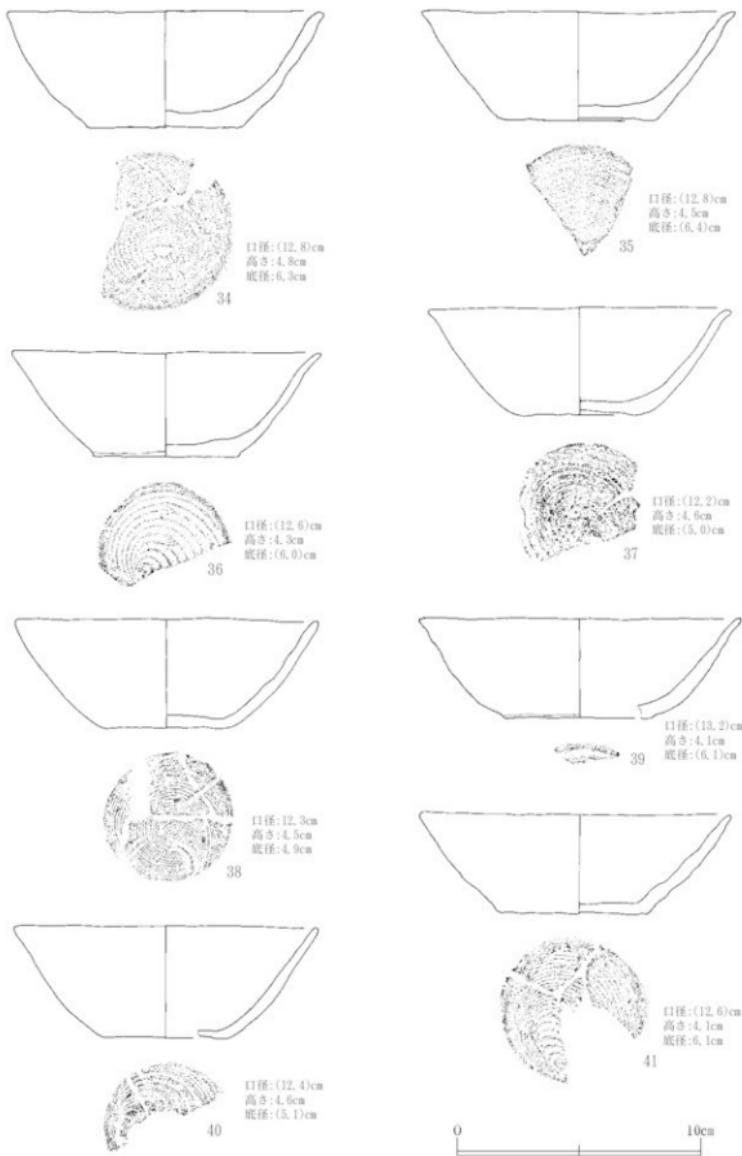
第16図 S L 60河道跡出土土器実測図(3)



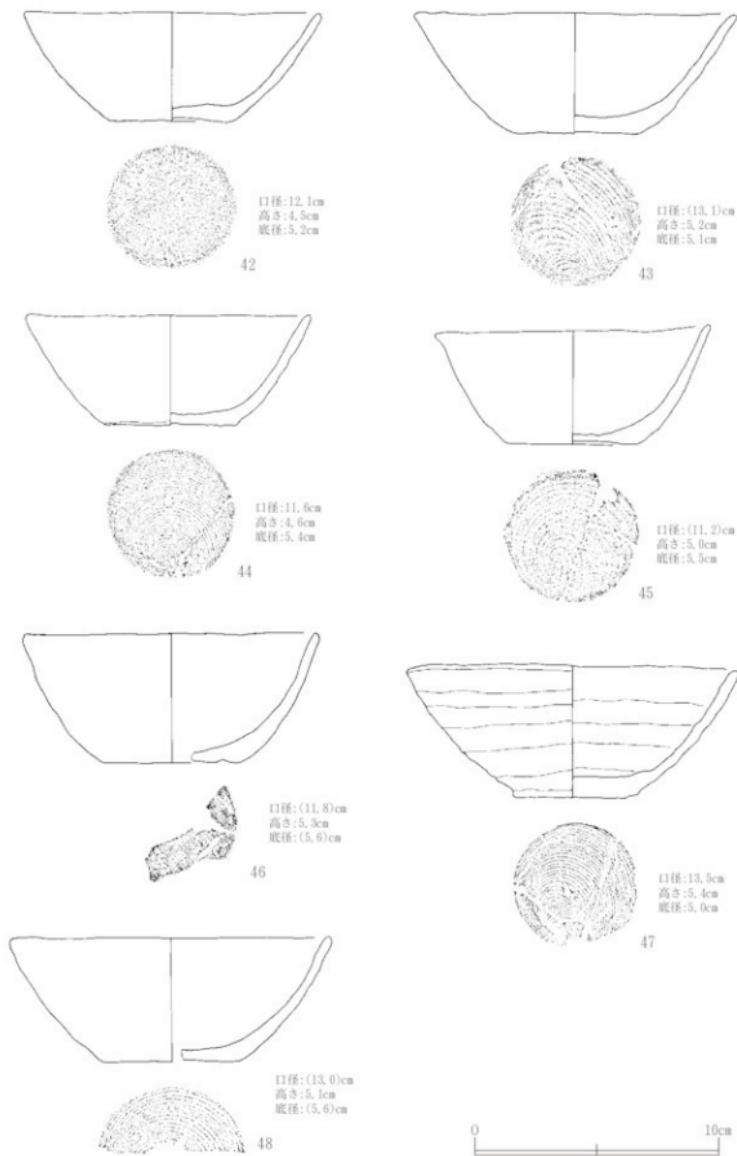
第17図 S L 60河道跡出土土器実測図(4)



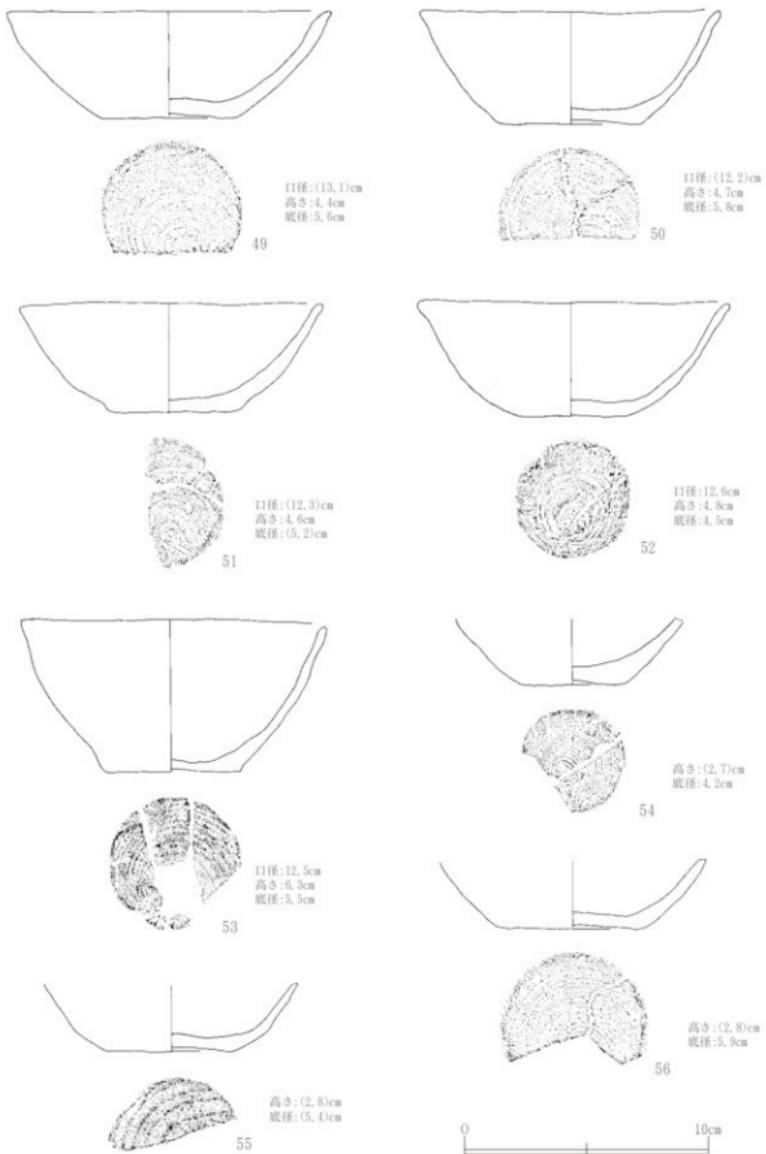
第18図 S L 60河道跡出土土師器実測図(5)



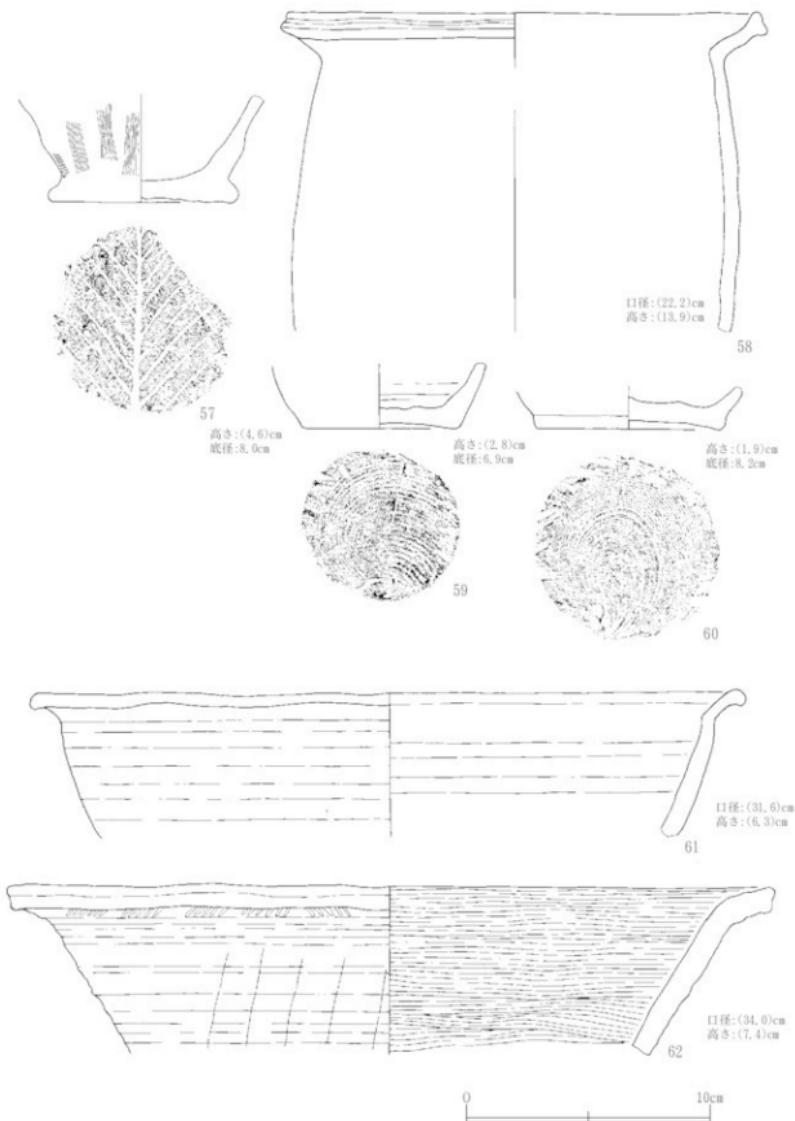
第19図 S L 60河道跡出土土師器実測図(6)



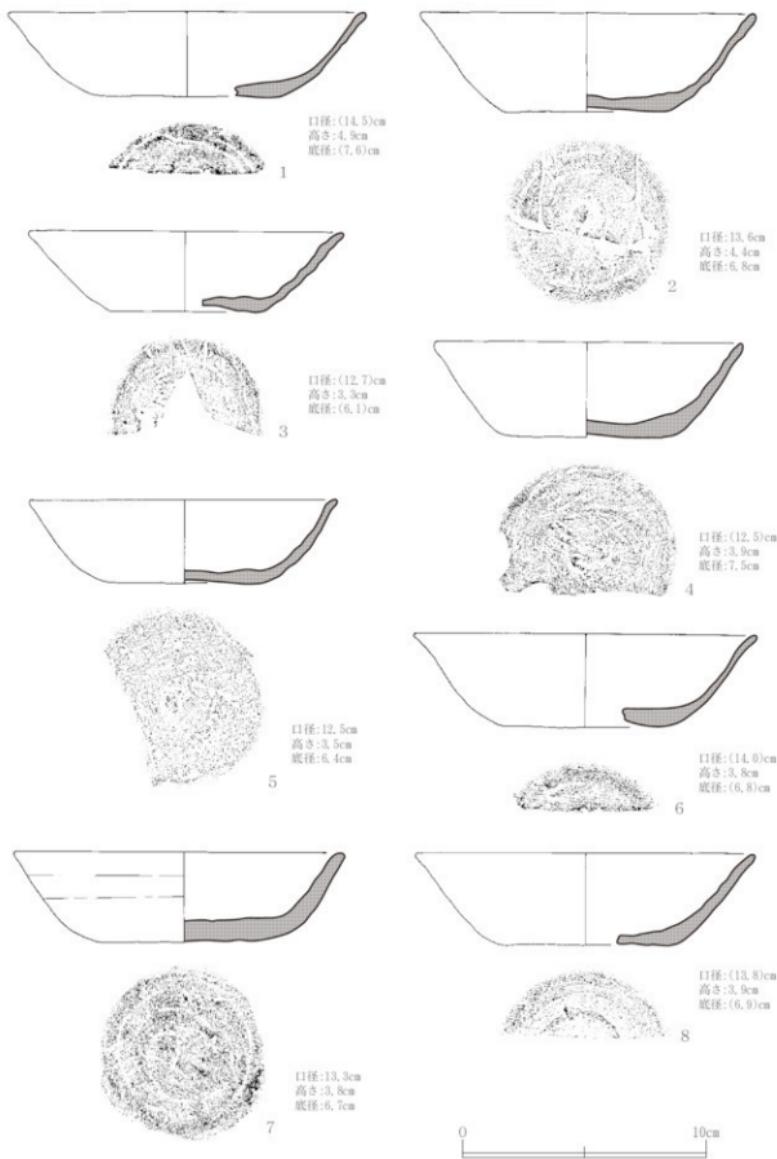
第20図 S L 60河道路跡出土土器実測図(7)



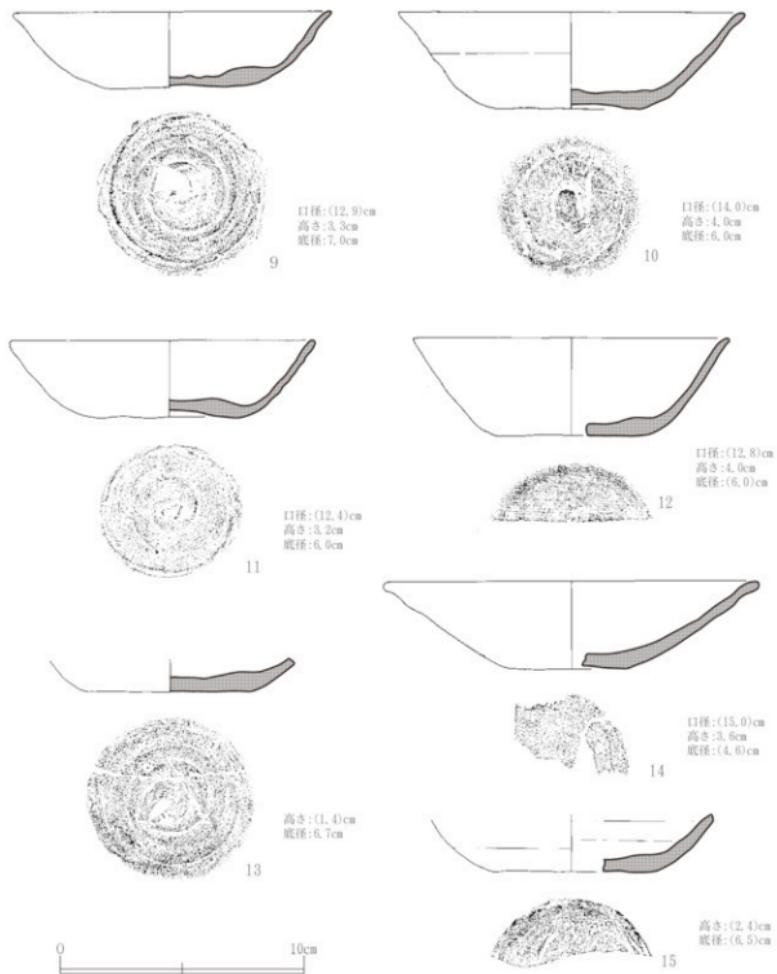
第21図 S L 60河道跡出土土師器実測図(8)



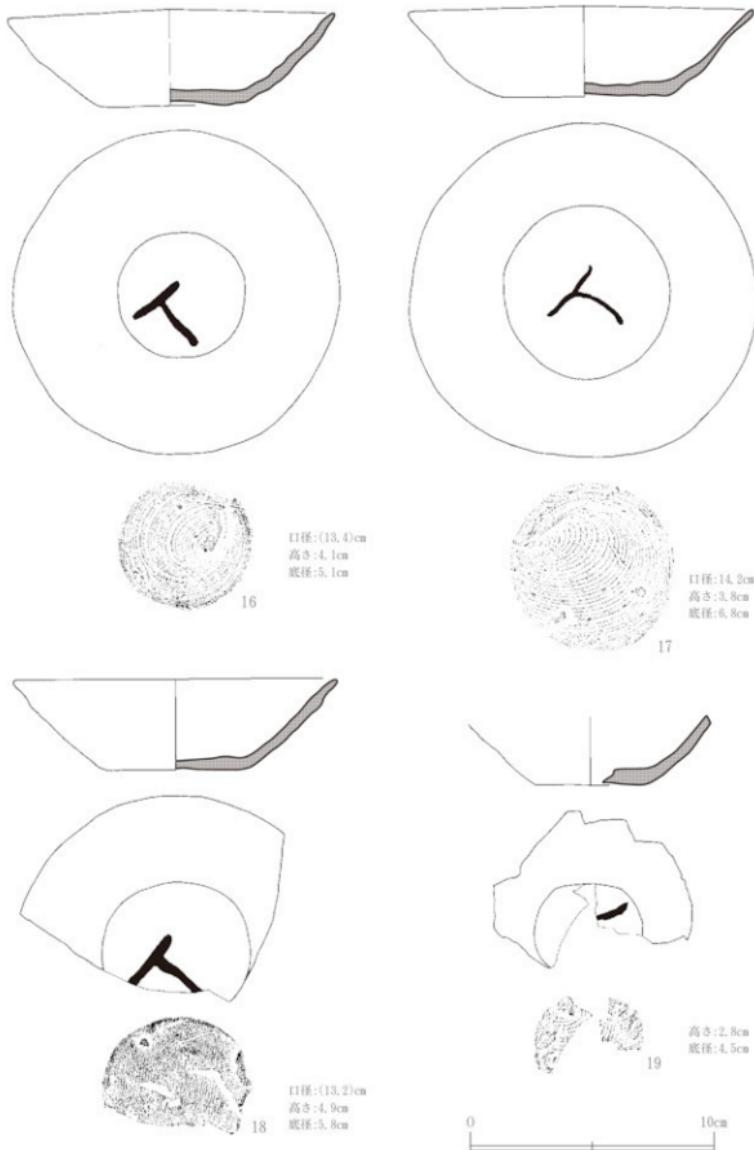
第22図 S L 60河道跡出土土器実測図(9)



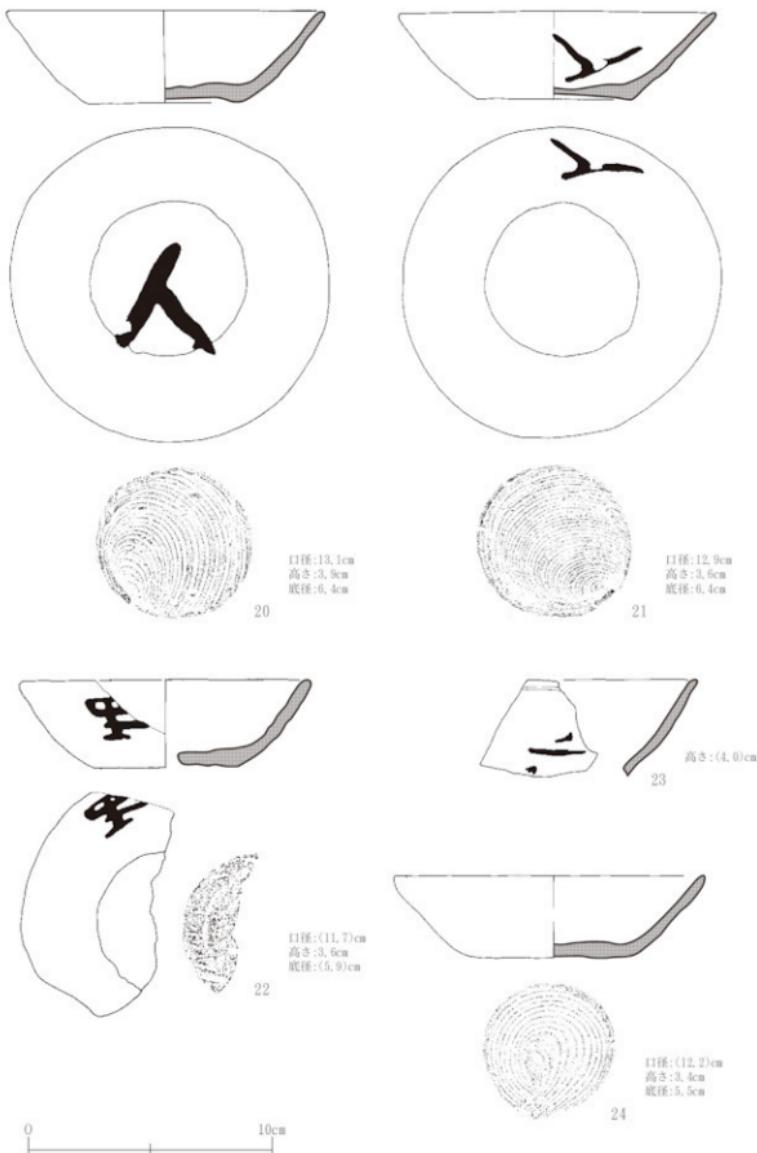
第23図 S L 60河道跡出土須恵器実測図(1)



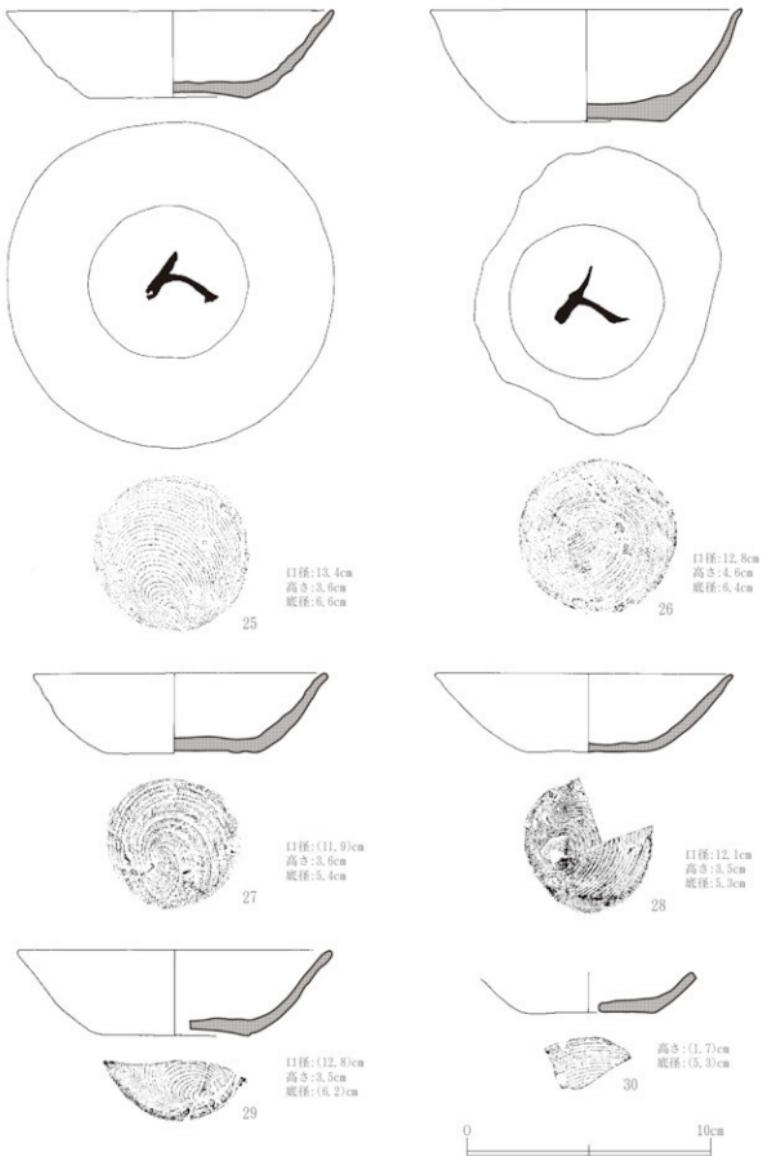
第24図 S L 60河道路跡出土須恵器実測図(2)



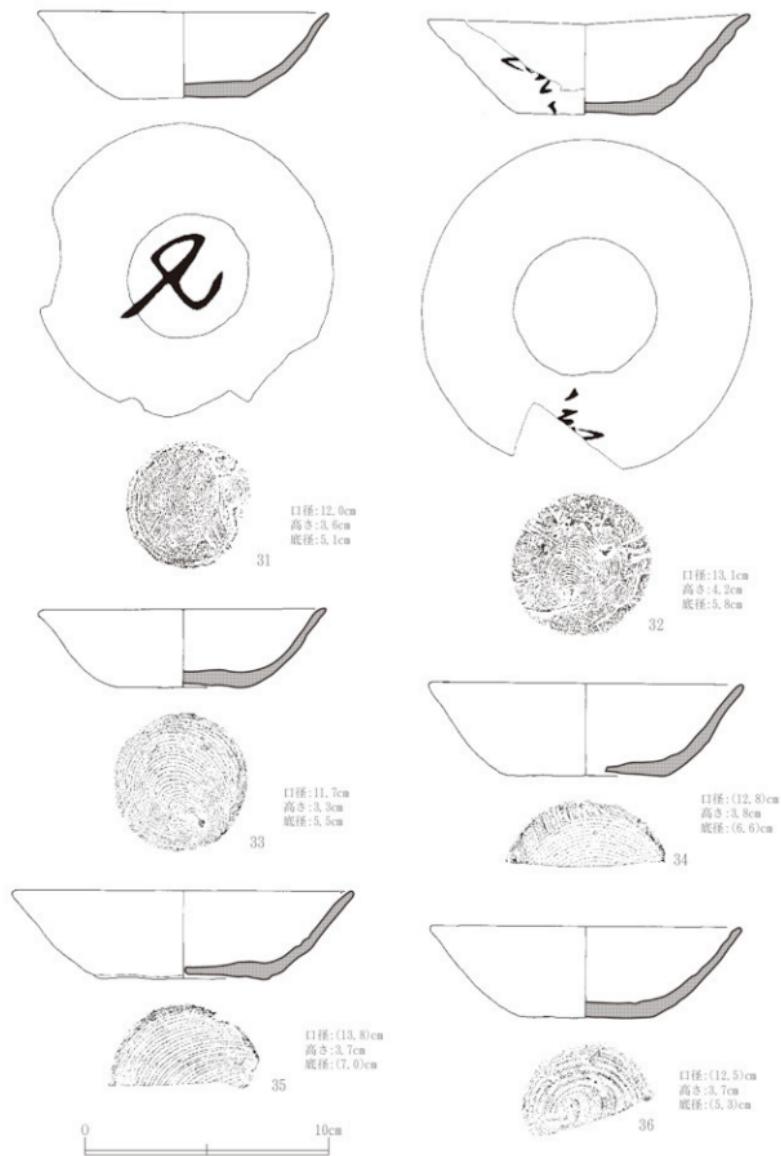
第25図 S L 60河道路出土須恵器実測図(3)



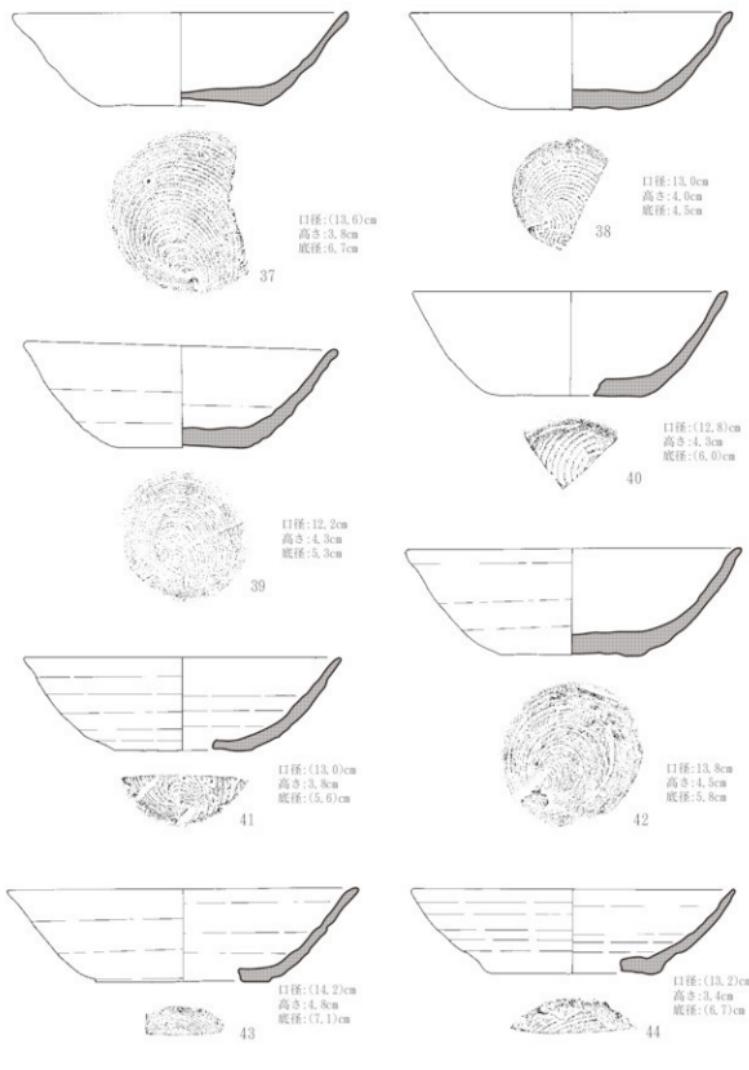
第26図 S L 60河道跡出土須恵器実測図(4)



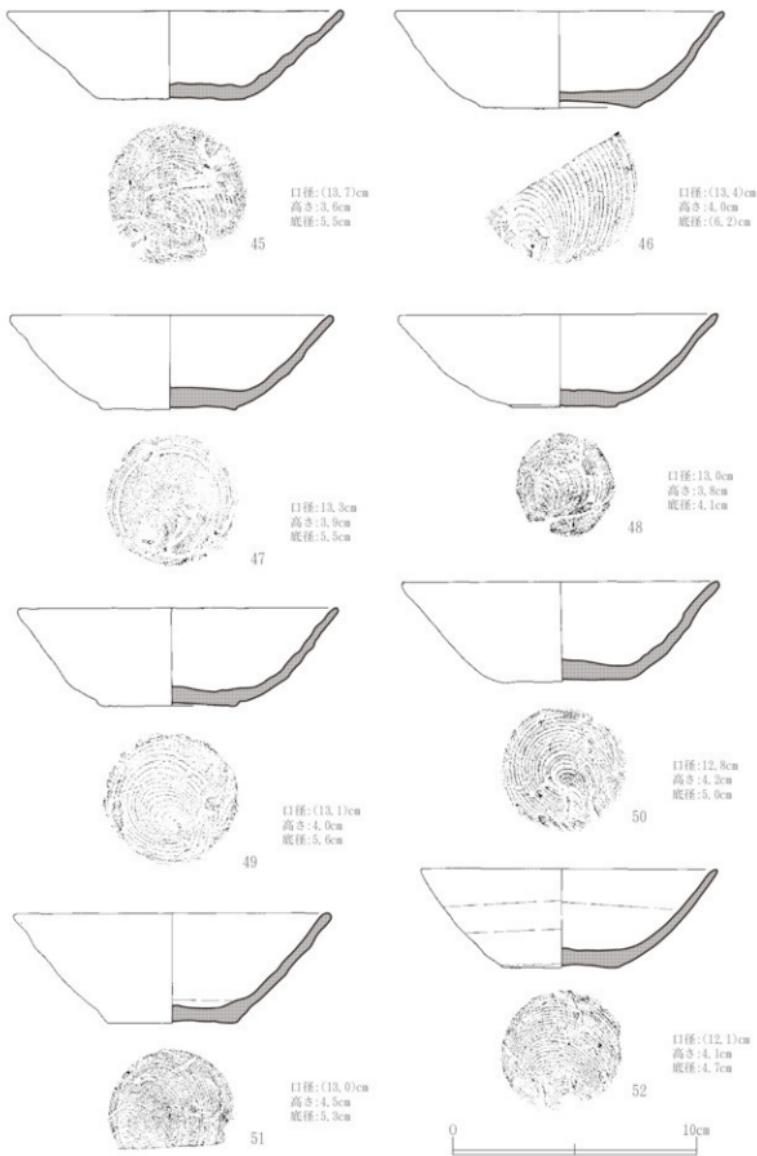
第27図 SL 60河道跡出土須恵器実測図(5)



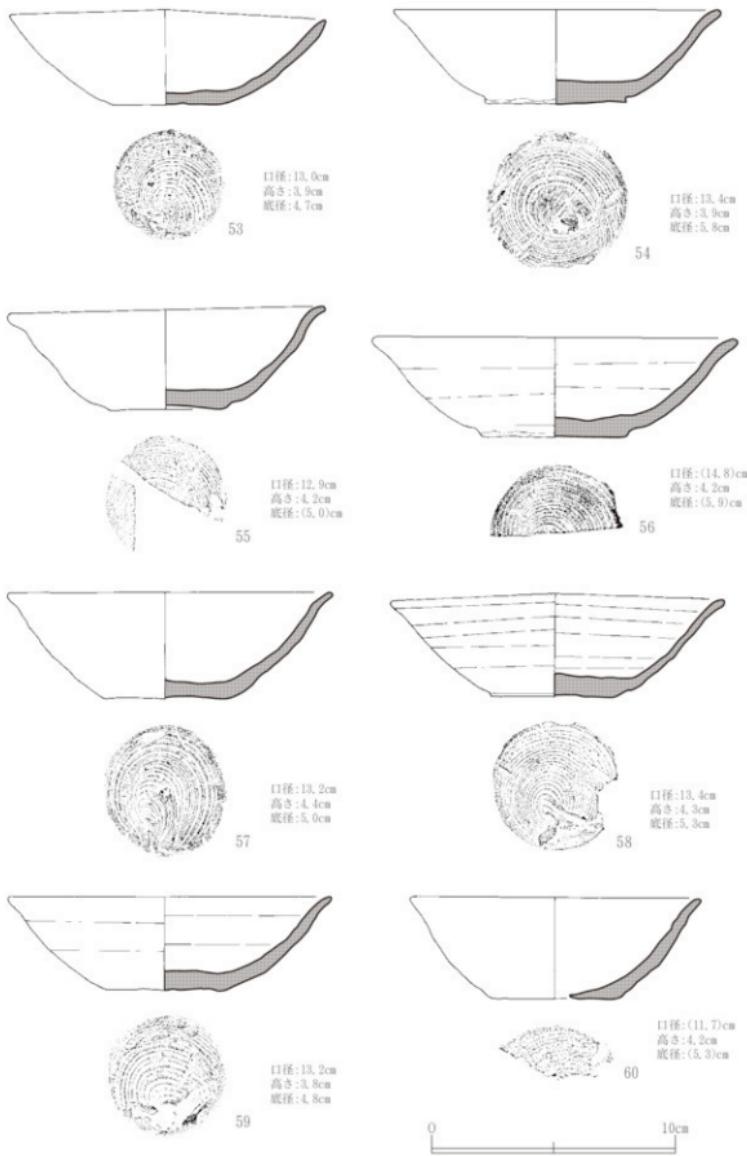
第28図 S L 60河道路跡出土須恵器実測図(6)



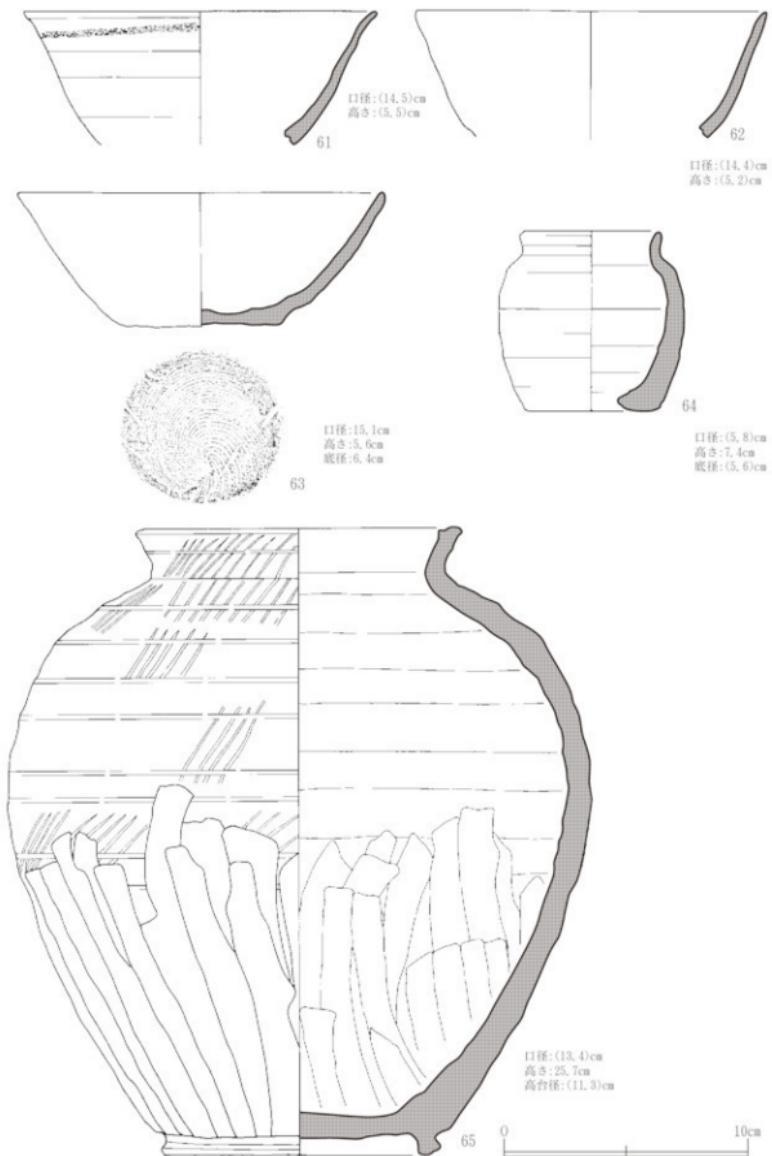
第29図 S L 60河道跡出土須恵器実測図(7)



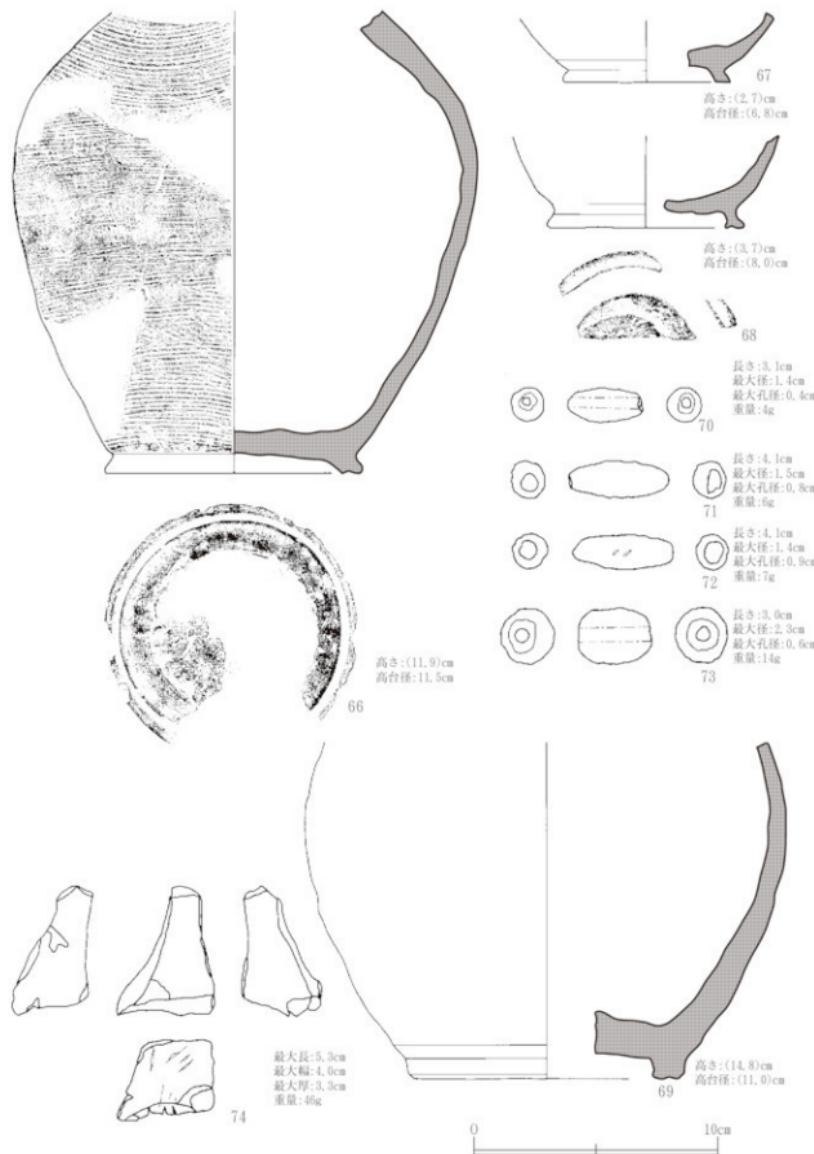
第30図 S L 60河道路跡出土須恵器実測図(8)



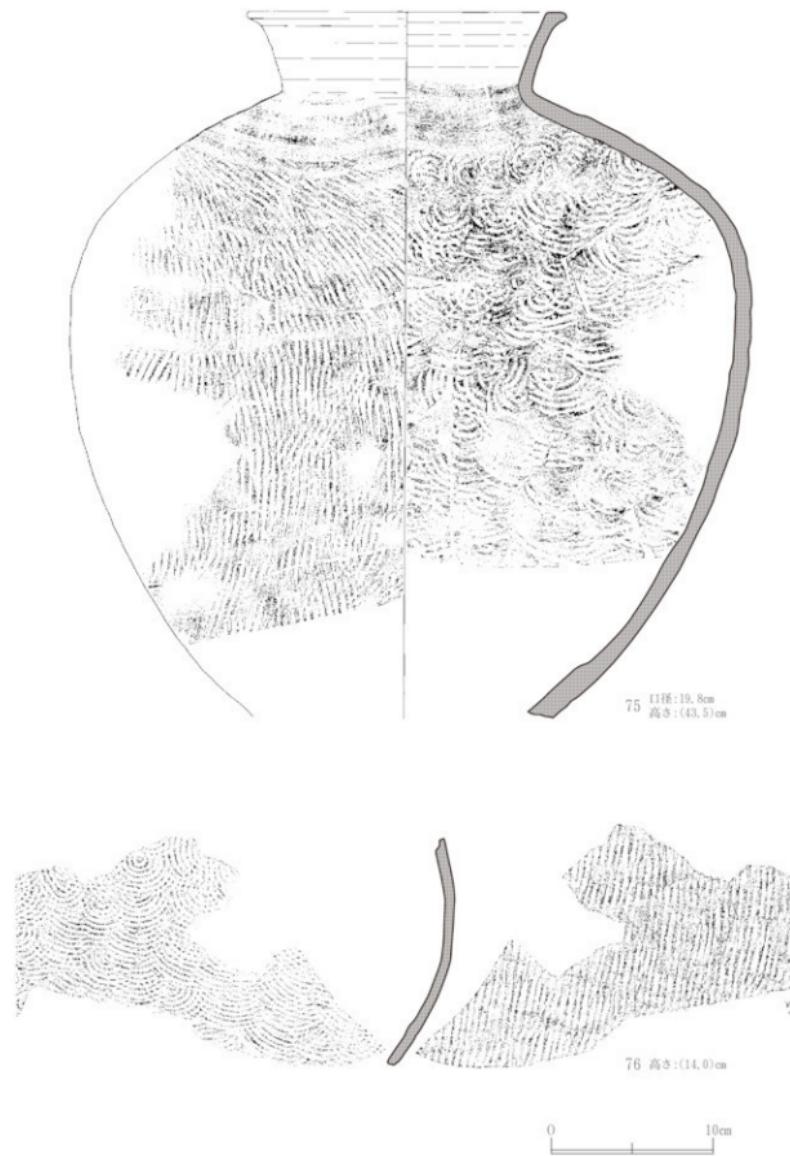
第31図 S L 60河道跡出土須恵器実測図(9)



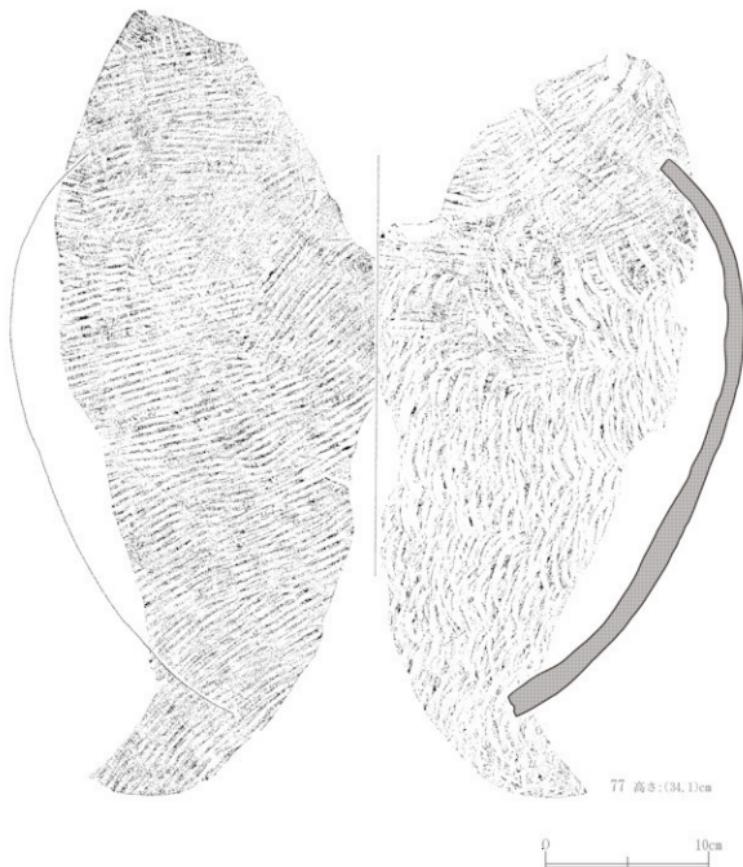
第32図 S L 60河道跡出土須恵器実測図(10)



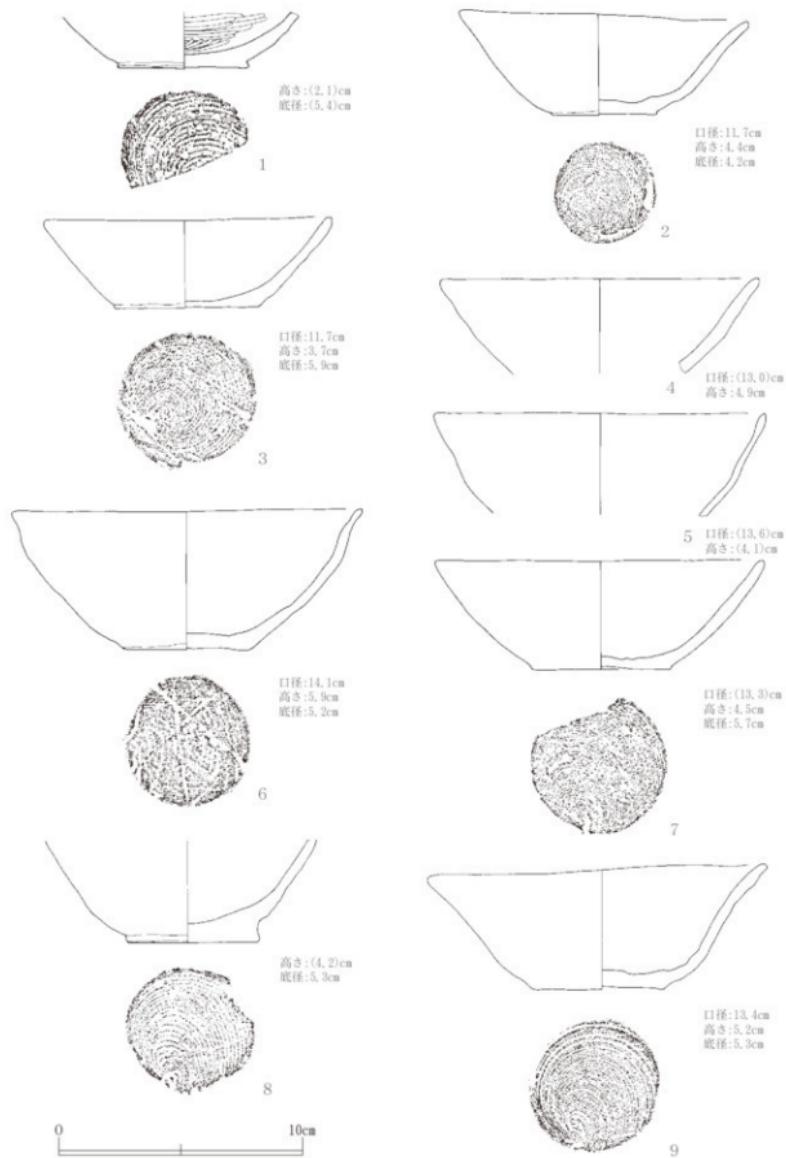
第33図 S L 60河道跡出土須恵器、土錘、砥石実測図(11)



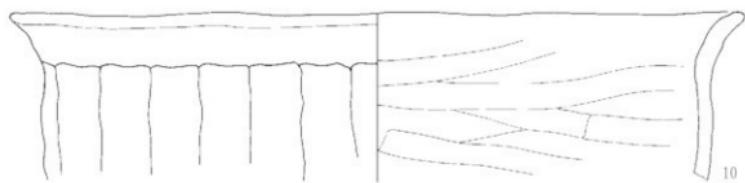
第34図 S L 60河道跡出土須恵器実測図(12)



第35図 SL 60河道跡出土須恵器実測図(13)



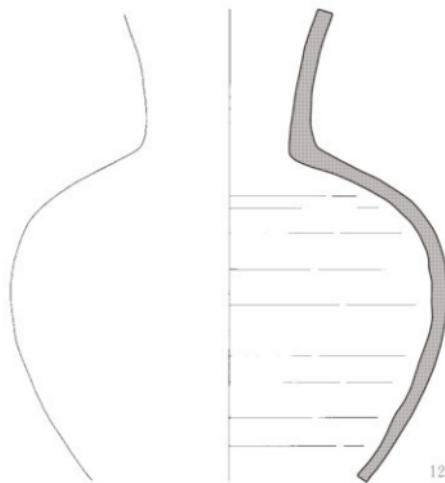
第36図 S L 83河道跡出土土師器実測図(1)



口径:(29.9)cm
高さ:(6.9)cm



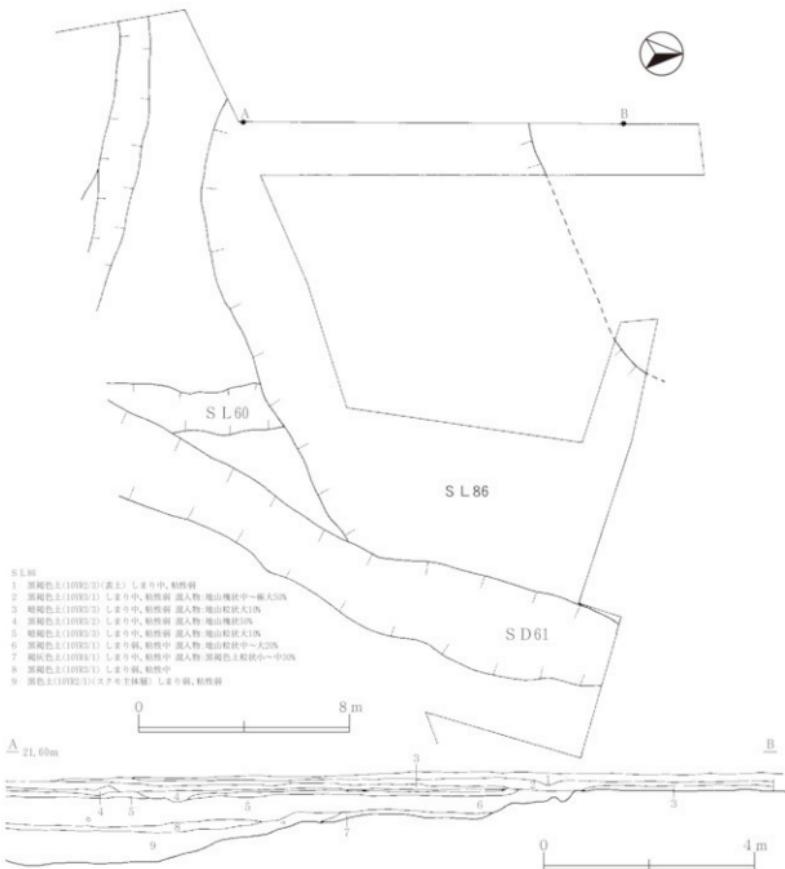
口径:(11.4)cm
高さ:(5.8)cm



高さ:(19.1)cm



第37図 S L.83河道跡出土土師器、須恵器実測図(2)



第38図 S L 86河道跡実測図

2 遺構外出土遺物

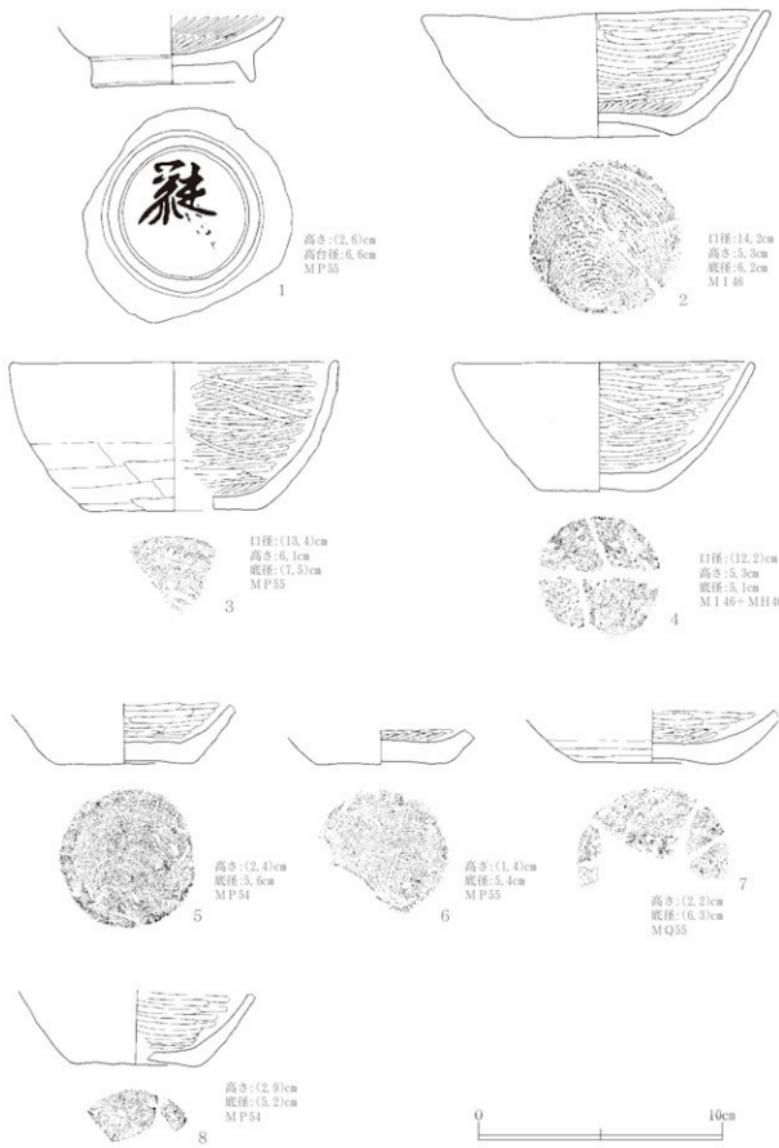
遺構外からは、土師器と須恵器の破片が中コンテナ(規格54×34×10cm)で約6箱分出土した。

(1) 土師器(第39~41図、図版4~7)

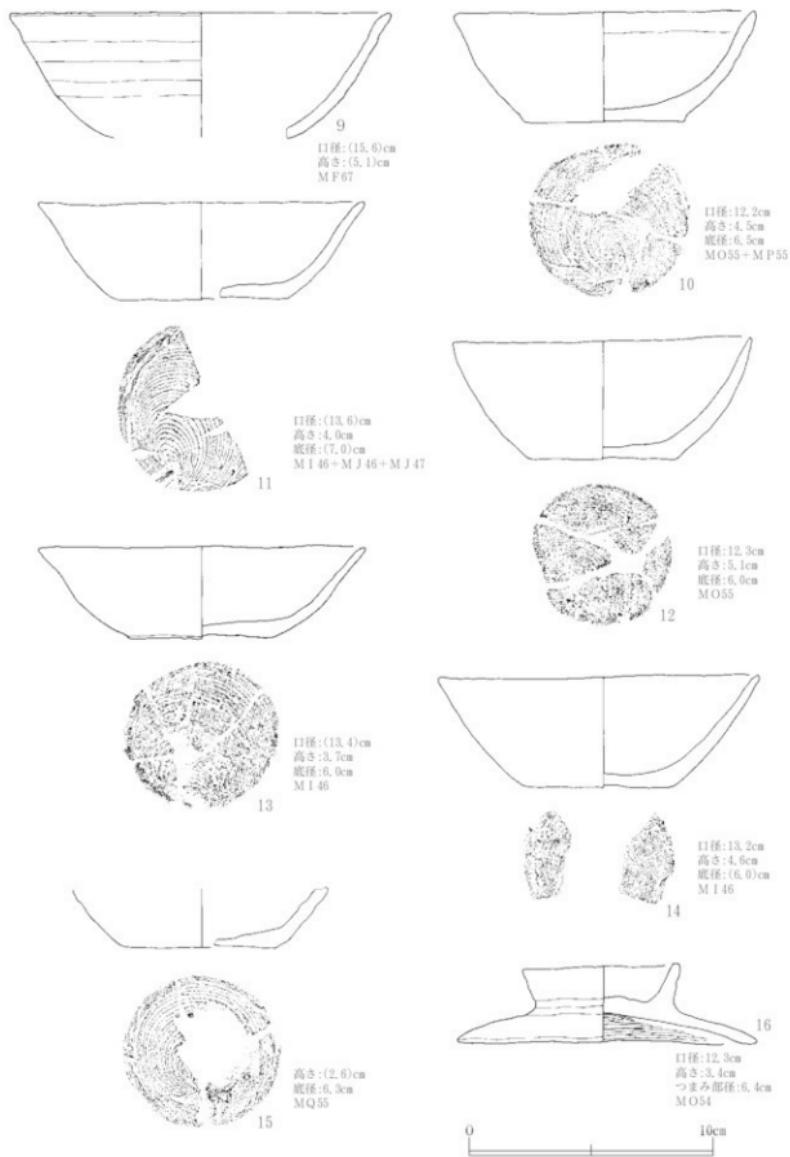
出土した土師器の器種は、高台付壺、壺、蓋、甕などである。1は高台付壺、2~15は壺、16は蓋の破片である。これらはロクロで成形されており、ロクロからの切り離しは回転糸切りである。また、1~8と16の内面はヘラミガキが施されて、黒色処理されている。17~19は甕の破片である。なお、1は底部下面に文字が記された墨書き器である。

(2) 須恵器(第42~44図)

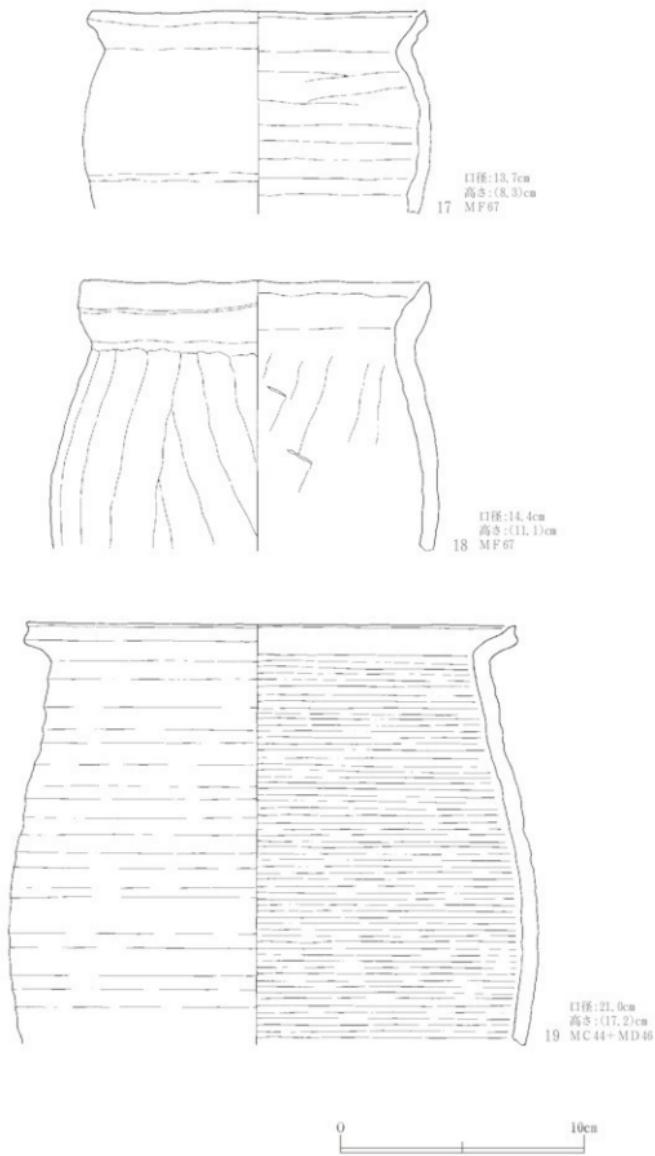
出土した須恵器の器種は、高台付壺、壺、甕、壺などである。1~18・20は壺の破片で、19は小型



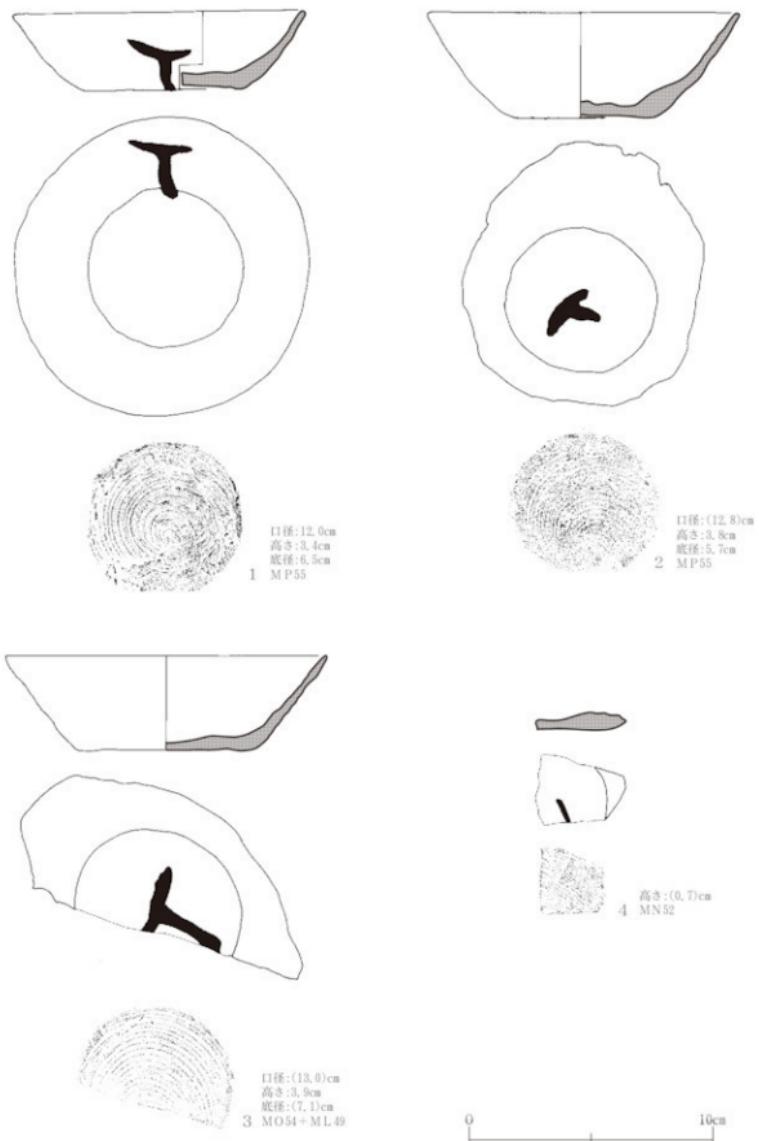
第39図 遺構外出土土師器実測図(1)



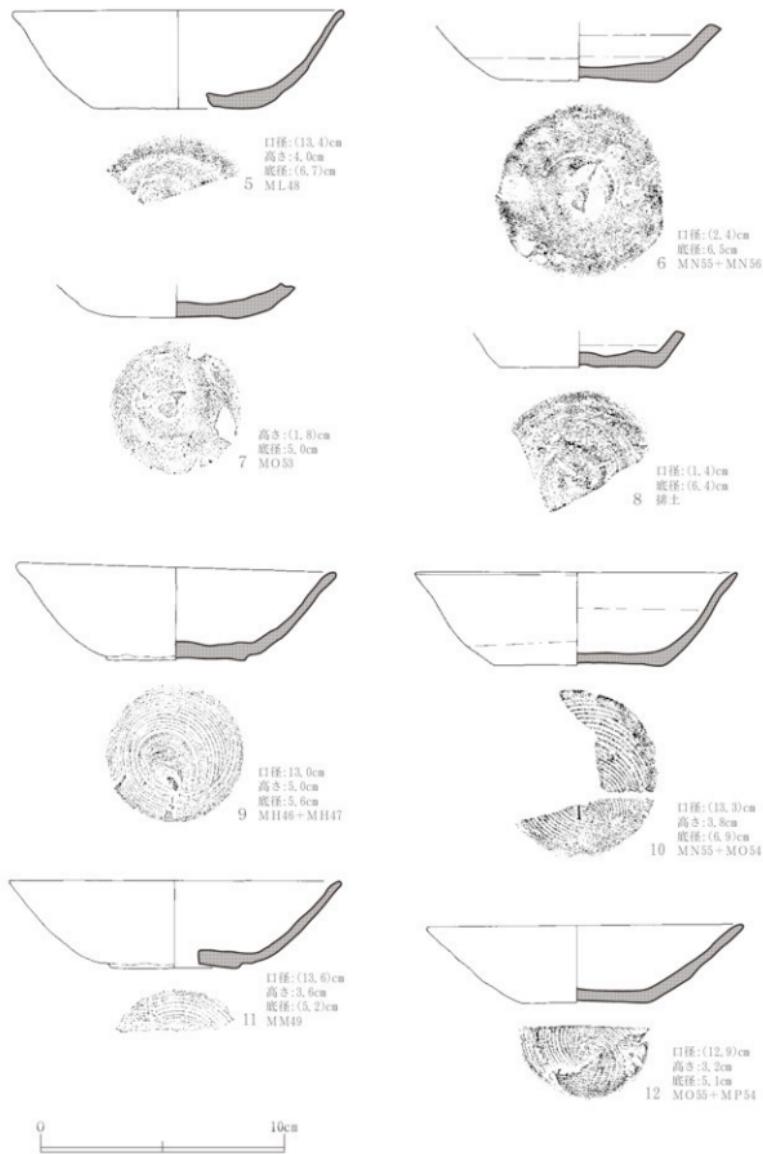
第40図 遺構外出土土師器実測図(2)



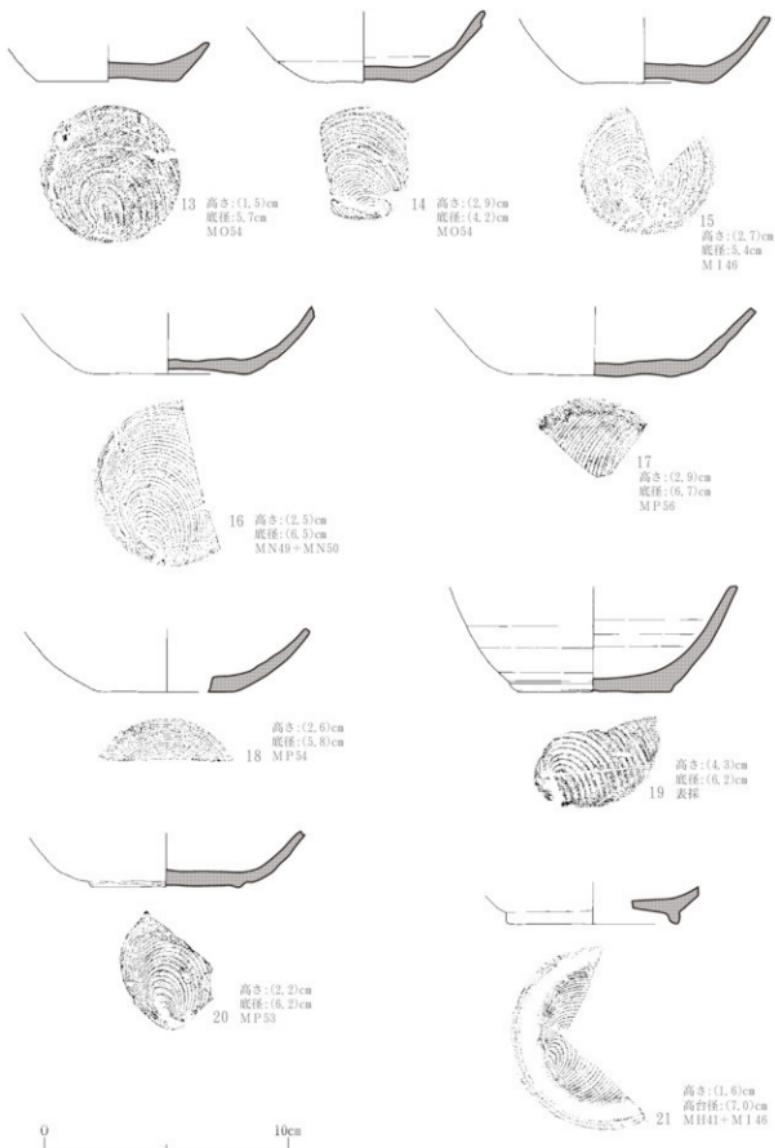
第41図 遺構外出土土師器実測図(3)



第42図 造構外出土須恵器実測図(1)



第43図 遺構外出土須恵器実測図(2)



第44図 遺構外出土須恵器実測図(3)

の壺の底部片と思われる。21は高台付环の破片である。これらの須恵器はロクロ成形されており、ロクロからの切り離しは回転糸切り(1~4と9~21)と回転範切り(5~8)がある。また、1~4は胴部外面(1)や、底部下面(2~4)に文字が記された墨書き土器である。

第3節 近世以降の遺構と遺物

1 検出遺構と遺物

(1) 井戸跡

S E 65井戸跡(第45図)

M C 35グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはS E 66・67・68・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(東~西)0.95m×短軸(北~南)0.93mの円形を呈し、検出面からの深さは1.0mである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は2層に分けられた。0.5~2cm大の地山塊が両層ともに混在していることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

S E 66井戸跡(第45図)

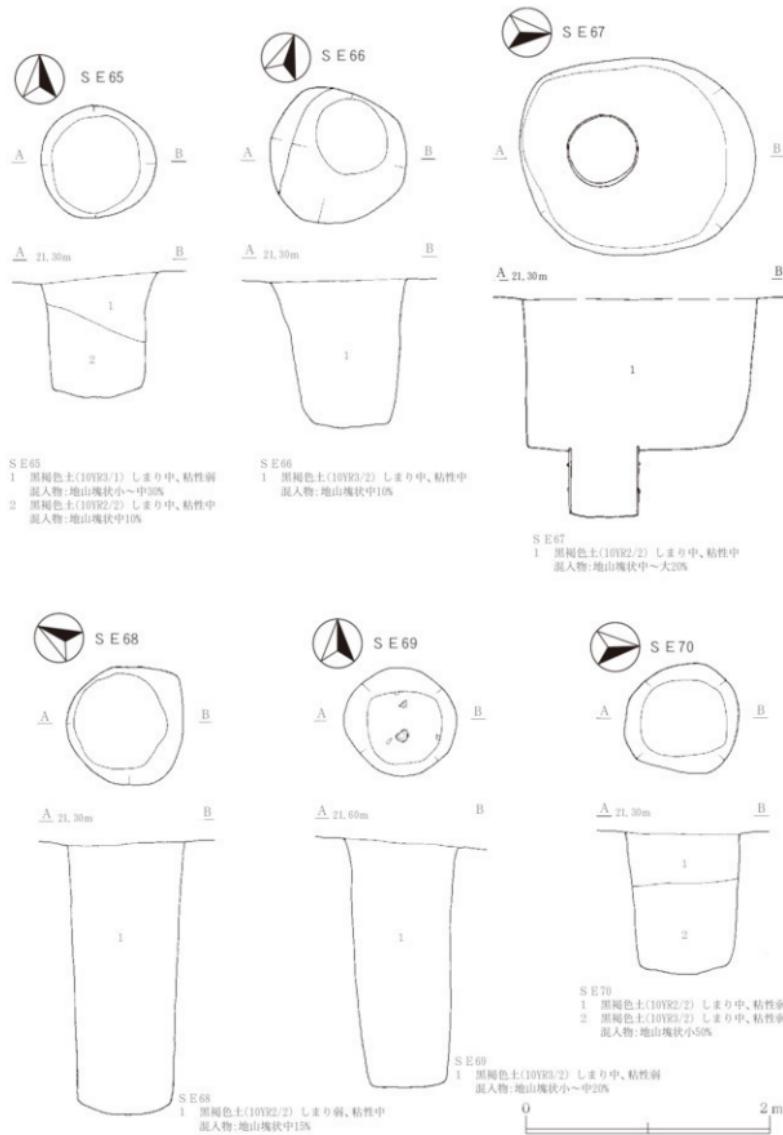
M B 35グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはS E 65・67・68・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(北東~南西)1.15m×短軸(北西~南東)1.14mの円形を呈し、検出面からの深さは1.2mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は1層である。1~2cm大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも少量の水が湧出している。

S E 67井戸跡(第45図)

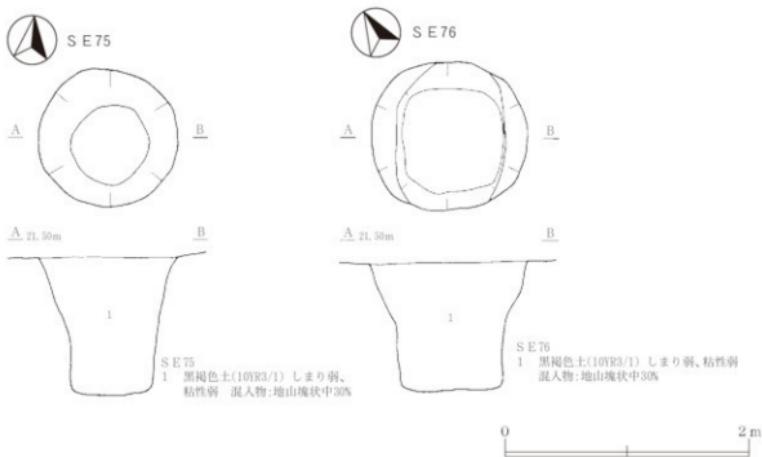
M B 35グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはS E 65・66・68・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(北東~南西)1.98m×短軸(北西~南東)1.7mの楕円形を呈し、検出面からの深さは1.23mである。底面は平坦であり、底面中央より東寄りには径0.6m、底面からの深さ0.54mの掘り込みがある。この掘り込みには、井戸枠として用いられた曲げ物が埋設されている。曲げ物の大きさは径58cm・器高56cmである。壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は1層である。1~5cm大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。また現在でも水が湧出している。なお、本遺構の底面から採取した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は370±30yr B P(1450~1520AD、1590~1620AD)であった。

S E 68井戸跡(第45図)

M B・M C 36グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはS E 65・66・67・69・70井戸跡がある。平面形は長軸(東~西)1.0m×短軸(北~南)0.98mの円形を呈し、検出面からの深さは2.23mである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は1層である。1~2cm大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は陶磁器の破片(皿)が1



第45図 S E 65～S E 70井戸跡実測図



第46図 S E 75・76井戸跡実測図

点出土した(第47図1)。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

S E 69井戸跡(第45図)

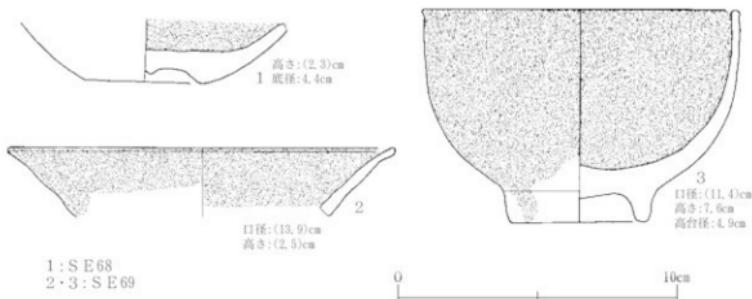
MD35グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはS E 65・66・67・68・70井戸跡がある。平面形は長軸(北西-南東)0.92m×短軸(北東-南西)0.85mの円形を呈し、検出面からの深さは2.02mである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は1層である。0.5~2cm大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は陶磁器の破片(皿と碗)が2点出土した(第47図2・3)。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

S E 70井戸跡(第45図)

MB35グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはS E 65・66・67・68・69井戸跡がある。平面形は長軸(北東-南西)0.93m×短軸(北西-南東)0.92mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは1.15mである。底面はほぼ平坦で、壁の傾きはほぼ垂直である。堆積土は2層に分けられた。両層には0.5~2cm大の地山塊が混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも水が湧出している。

S E 75井戸跡(第46図)

MC49グリッドの第V層上面で検出した。周辺にはS E 76井戸跡が隣接する。平面形は長軸(北西-南東)1.1m×短軸(北東-南西)1.1mの円形を呈し、検出面からの深さは1.08mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は1層である。1~2cm大の地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思わ



第47図 S E 68・69井戸跡出土陶磁器実測図

れる。また現在でも少量の水が湧出している。

S E 76井戸跡(第46図)

M C 49・50グリッドの地山面で検出した。周辺にはS E 75井戸跡が隣接する。平面形は長軸(東一西)1.25m×短軸(北一南)1.24mの円形を呈し、検出面からの深さは1.01mである。底面は平坦で、壁の傾きはほぼ垂直であり、それから北西側と南東側はやや緩やかで小さな段差が認められ、外傾しながら立ち上がるが、井戸本来の堀り込みであるかは定かではない。堆積土は1層である。1~2cmの大い地山塊が層全体に混在しており、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。本遺構は素堀りの井戸であったと思われる。また現在でも少量の水が湧出している。

(2)溝跡

S D 26溝跡(第48図)

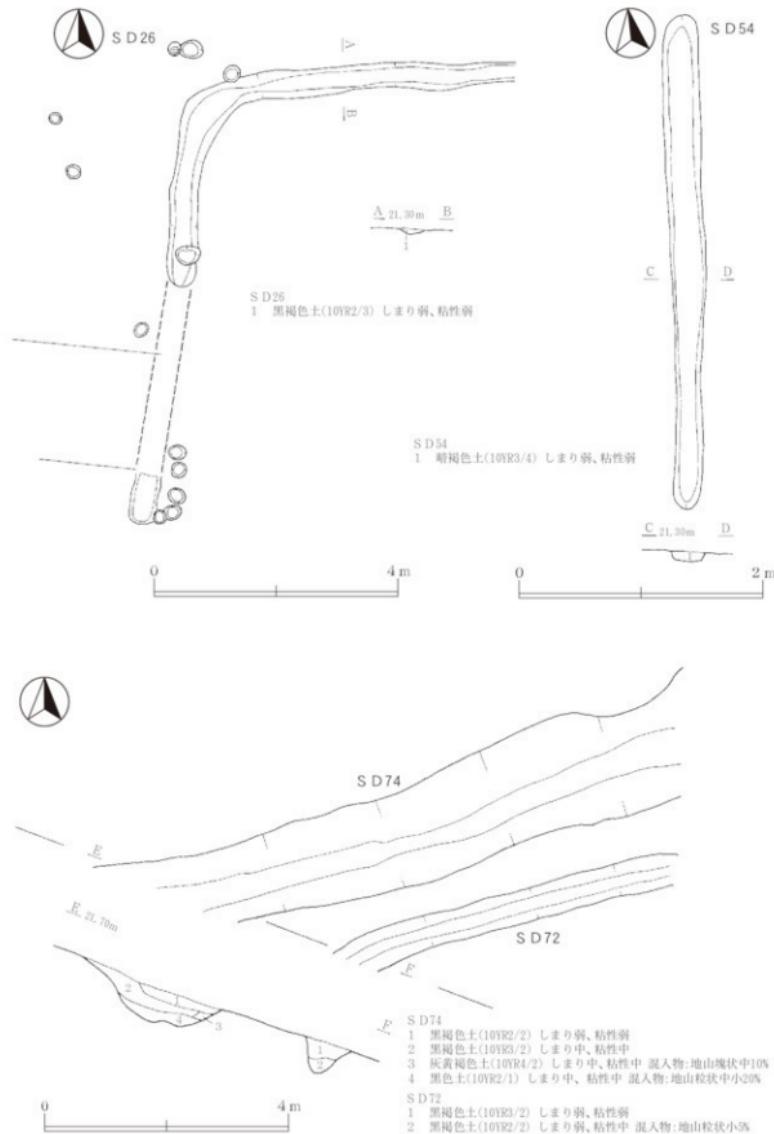
M G 67・68・69、M F 69グリッドの第V層上面で検出した。南一北、西一東にL字状に曲がりながら延びる溝跡で、南一北は途中で途切れ南端に至る。東端は後の整地で失っていて検出できなかった。S K P 27・28・37柱穴様ピットと重複し、本遺構が古い。検出した範囲で長さ12.08m、幅0.7m、検出面からの深さは0.1mである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は1層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

S D 54溝跡(第48図)

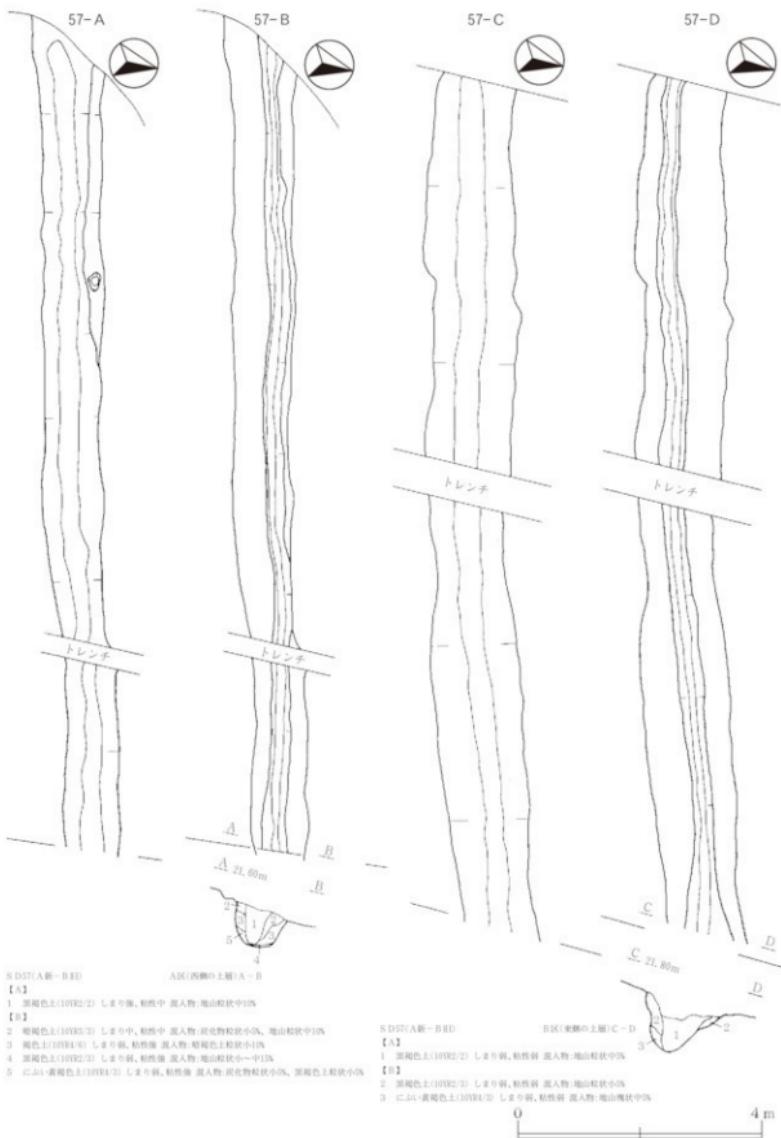
M H 67・68グリッドの第V層上面で検出した。北一南に延びる溝跡で、検出した範囲で長さ4.03m、幅0.3m、検出面からの深さは0.08mである。底面は平坦で、壁の傾きは急である。堆積土は1層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

S D 57溝跡(第49図)

MA38、MB37・38、MC37・38、MD37、ME37、MF36・37、MG36・37、MH36、MI36ゲ



第48図 S D 26・54・72・74溝跡実測図



第49図 S D 57溝跡実測図

沖田遺跡

リッドの第V層上面で検出した。調査区南側を北東－南西にほぼ直線的に延びる溝跡で、北東端と南西端はそれぞれ調査区外に延伸している。本遺構は、遺構内で新旧で重複しており、それぞれ新しい溝跡をA、古い溝跡をBと表記した。検出した範囲で長さ34.4mである。新しい溝跡Aの幅は0.3m～0.4mで、検出面からの深さは0.56mである。底面はやや丸みを帯びていて、壁の傾きは急である。堆積土は1層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。古い溝跡Bの幅は0.7m～1.5mで、検出面からの深さは0.64mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きはやや急である。堆積土は5層に分けたが、新しい溝跡Aに切られていることもあり、定かではない。

遺物は新しい溝跡Aで土師器壺の破片、土師器甕の破片、須恵器甕の破片、陶磁器の破片などが16点、古い溝跡Bで土師器壺の破片が1点出土した。

S D61溝跡(第4図)

M L57・58・59、MM56・57・58・59、MN54・55・56、MO54・55、MP54・55、MQ54・55、MR55グリッドの第V層上面で検出した。北東－南西、南東－北西にL字状に曲がりながら延びる溝跡で、その北東端と北西端はそれぞれ調査区外に延伸している。S L60・86河道跡と重複し、本遺構が新しい。検出した範囲で長さ約25m、幅1.4m～2.0m、検出面からの深さは0.3m～0.55mである。底面は平坦であり、壁の傾きは急である。堆積土は1層で、整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は主にS L60河道跡と交わるMO54グリッドの底部から土師器壺の破片、土師器蓋の破片、須恵器壺の破片、須恵器甕の破片、陶磁器の破片などが現代(昭和時代)のゴミと混じって多量に出土した。そのうち遺物を53点掲載した(第50～55図)。

S D72溝跡(第48図)

L K・L L・LM40、LK41グリッドの第V層上面で検出した。北東－南西にS D74溝跡と平行に隣接して直線的に延びる溝跡で、北東端と南西端はそれぞれ調査区外に延伸している。検出した範囲で長さ約5.8m、幅0.5m～0.6m、検出面からの深さは0.54mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きはやや緩やかである。堆積土は2層に分けられた。整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器甕の破片1点と陶磁器の破片1点が出土した。

S D74溝跡(第48図)

LM40、LK・L L・LM41グリッドの第V層上面で検出した。北東－南西にS D72溝跡と平行に隣接して直線的に延びる溝跡で、北東端と南西端はそれぞれ調査区外に延伸している。検出した範囲で長さ約9.2m、幅1.24m～1.88m、検出面からの深さは0.54mである。底面は丸みを帯びていて、壁の傾きは緩やかである。堆積土は4層に分けられた。整地の際に一括して埋め戻されたものと考えられる。遺物は土師器壺の破片1点と陶磁器の破片2点が出土した。

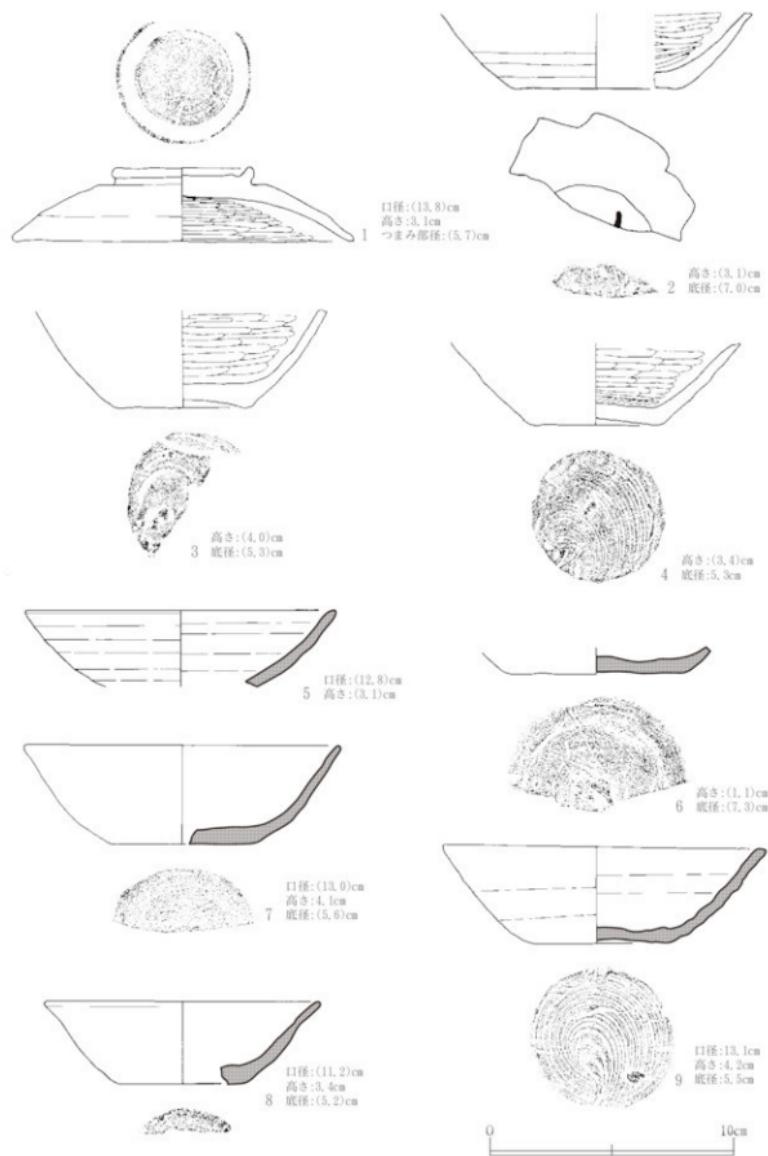
(3)柱穴様ビット(第4図)

柱穴様ビットは調査区北端部で51基、東部で4基の計55基を検出した。平面形は円形と稍円形を呈し、規則的な配列は認められず、柱痕跡も確認できなかった。堆積土は黒褐色土(10Y R2/3)～黒褐

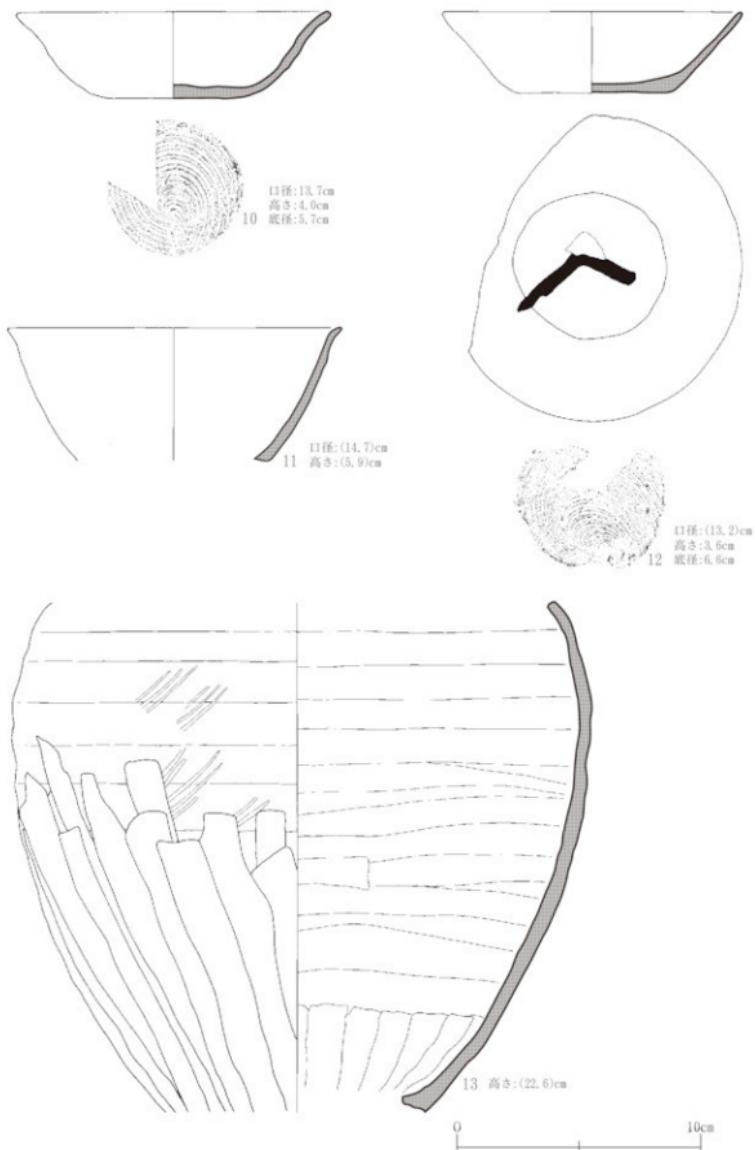
第1表 柱穴様ピット観察表

SKP 番 号	検 出 グリッド	平面形	大きさ			底面の 標高(cm)	SKP 番 号	検 出 グリッド	大きさ			底面の 標高(cm)	
			長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)				長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)		
1	M I 70	梢円形	23	22	17	21.01	30	M I 67	円形	24	23	21	21.01
2	MH・M I 70	(梢円形)	(42)	22	7	21.11	31	MH・M I 67	円形	24	23	30	20.91
3	MH70	梢円形	30	26	38	20.98	32	MG68	梢円形	24	20	6	21.07
4	MH70	梢円形	38	34	11	21.06	33	MF68	梢円形	27	26	11	20.95
5	MH70	梢円形	30	25	5	20.69	34	MG68	梢円形	30	22	13	21.01
6	MH70	梢円形	21	18	19	21.02	35	MG67	梢円形	26	22	14	21.04
7	MH 69・70	梢円形	26	24	11	20.99	36	MG67	梢円形	26	25	15	21.02
8	MG・MH 70	梢円形	31	24	24	20.94	37	MG67	円形	20	20	18	21.02
9	MH70	円形	22	21	7	21.1	38	MG67	円形	24	24	14	21.04
10	MH 69・70	円形	26	25	5	21.15	40	MG67	円形	22	22	23	20.96
11	MH70	円形	20	20	10	21.1	41	MG67	(梢円形)	31	22	23	20.96
12	MH70	円形	20	18	17	21	42	MG67	円形	17	15	16	21.14
13	MG70	円形	29	28	16	20.99	43	MG66	円形	24	22	17	21.02
14	MG70	梢円形	23	20	15	20.99	44	MG67	梢円形	21	20	25	20.92
15	MG70	梢円形	24	22	23	20.92	45	MF・MG 66	梢円形	25	19	17	21
16	MG70	不整 梢円形	22	20	13	21.06	46	MF66	梢円形	28	27	14	20.97
17	MG・MH 70	梢円形	32	30	5	21.16	47	MG66	梢円形	30	18	16	21
18	M F 69・70	梢円形	34	28	25	20.87	48	MG66	梢円形	27	26	17	21
19	M I 69	梢円形	26	20	16	21.05	49	MG66	梢円形	30	24	20	21.1
20	MH69	円形	22	20	7	21.13	50	MG66	梢円形	28	25	13	21.06
21	MG・MH 69	円形	24	23	9	21.09	51	MG65	(梢円形)	(28)	(24)	13	21.05
22	MG69	円形	20	18	21	20.96	52	MG65	(梢円形)	(20)	(12)	18	21.03
23	MG69	円形	24	22	17	20.99	53	MG65	円形	22	20	16	21.04
24	MG69	円形	22	22	16	20.99	79	LN45	梢円形	49	42	18	19.93
25	MG69	梢円形	36	28	18	20.96	80	LO46	梢円形	43	39	14	19.94
27	MG68	不整 梢円形	40	34	21	20.96	81	LO46	円形	32	31	14	20.01
28	MG69	梢円形	30	27	27	20.87	82	LN47	梢円形	50	41	20	19.84
29	M I 67	円形	20	19	18	21.04							

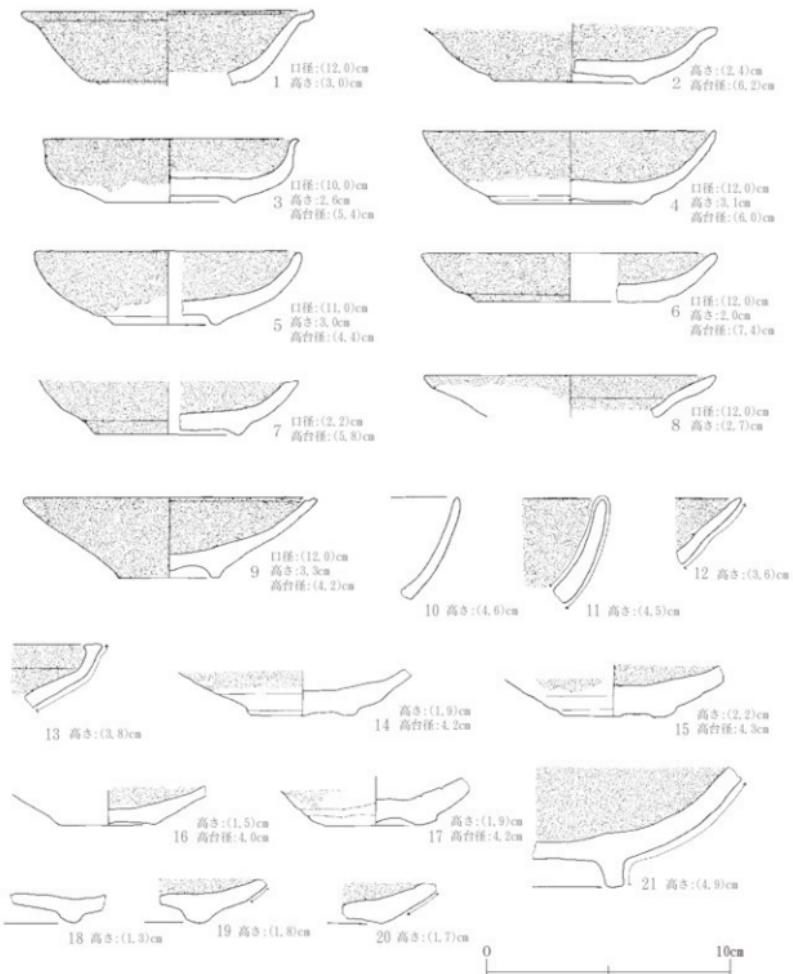
色土(10Y R3/2)で、よくしまっている単一層である。遺物は北端部の柱穴様ピット2基から、それそれ陶磁器片が1点出土した。個々の柱穴様ピットについては第1表にまとめた。



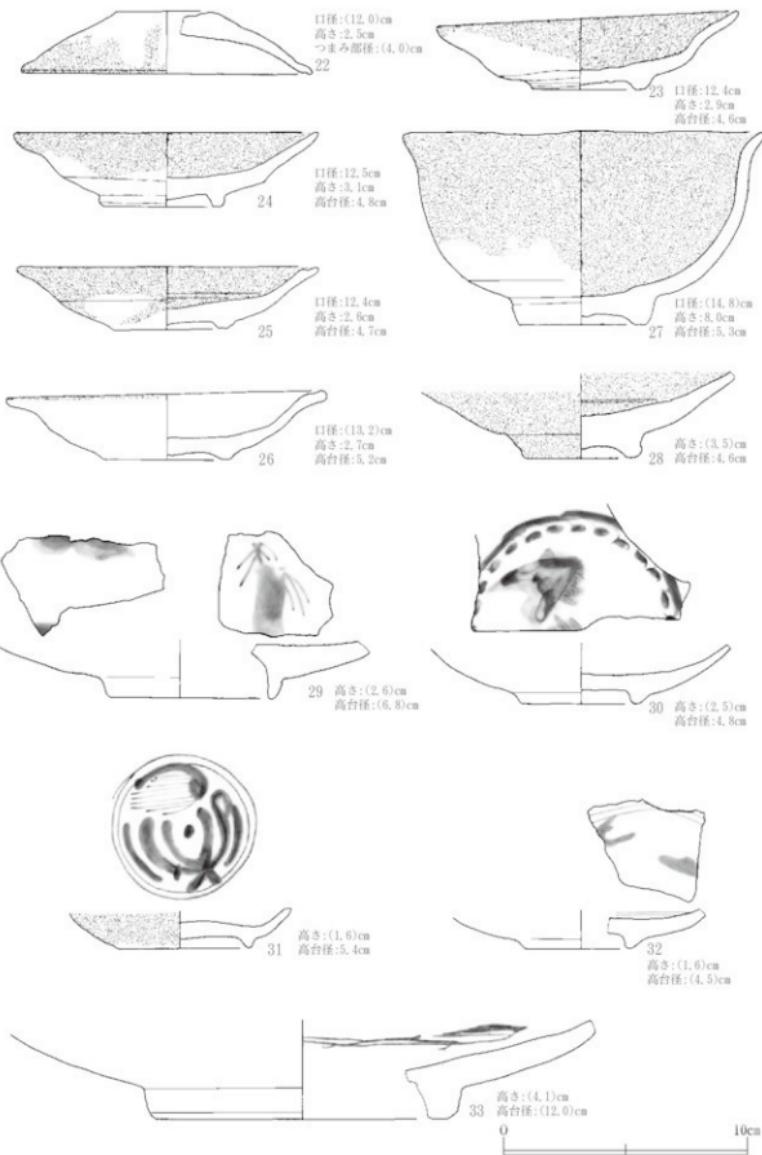
第50図 S D 61溝跡出土土師器、須恵器実測図(1)



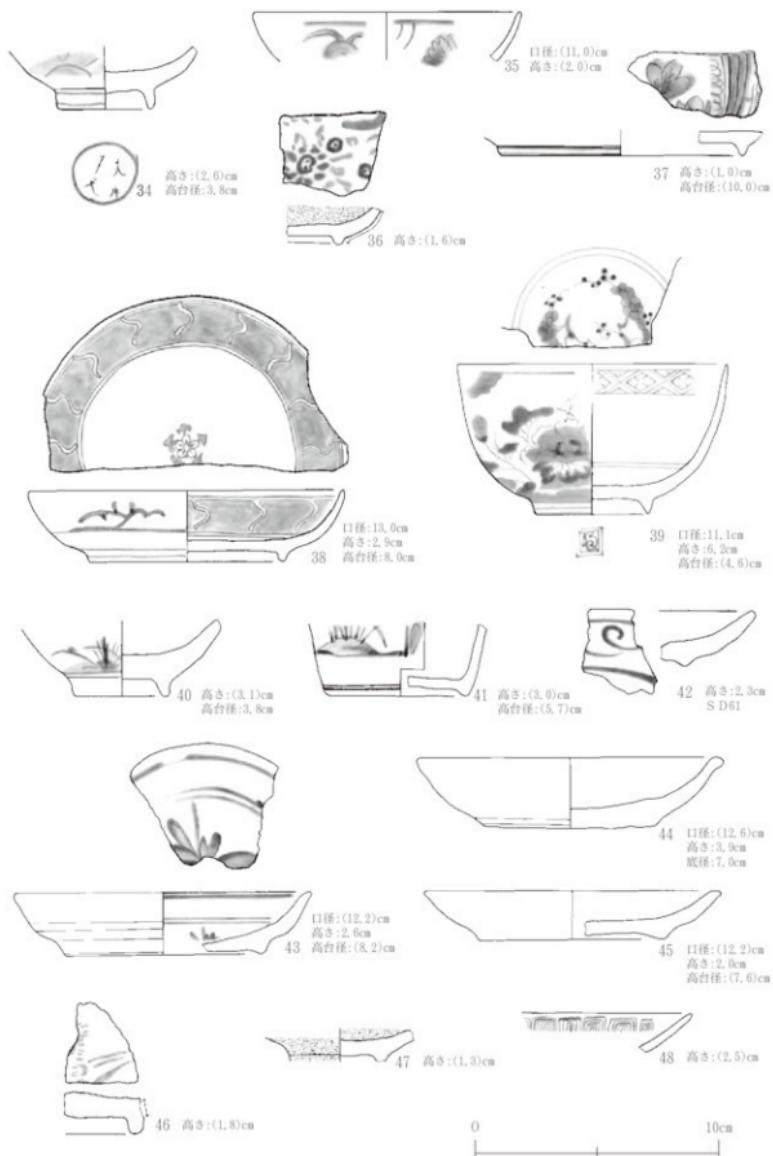
第51図 S D 61溝跡出土須恵器実測図(2)



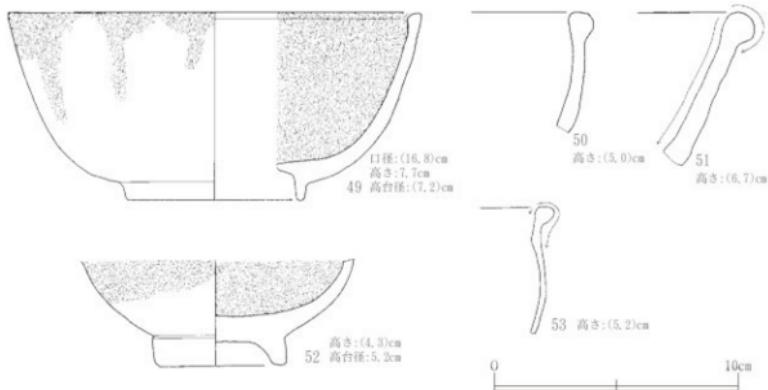
第52図 SD61溝跡出土陶磁器実測図(1)



第53図 SD61溝跡出土陶磁器実測図(2)



第54図 S D 61溝跡出土陶磁器実測図(3)

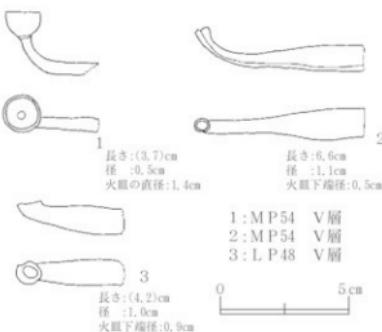


第55図 S D61溝跡出土陶磁器実測図(4)

2 遺構外出土遺物

遺構外からは、陶磁器や煙管などが中コンテナ(規格54×34×10cm)で1箱分ほど出土した。

出土した陶磁器はすべて破片であり、その器種は碗、皿、甕、壺などである。煙管(第56図)は銅製で、残っている部位は火皿や首部である。



第56図 遺構外出土煙管実測図

第3章　まとめ

沖田遺跡の発掘調査は、一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係った遺跡中央部について実施した。調査の結果、縄文時代、平安時代、近世などの遺構と遺物を検出した。

【検出遺構】

縄文時代の遺構は、配石遺構が1基である。時期は本遺構周囲から出土した遺物から縄文時代後期に属するものと考えられる。また、配石の在り方やその下部に何等の施設を伴わない点から墓とは違う性格が考えられる。

平安時代の遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、焼土遺構1基、河道跡3条である。これらの遺構のうち、土坑からは土師器・須恵器や焼土などが混在して出土したことから、ゴミ穴として使われていたと考えられる。また、調査区南東から北西にかけて延びる河道跡(S L 60)と、調査区北側で東西に延びる河道跡(S L 86)には915年に十和田火山が噴火した時の火山灰が堆積しており、その上から多くの土師器と須恵器が出土した。このことから、土師器や須恵器は火山灰降下後に河道内に投棄されたことが窺われる。なお、南東から北西にかけてみつかった河道跡(S L 60)からは「寺」「人」「兄」などの文字が記された墨書き土器が出土した。

近世以降の遺構は、井戸跡8基および溝跡5条、柱穴様ピット55基である。これらのうち、井戸跡は出土した遺物から江戸時代に作られたものと考えられる。

【出土遺物】

出土遺物は縄文時代後期の土器、平安時代の土師器・須恵器・土錘・砥石、近世以降の陶磁器・煙管などであり、出土遺物のうちで最も多かったのは平安時代の遺物で、次いで近世(江戸時代)、縄文時代の順である。平安時代の遺物では土師器が、須恵器より多く出土している。

平安時代の土師器坏に「寺」の文字が記された墨書き土器が3点(第14図1～3、図版3-7・8、図版4-1)あった。このうち第14図2には「人」の文字も併記されている。県内では「寺」の墨書き土器が鹿角市の小平遺跡(土師器坏1点)、鹿角市的一本杉遺跡(土師器坏1点)、北秋田市鷹巣の胡桃館遺跡(須恵器坏2点)、美郷町千畑の厨川谷地遺跡(土師器坏1点)、横手市の十二牲B遺跡(須恵器坏1点)、秋田市の秋田城跡(14点以上)、由利本荘市の上谷地遺跡(土師器坏1点)、由利本荘市の新谷地遺跡(土師器坏1点)の8遺跡で出土している。また、「人」の文字が記された墨書き土器が9点(第14図2、第25図16・17、第26図20・21、第27図25・26、第42図1・2、図版4-2～6・8)出土した。同様に秋田市の秋田城跡17次調査(1点)、秋田市の秋田城跡54次調査(1点)、由利本荘市西目の井岡遺跡(6点)の3遺跡でも出土している。このほか「兄」(第28図31、図版4-6)と判読できないもの(第39図1、図版4-7)などを含めて、合計23点の墨書き土器が出土した。

以上、検出した遺構と出土遺物から沖田遺跡は、9世紀後半から10世紀前半の平安時代の集落の一部であったと考えられる。また、「寺」と記された墨書き土器がみつかったことから、その当時、集落の近くにはお寺などの施設があったと推測される。このほか縄文時代および近世(江戸時代)にも人々が利用した場所であることがわかった。



1 遺跡全景（西から）



2 遺跡全景（真上）



1 S Q78配石遺構（北から）



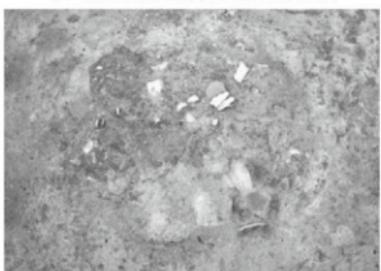
2 S B63掘立柱建物跡（北西から）



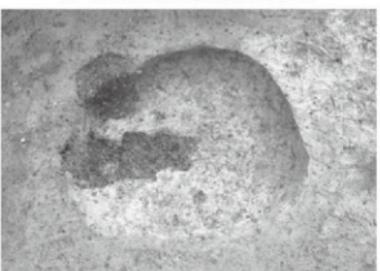
3 S K64土坑遺物出土状況（北東から）



4 S K64土坑完掘状況（北東から）



5 S K85土坑遺物出土状況（北から）



6 S K85土坑完掘状況（北から）



7 S K77土坑完掘状況（北から）



8 S N84焼土遺構（南東から）



1 S L 60河道路跡確認状況（北西から）



2 S L 60河道路跡完掘状況（北西から）



3 S L 60河道路跡遺物出土状況（東から）



4 S L 60河道路跡完掘状況（南東から）



5 S L 83河道路跡遺物出土状況（西から）



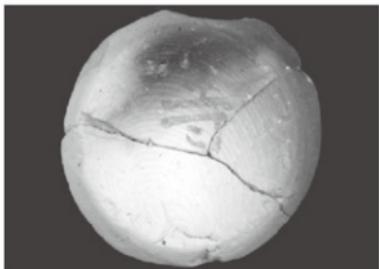
6 S L 83河道路跡完掘状況（西から）



7 S L 60河道路跡出土墨書き土器（第14図1）



8 S L 60河道路跡出土墨書き土器（第14図2）



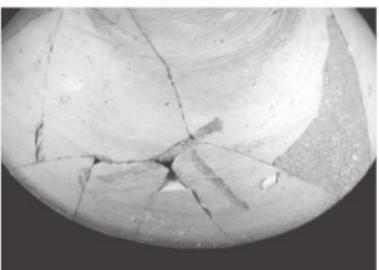
1 S L 60河道跡出土墨書土器（第14図3）



2 S L 60河道跡出土墨書土器（第25図16）



3 S L 60河道跡出土墨書土器（第26図20）



4 S L 60河道跡出土墨書土器（第26図21）



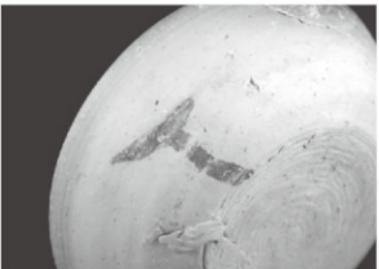
5 S L 60河道跡出土墨書土器（第27図25）



6 S L 60河道跡出土墨書土器（第28図31）



7 造構外出土墨書土器（第39図1）



8 造構外出土墨書土器（第42図1）

沖 田 Ⅱ 遺 跡
(7 O T Ⅱ)

第1章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

沖田II遺跡は、JR奥羽本線神宮寺駅から北西約3.0kmに位置し、遺跡の南方を西流する雄物川右岸に形成された標高約20mの河岸段丘上に立地している。雄物川は古来幾度となく氾濫を繰り返し、遺跡周辺には旧河道や砂堆地、河原、氾濫平野などが散在する。遺跡の北側一帯には丘陵地が広がり、北東には雄物川の残存湖である大浦沼がある。また、南東には姫神山や神宮寺嶽の連なる姫神山山地を望む。遺跡の南東には、平成19年度に調査した沖田遺跡、さらに南東には平成18年度に調査を行った布田谷地遺跡がある。

遺跡の現況は休耕田で、ほぼ平坦であるが、第二次大戦後に開墾され水田造成されるまでは周囲より少し高い微高地となっていた。粘質の強い黄橙色粘土が厚く堆積していたことから、この微高地の成因は、遺跡西側を流れる雄物川の旧河道に向かって遺跡を挟んで二筋の小河川が流れ込んでおり、この小河川に挟まれた区域に、運ばれた土砂が堆積したものと推察される。

遺跡西側下方の雄物川旧河道と遺跡の現地表面とは2.5mの比高差があり、北側は隣接する現水路（旧小河川）に向かって傾斜しており、最大2.5mの比高差がある（第1図）。

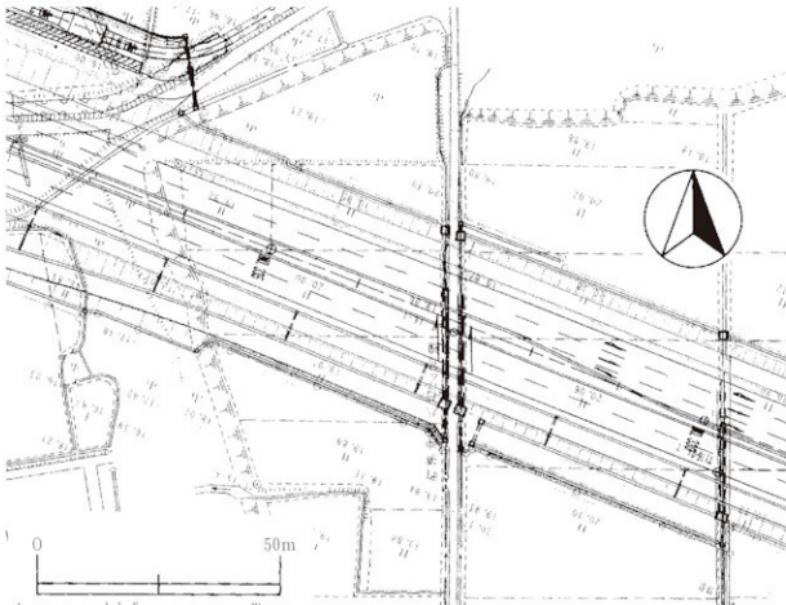
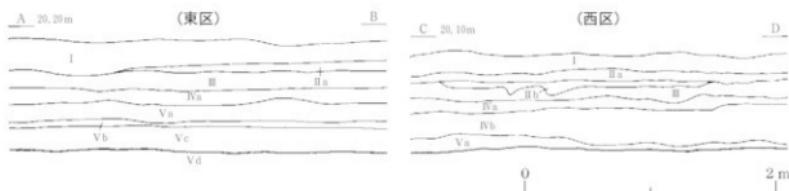


図1-4 沖田Ⅱ遺跡発掘調査対象範囲

遺跡内を南北に走る市道沖田八石2号線により調査区が二分されており、市道の東西で東区と西区に区分した。東区は本道路建設事業による買収前まで水田耕作が行われていた区域であったが、西区に比べて水位が高く、旧地形が低かったことを物語っている。調査区の基本土層は東区・西区に設けた深掘りトレチで5層に分層できた(第2図)。

発掘調査の結果、沖田II遺跡は近世の集落跡であることがわかった。



東区・西区基本土層

- I 黒褐色土(10YR3/3) しまり中、粘性弱
混入物: 黒色土塊小～大5%，炭化物粒状構小～小5% ゆ表土
- IIa にい黃褐色(10YR4/3) しまり中、粘性中
混入物: 黃褐色化土粒状構小～小5%
- IIb にい黃褐色土(10YR2/2) しまり強、粘性弱
混入物: 黑色土粒小1%未満、炭化物粒状構小1%未満
明瞭度: 地塊小1%未満
- III にい黃褐色粘土(10YR6/2) しまり強、粘性強
混入物: 黄色化土角柱・粒状構小～小15% 亜構構検出面
- IVa 黒色粘土(10YR2/1) しまり強、粘性強
混入物: 黄色化土角柱・粒状構小～小15% 炭化物粒状構小1%
△炭化物が多量に入ったスクモ層。東区では圓錐が接続に分かれるが一括で処理
- IVb 黒色粘土(10YR2/1) しまり強、粘性強
混入物: 黄色化土角柱・粒状構小～小15% 炭化物粒状構小1%
△にい黃褐色粘土(10YR7/3) しまり強、粘性強
- Va にい黃褐色粘土(10YR7/3) しまり強、粘性強
混入物: 黄色化土角柱・粒状構小～大15% ゆわゆる地山
- Vb にい黃褐色粘土(10YR7/3) しまり強、粘性強
混入物: 黄色化土角柱・粒状構小～大15%、炭化物粒状構小～大3%
△炭化物が混じり若干弱く崩れ
- Vc にい黃褐色粘土(10YR7/3) しまり強、粘性強
混入物: 黄色化土角柱・粒状構小～大15%
- Vd オリーブ色粘土(10Y5/2) しまり強、粘性強
混入物: 黄色化土角柱・粒状構小～小5%
△わわゆる青ねば粘土。酸化するとVa、Vcと同じ白色になる。

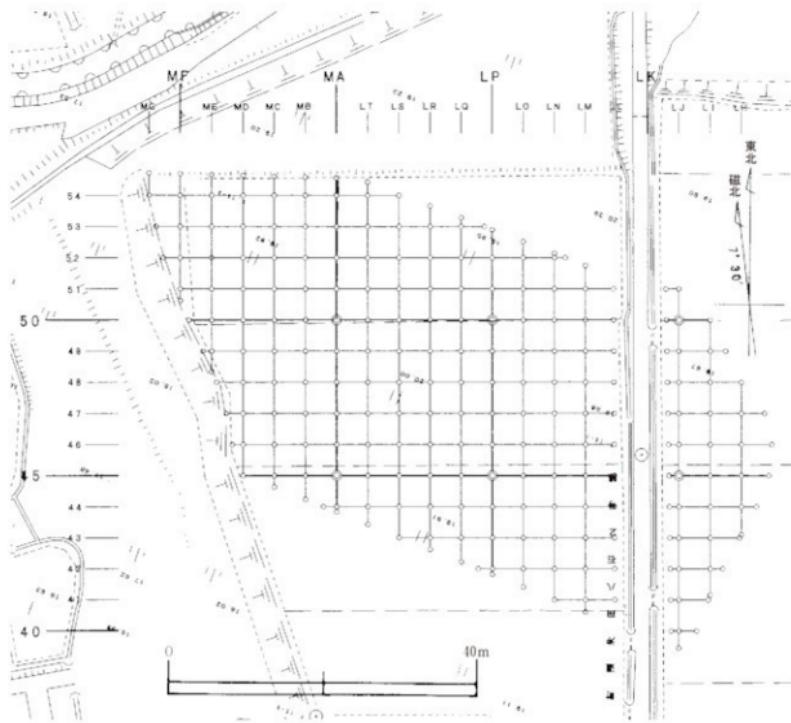
第2図 沖田II遺跡基本土層図

第2節 調査の方法

沖田II遺跡では計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。調査区内の一般国道13号神宮寺バイパス建設の道路中心杭(No.335、X = -54924.6909、Y = -37538.8373)をグリッド原点MA50として、この杭から国家座標第X系座標北を求める、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って4×4mのグリッドを設定し、グリッド原点MA50を起点に、東西方向には東から西へ4mごとに「LK・LL・LT・MA・MB・MR・MS」という2文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ4mごとに「33・34・48・49・50・69・70」という2桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は4m間隔の東西基線と南北基線の交点すべてに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した(第3図)。

調査は確認調査の結果に基づき、西区から行った。包含層の掘り下げ及び遺構精査は全て手作業で行った。検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は、平面図・断面図の作製および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は1/20を原



第3図 沖田Ⅱ遺跡グリッド設定図

則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影には35mmモノクロ・リバーサルフィルムおよびデジタルカメラを使用した。

第3節 調査の経過

沖田Ⅱ遺跡の発掘調査は、平成20年6月9日から9月10日まで実施した。以下に各週ごとの調査経過を記述する。

【第1週】6月9日～6月13日

9日、発掘機材の搬入と環境整備を行った。その後西区(市道より西側)の草刈りを行った。確認調査時の埋め戻し土から、16～17世紀代と思われる肥前陶磁器片・珠洲系の擂鉢片が数点出土した。

【第2週】6月16日～6月20日

確認調査時に設定した第15、16、17トレチの掘り起こしを行った。また第15トレチの一部を深掘りし、断面観察を行ったところ、厚さ15cmの暗褐色土下から確認調査時の遺構検出面と思われる褐

沖田Ⅱ遺跡

色土層が、10cm程堆積しており、その下は粘土層、植物腐敗によると思われる黒炭が混入した粘質土層、そして地山と思われる灰白色の粘土層を確認した。

早めにトレンチを掘り起こし、遺構検出作業に進めるように努力した。また各トレンチの層位を確認しながら作業を行った。

【第3週】6月23日～6月27日

西区の確認調査時に設定されたトレンチの掘り起こしを完了した。北西端のMF54グリッドより順次掘り下げ、グリッドごとに精査を行った。また遺跡範囲を平面図に作成した。

精査を行なった北西部52ラインの北部分より、確認調査時の検出も含め、柱穴跡を数十基確認した。円形のものと方形大小の3種類を確認した。また遺物包含層であるⅡ層は残存している箇所は少なく、しかもかなり薄い状況であった。

遺構の上面はかなり削られ薄く底面が残っている状況のため、精査は慎重に行った。また掘り上げた後もすぐに不明確になってしまふことが予想されるため、グリッドごとに掘り下げと精査を行った。

【第4週】6月30日～7月4日

北西端のMF54グリッドより順次南東方向へ掘り下げ、グリッドごとに柱穴の確認図面及び完掘平面図を作成した。

粗堀り・清掃を終えたグリッドで100基を超える柱穴跡を確認した。柱穴跡の形状は数種類あった。また、MB52グリッドでかまと状遺構を1基確認した。他にも焼土堆積が見られた。

遺物包含層と思われたⅡ層だが、土の様子から客土の可能性も考えられ、検討を要した。

【第5週】7月7日～7月11日

MBライン以西の遺構検出作業と調査を行った。MA～MCの48～49グリッドにて、溝跡によって区画されている場所を確認した。遺構埋土の主体となっているのは黒褐色土であるが、遺構検出面の下層と同色であり、深い遺構については見極めが困難で、精査では十分に注意する必要があった。

遺構の精査と同時に粗掘りを進めていたが、調査工程の進捗状況がやや遅れ気味で再度工程の計画を立て直した。また、熱中症に気をつけながら作業を進めた。

【第6週】7月14日～7月18日

50ライン以東の粗掘り、かまと状遺構(SO100)の調査、50ライン以西の検出遺構に付き確認状況の実測を行った。

MB53グリッドにてかまと状遺構を検出。これにより本遺跡のかまと状遺構は3基となった。またMA50グリッド近辺から西側に延びる最大幅1mの溝跡を確認した。

遺跡全体の内容を把握するため、表土除去・遺構検出作業を優先して進めることにしたが、いかに円滑に作業を進めるか苦慮した。

【第7週】7月22日～7月25日

部分的に市道までの掘り下げが完了し、遺構が数基確認できたため残りの表土も早く掘り下げる必要があった。

南北49～53ラインは、東西LMラインまで粗掘りが完了した。その際、柱穴や土坑などの遺構を検出した。柱穴に関しては、西区西側と同様に残りは良好なもののが多かった。

【第8週】7月28日～8月1日

M C 52・53グリッドの精査終了。遺跡中央部の遺構検出面上層の堆積層を除去し、遺構検出を行った。

市道より西側の調査範囲 L T～L Q 49グリッド以北には、遺構掘り込み面と思われる灰白色粘土層が失われていたので、この付近での遺構検出の可能性は低いと判断した。

【第9週】8月4日～8月8日

M A ライン以西の遺構精査と図化作業および、かまど状遺構の精査を行った。

現在かまど状遺構を7基確認したが、煙道の方角は、南側が2基、東側が2基、西側が1基、北側が2基であり、規則性・統一性は見られなかった。

遺構精査は作業の効率化と迅速化も考えながら進めた。

【第10週】8月18日～8月21日

雨天が続いたため、西区の南東部の表土除去及び北東部の精査を中心に行った。また、かまど状遺構、溝跡、柱穴様ビットの精査を実施した。

当初、開墾・掘削されて遺構がないと思われていた西区の東側にも柱穴様ビットと溝跡が多数確認された。

【第11週】8月25日～8月29日

西区の表土除去、遺構検出作業をほぼ終了し、かまど状遺構、溝跡、柱穴様ビットの精査を継続した。東区の表土除去、遺構検出も東区全体の半分程まで進んだ。

L S 53グリッドに2基、L T 51グリッドにかまど状遺構1基を新たに検出したが、1基は遺存状態が悪かった。

西区の遺構検出作業がほぼ終わり、当初の推定どおり市道近くには遺構がほとんどないことがわかった。西区の検出遺構の精査を急ぐとともに、東区の表土除去、遺構検出作業を進めることとした。

【第12週】9月1日～9月5日

東区の表土除去、遺構検出作業を終了。西区のかまど状遺構の精査がほぼ終了した。新たに検出した井戸跡の精査も行った。また、柱穴様ビットの精査を継続し平面図作成を進めた。5日には全体写真の撮影を行った。

井戸跡を新たに4基検出したが、幸い底面が浅く速やかに精査を終えた。

主な遺構の精査はほぼ終了したが、平面図の作成が若干残った。

【第13週】9月8日～9月10日

全ての遺構精査と実測を完了した。発掘機材を搬出して調査の全工程を終了した。

第4節 整理作業の方法と経過

整理作業は、秋田県埋蔵文化財センター南調査班で行った。出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測・採択・トレースなどを行った。また、遺構図面については、発掘現場で実測した実測図をもとに第2原図を作製し、それをトレースした。自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

第2章 調査の記録

第1節 遺構と遺物

1 検出遺構と遺物

本遺跡は、微高地に形成された近世の集落跡であるが、戦後に開田された際に上部を削平されたため、遺存状態は不良であった。遺構種別毎の数値は、掘立柱建物跡18棟、かまど状遺構9基、井戸跡4基、焼土遺構2基、土坑4基、柱列4条、溝跡22条、河道跡2条、性格不明遺構1基、柱穴様ビット501基である(付図)。

掘立柱建物跡に付属すると判断されたかまど状遺構は4基であり、井戸跡の覆い屋と想定される掘立柱建物跡が1棟ある。また、周囲を巡る溝跡をもつ掘立柱建物跡もある。

(1) 掘立柱建物跡

S B 01掘立柱建物跡(第4図)

《位置・確認》MC50グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はS-87°-Eである。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行1間1.9m(P1-P2)、梁行1間1.15m(P1-P3)である。庇は付かない。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S B 02掘立柱建物跡(第4図)

《位置・確認》LO48・LR48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-88°-Eである。SA824柱列と重複するが新旧は不明である。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行2間3.0m(P7-P9、1.4m+1.6m)、梁行1間1.61m(P4-P7)である。庇は北側と南側に0.3~0.6mの幅で付く。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》P2より陶器が1点出土した(第29図4)。

S B 03掘立柱建物跡(第4図)

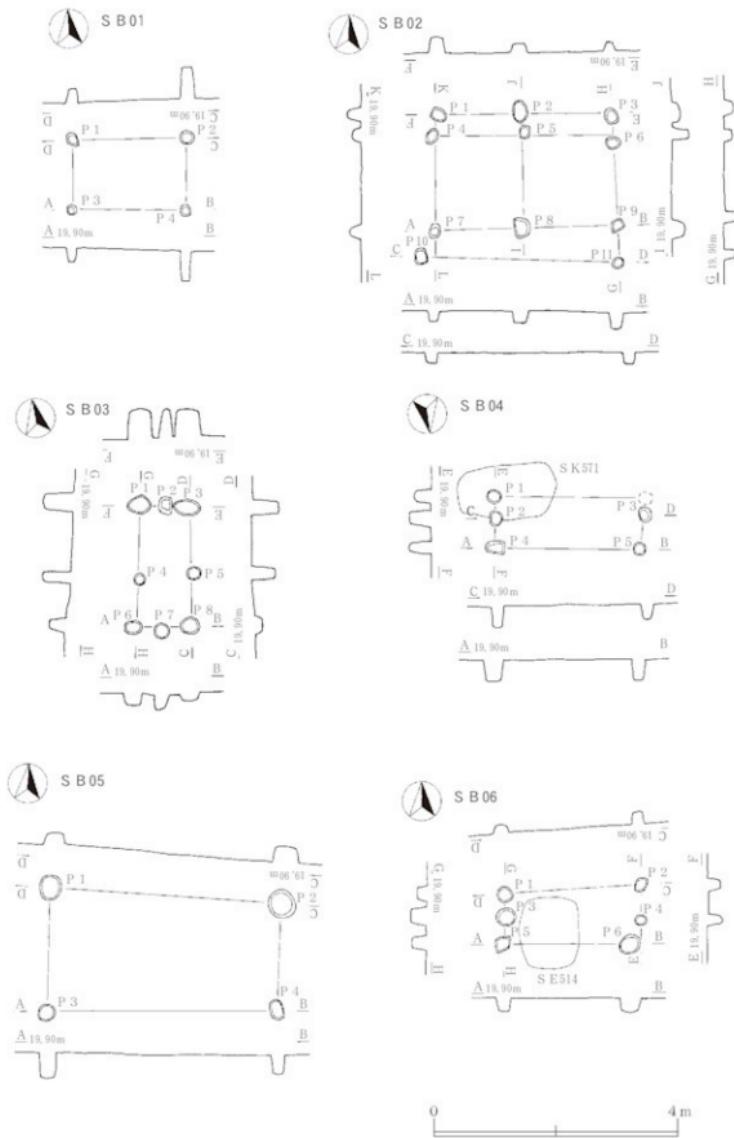
《位置・確認》MA52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-13°-Eである。

S B 05掘立柱建物跡プランと重複するが新旧関係は不明である。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行2間2.0m(P3-P8、1.2m+0.8m)、梁行2間0.9m(P6-P8、0.42m+0.48m)である。庇は付かない。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。



第4図 SB 01~06掘立柱建物跡実測図

沖田 II 遺跡

S B 04掘立柱建物跡(第4図)

《位置・確認》 L S 49・L R 49グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-82°-Eである。S K 571土坑と重複するが本建物跡が新しい。

《規模・柱穴・方向》 身舎は桁行1間2.4m(P 4-P 5)、梁行2間0.9m(P 1-P 4、0.41m+0.49m)である。庇は付かない。

《付属施設》 付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。

S B 05掘立柱建物跡(第4図)

《位置・確認》 M A 52・L T 52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-88°-Eである。S B 03掘立柱建物跡プランと重複するが、新旧関係は不明である。

《規模・柱穴・方向》 身舎は桁行1間3.8m(P 1-P 2)、梁行1間2.06m(P 1-P 3)である。庇は付かない。

《付属施設》 付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。

S B 06掘立柱建物跡(第4図)

《位置・確認》 L R 46グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-89°-Eである。

《規模・柱穴・方向》 身舎は桁行1間2.25m(P 1-P 2)、梁行2間0.84m(P 1-P 5、0.4m+0.44m)である。庇は付かない。

《付属施設》 S E 514井戸跡が本建物跡プラン内に存在するが、付属するものかあるいは重複関係にあるものか不明である。

《出土遺物》 P 5から柱材片を検出した。

S B 07掘立柱建物跡(第5図)

《位置・確認》 L S 48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-88°-Eである。本建物跡プラン内にS K 299土坑が存在するが付属するものかあるいは重複関係にあるものか不明である。また、S O 405かまど状遺構とも重複するが本建物跡が新しい。

《規模・柱穴・方向》 身舎は桁行2間3.82m(P 5-P 7、1.64m+1.18m)、梁行2間2.84m(P 2-P 7、1.36m+1.48m)である。庇は南側に0.38mの幅で付く。

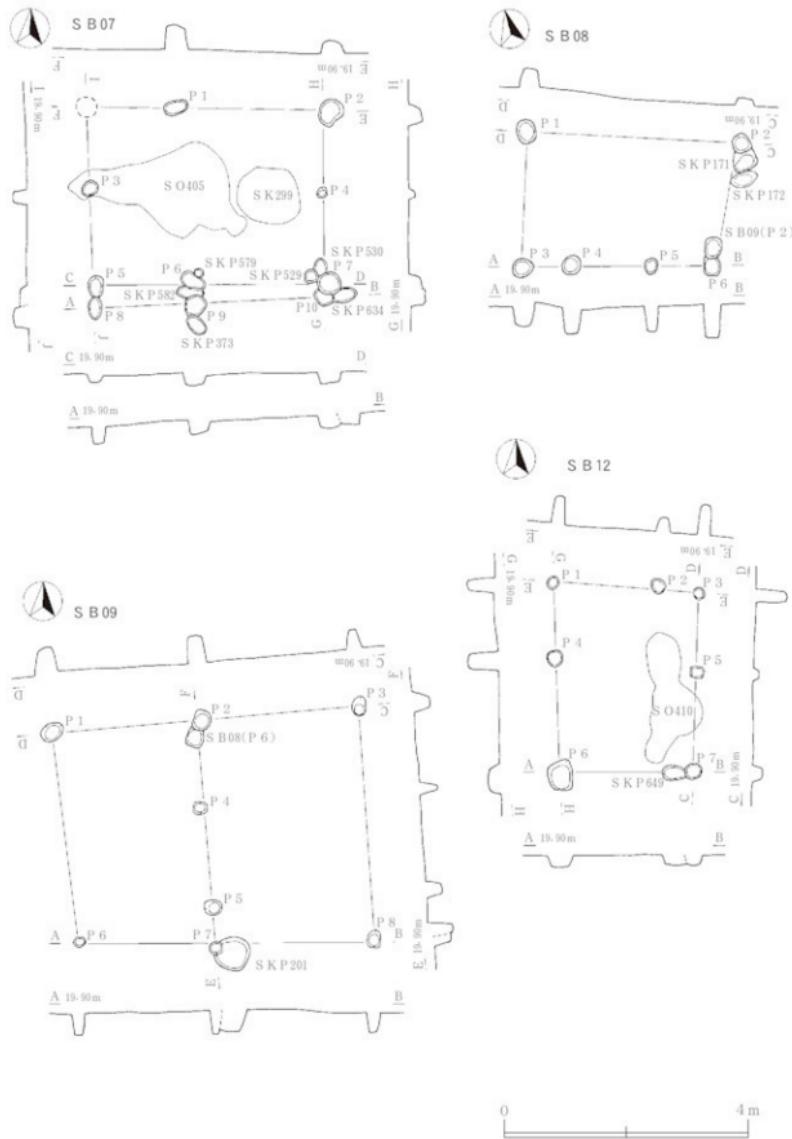
《付属施設》 付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。

S B 08掘立柱建物跡(第5図)

《位置・確認》 M B 48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-76°30'-Eである。S B 09掘立柱建物跡やS K P 171・172柱穴様ピットと重複するが本建物跡が古い。

《規模・柱穴・方向》 身舎は桁行3間3.12m(P 3-P 6、0.82m+1.34m+0.96m)、梁行1間



第5図 SB 07~09・12掘立柱建物跡実測図

沖田 II 遺跡

2.16m(P 1 - P 3)である。庇は付かない。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》P 4より陶磁器片が1点出土した。

S B 09掘立柱建物跡(第5図)

《位置・確認》MA 47・MB 47グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-86°-Eである。S B 08掘立柱建物跡プランやSK P 201柱穴様ビットと重複するが、本建物跡が新しい。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行2間5.06m(P 1 - P 3、2.44m+2.62m)、梁行1間3.46m(P 1 - P 6)である。庇は付かない。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S B 10掘立柱建物跡(第6図)

《位置・確認》LR 51・LQ 51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-1°-Eである。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行4間4.41m(P 2 - P 12、1.31m+1.1m+0.96m+1.04m)、梁行1間3.8m(P 12 - P 14)である。庇は西側に0.44mの幅で付く。桁行2間で間仕切りがあり、南側の間では東側に幅0.61mの仕切りもある。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S B 11掘立柱建物跡(第6図)

《位置・確認》LS 53・LR 53グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-88°-Eである。SN 425焼土遺構と重複するが新旧関係は不明である。また、SO 422かまと状遺構とも重複するが本建物跡が新しい。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行1間3.9m(P 3 - P 4)、梁行1間2.44m(P 4 - P 6)である。庇は4面に付き、幅は東側と西側が0.66m~0.7m、北側と南側が0.21m~0.38mである。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

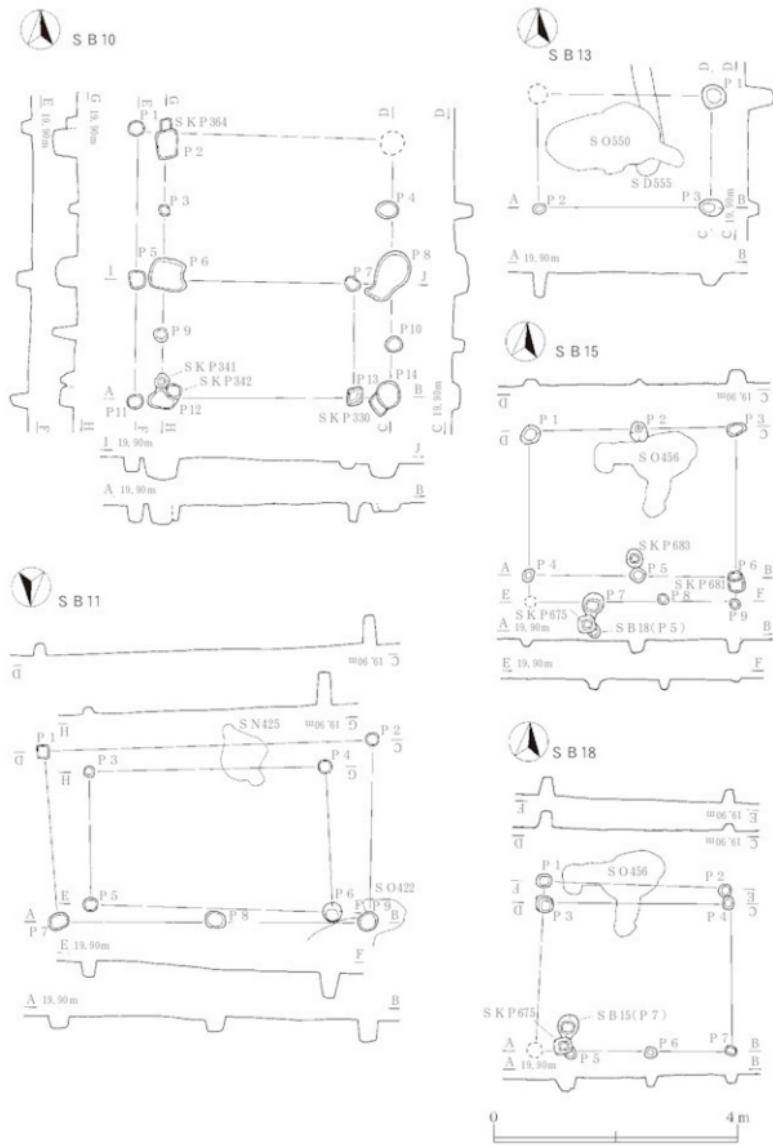
S B 12掘立柱建物跡(第5図)

《位置・確認》LT 47・48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-1°30'-Eである。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行2間3.16m(P 1 - P 6、1.24m+1.92m)、梁行2間2.42m(P 1 - P 3、1.74m+0.68m)である。庇は付かない。

《付属施設》SO 410かまと状遺構が付属する(かまと状遺構については次項目で記述する)。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。



第6図 SB 10・11・13・15・18掘立柱建物跡実測図

沖田 II 遺跡

S B13掘立柱建物跡(第6図)

《位置・確認》MA・LT50・51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-89°-Eである。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行1間2.82m(P2-P3)、梁行1間1.86m(P1-P3)である。庇は付かない。

《付属施設》S O550かまと状遺構が付属する(かまと状遺構については次項目で記述する)。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S B14掘立柱建物跡(第8図)

《位置・確認》MA48・MB48、MA49・MB49グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-86°-Eである。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行2間4.2m(P1-P3、1.02m+3.18m)、梁行2間3.02m(P3-P11、1.56m+1.46m)である。

《付属施設》本建物跡の西側、南側、南東側には建物跡プランを囲むように幅0.16m~0.22mの溝が巡っていた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S B15掘立柱建物跡(第6図)

《位置・確認》LS51・LT51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-84°-Eである。S B18掘立柱建物跡プランと重複するが本建物跡が古い。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行2間3.36m(P1-P3、1.8m+1.56m)、梁行1間2.42m(P3-P6)である。南側に0.44mの幅で3間の庇が付く。

《付属施設》S O456かまと状遺構が付属する(かまと状遺構については次項目で記述する)。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S B16掘立柱建物跡(第7図、図版1-2)

《位置・確認》MB51・MC51・MD51・ME51・MB52・MC52・MD52・ME52・MB53・MC53・MD53・ME53グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-80°-Eである。

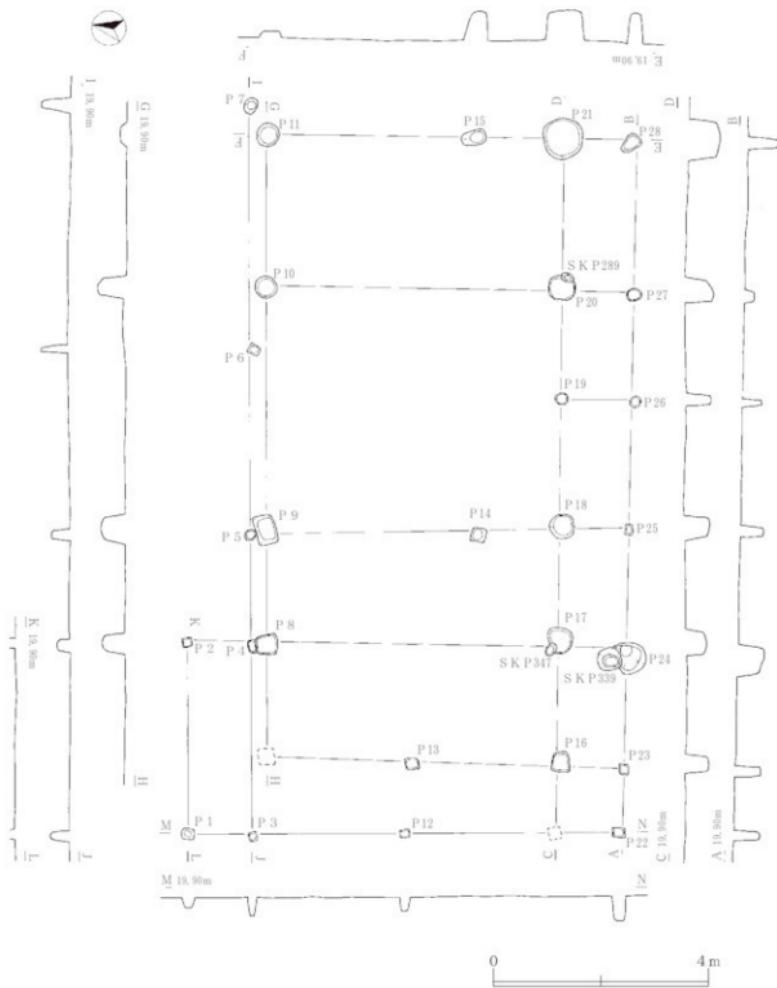
《規模・柱穴・方向》身舎は桁行5間11.62m(P16-P21、2.22m+2.2m+2.4m+2.0m+2.8m)、梁行2間5.5m(P11-P21、3.88m+1.62m)である。

《付属施設》東側を除く3面に庇(幅は北側0.3m、南側1.28m、西側1.3m)が、北西側には幅1.22mの張り出しが付く。

《出土遺物》P7より陶器が1点出土した(第29図3)。

S B17掘立柱建物跡(第8図)

《位置・確認》MB51・52、MC51・52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方位はN-1°30' -Wである。



第7図 SB16掘立柱建物跡実測図

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行1間4.42m(P1-P4)、梁行2間4.3m(P4-P6、2.12m+2.18m)である。庇はない。

〈付属施設〉 S O 100かまど状遺構が付属する(かまど状遺構については次項目で記述する)。

《出土遺物》P.3より陶器皿1点が出土した(第8図)。

沖田Ⅱ遺跡

S B 18掘立柱建物跡(第6図)

《位置・確認》LS 51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。主軸方向はN-86°-Eである。

S B 15掘立柱建物跡プラン並びにSO 456かまと状遺構と重複するが本建物跡が新しい。

《規模・柱穴・方向》身舎は桁行1間3.01m(P3-P4)、梁行1間2.44m(P4-P7)である。庇は北側に幅0.4mで付く。

《付属施設》付属施設は確認できなかった。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

(2)かまと状遺構

SO 100かまと状遺構(第9図、図版2-3~5)

《位置・確認》MB 51・52グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。

《重複》SK P 269・288・290柱穴様ピットと重複するが、柱穴様ピットが本遺構よりも新しい。

《平面形・規模・方向》かまどは長軸1.84m(北-南)、短軸1.03m(東-西)で、柄鏡形を呈する。長軸1.33m、短軸1.21mの不整梢円形の燃焼部と長さ1.27m、幅0.63mの長方形の前庭部(焚口)、長さ0.47m、幅0.32mの長方形の煙道部から構成されていた。煙道部はかまと長軸線上に造られていた。確認面から0.36m掘り下げ、かまと本体は内部の横断面が梢円形になるように粘土で架構していたが上部構造は滅失していた。燃焼部・前庭部の底面には炭化物が0.04~0.07mの厚さで堆積していた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

SO 261かまと状遺構(第10図、図版2-8・3-1)

《位置・確認》MA 54グリッドのⅢ層上面で明黄褐色粘土・灰黃褐色粘土の広がりを確認した。

《重複》SK P 262柱穴様ピットと重複するが、柱穴様ピットが本遺構よりも新しい。

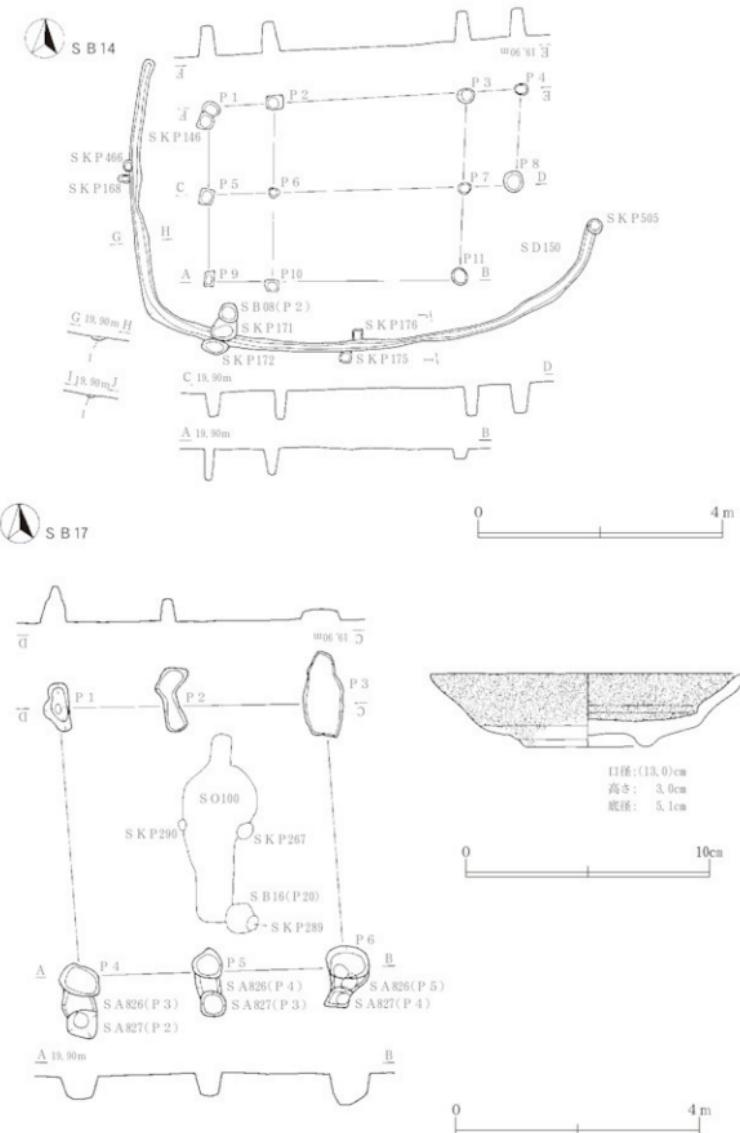
《平面形・規模・方向》かまどは長軸2.4m(北西-南東)、短軸0.9m(北東-南西)でイチジク形を呈し、長軸1.38m、短軸0.9mの不整梢円形の燃焼部・前庭部(焚口)と、長さ0.63m、幅0.35mの煙道部から構成されていた。煙道部は長軸に対し南東側に20度傾いて付けられていた。確認面から0.39m掘り下げて構築していたが、かまと本体と煙道部の上面は削平されていた。粘土で架構した上部構造の基礎部分を確認したにとどまる。燃焼部・前庭部の底面には炭化物が0.02~0.03mの厚さで堆積していた。

《出土遺物》陶磁器片が1点出土した。

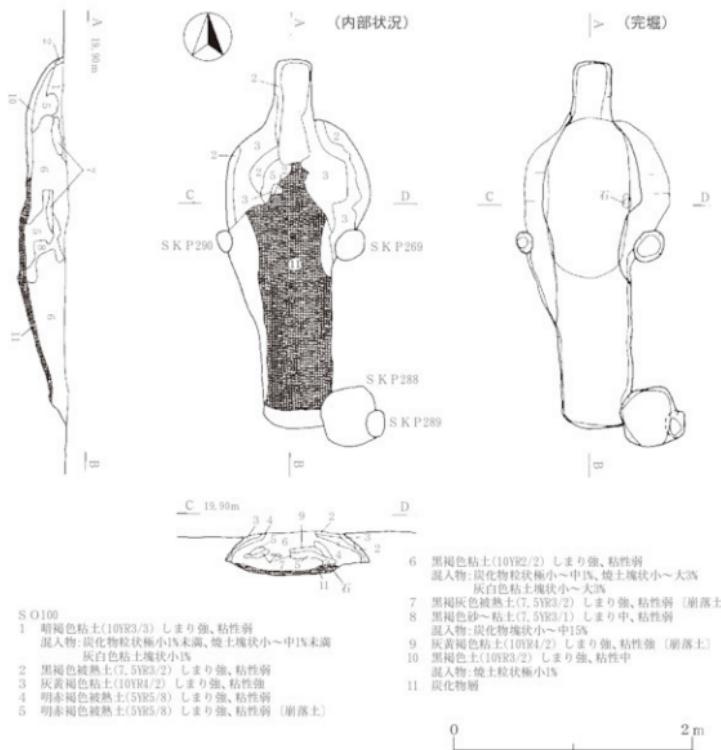
《特記事項》底面に堆積する炭化物を含む土層(16層)を年代測定し、95.4%の確率で紀元前406~366年という暦年数値を得た。この年代値は、地山層の堆積年代を示している可能性が高く、遺構の構築年代ではない。

SO 405かまと状遺構(第11図、図版3-2・3)

《位置・確認》LS 48グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。現代の水田の畦がかまと本体部分にあたり、煙道部と前庭部は上部を削平され、炭化物が広範囲に広がっていた。



第8図 SB 14・17掘立柱建物跡及びSB 17掘立柱建物跡柱穴出土陶器実測図



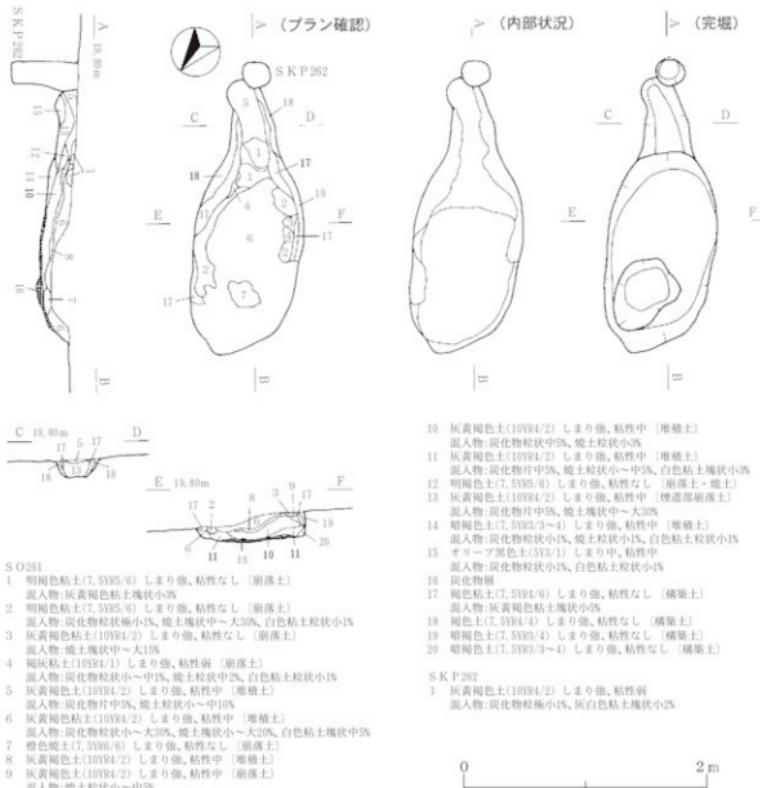
第9図 S O100かまど状遺構実測図

《重複》なし

《平面形・規模・方向》かまどは長軸2.4m(東-西)、短軸1.3m(北-南)で、長軸0.95m、短軸1.2mの不整梢円形の燃焼部と長軸1.05m、短軸0.65mの半梢円形の前部(焚口)、長さ0.5m、幅0.32mの煙道部から構成されていた。煙道部はかまど長軸から南西側に45度傾いて付けられていた。確認面から0.32m掘り下げ、かまど本体は内部の横断面が梢円形になるように粘土で架構したと考えられるが上部構造は滅失していた。燃焼部には4枚の炭化物層が0.02～0.07mの厚さで堆積していた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《特記事項》底面に堆積する9層の上面に堆積する炭化物層(8層)を年代測定し、76.4%の確率で1,492～1,603年、19.0%の確率で1,615～1,643年という暦年数値を得た。



第10図 S O 261かまど状遺構実測図

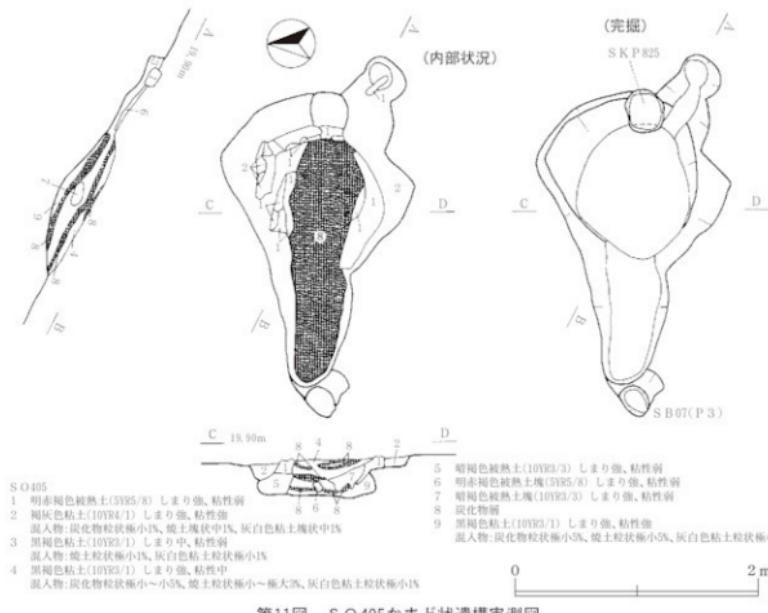
S O 410かまど状遺構(第12図、図版2-6・7)

《位置・確認》 L T47・48グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。

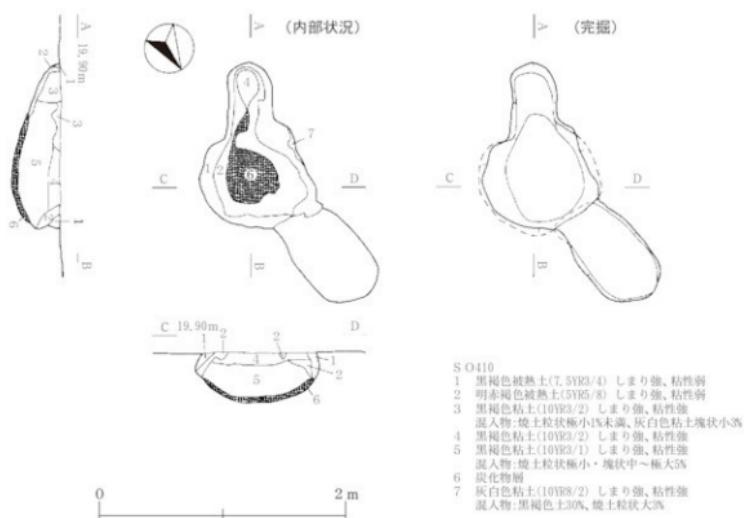
《重複》なし

《平面形・規模・方向》 かまどは長軸1.4m(北東-南西)、短軸1.0m(北西-南東)で、長軸0.95m、短軸0.88mの不整梢円形の燃焼部と長軸0.86m、短軸0.53mの半梢円形の前庭部(焚口)。長さ0.42m、幅0.37mの煙道部から構成されていた。煙道部はかまど長軸から南西側に45度傾いて付けられていた。かまどは確認面から0.4m掘り下げられており、保存状態は良好で、内部の横断面が梢円形になるように粘土で架構していた。燃焼部の底面には炭化物が0.03~0.05mの厚さで堆積していた。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。



第11図 S O 405かまど状遺構実測図



第12図 S O 410かまど状遺構実測図

S O411かまど状遺構(第13図)

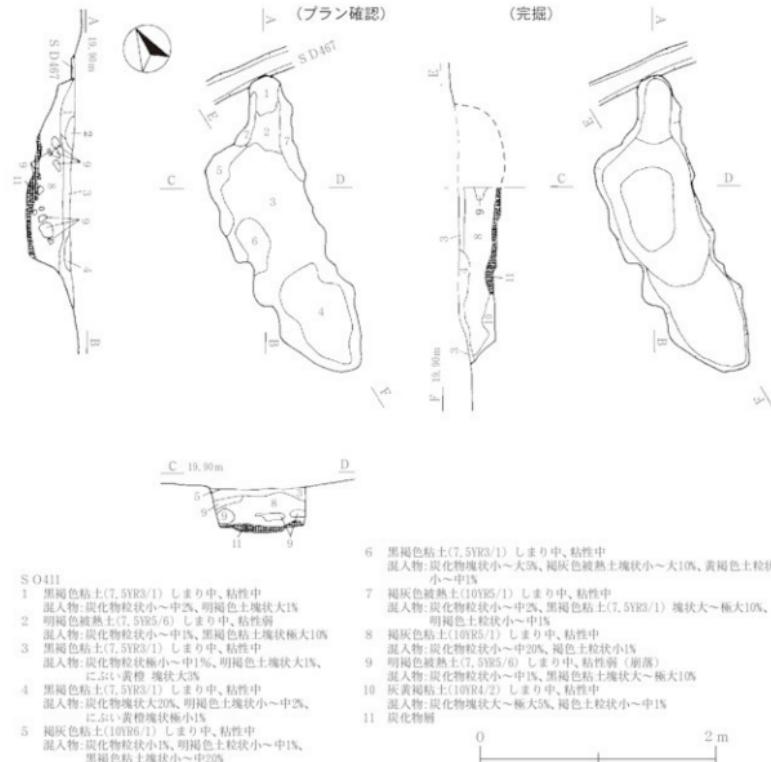
《位置・確認》 L S 45グリッドのⅢ層上面で焼土の広がりを確認した。

《重複》 S D 467溝跡と重複するが、本遺構が新しい。

《平面形・規模・方向》 かまど本体は長軸2.0m(北-南)、短軸0.8m(東-西)で、長方形を呈する。掘り込みプランから長軸1.26m、短軸0.8mの不整橢円形の燃焼部と長軸0.84m、短軸0.68mの半橢円形の前庭部(焚口)、長さ0.58m、幅0.36mの煙道部から構成されていることが確認された。煙道部はかまど長軸方向から30度東側に傾いて付けられていた。確認面から0.36m掘り下げられており、かまど本体の保存状態は良好で、内部の横断面が橢円形になるように粘土で架構していた。かまど底面には炭化物が0.05~0.08mの厚さで堆積していた。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。

《特記事項》 底面に堆積する炭化物層(11層)を年代測定し、92.4%の確率で1,438~1,492年、3.0%の確率で1,602~1,610年という歴年数値を得た。



第13図 S O411かまど状遺構実測図

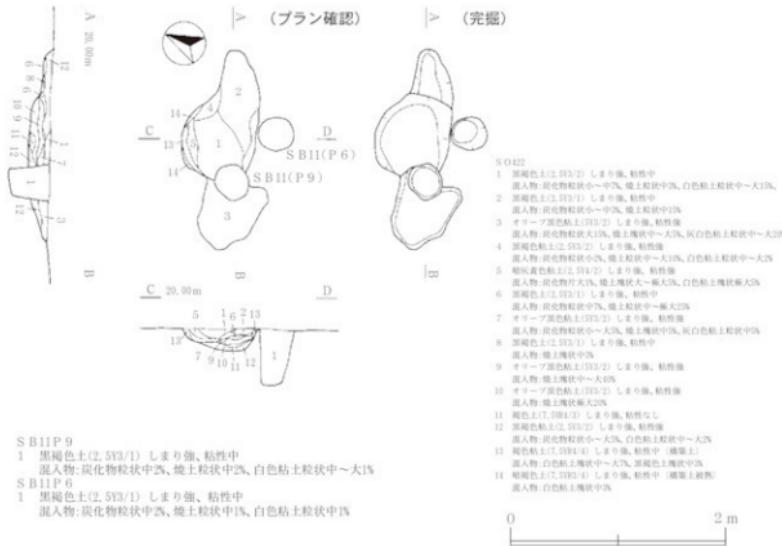
S0422かまと状遺構(第14図)

《位置・確認》LS53グリッドのⅢ層上面で焼土と黒褐色土の広がりを確認した。

《重複》SB11掘立柱建物跡の柱穴P9と重複するが、本遺構が古い。

《平面形・規模・方向》長軸0.78m、短軸0.67mの不整な梢円形の燃焼部と長軸0.55m、短軸0.62mの不整梢円形の前庭部、長さ0.43m、幅0.4mの半梢円形の煙道部からなるかまどは長軸1.9m(北東-南西)、短軸0.7m(北西-南東)の規模である。確認面から0.2m掘り下げられていたが全体のほぼ2/3が削平され上部構造は滅失していた。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。



第14図 SO422かまど状遺構実測図

SO455かまと状遺構(第15図、図版3-4)

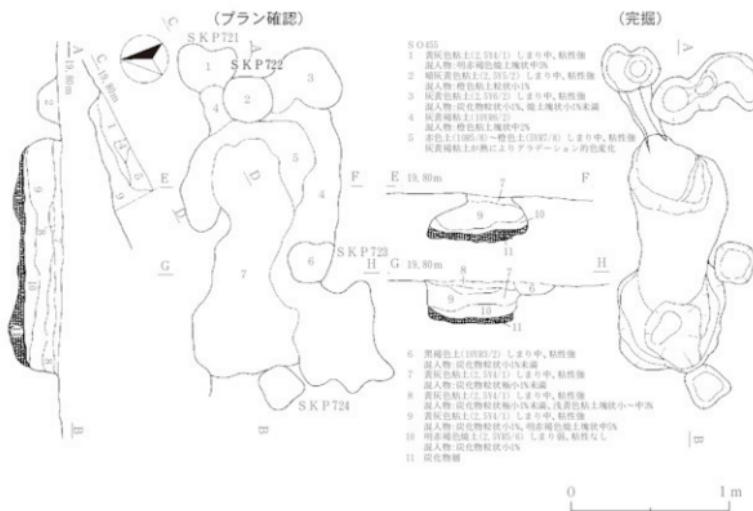
《位置：確認》 L.S52グリッドのⅢ層上面で赤色土と黄灰色粘土、黒褐色土の広がりを確認した。

〈重複〉 SKP721～724柱穴様ピットと重複するが、いずれの柱穴様ピットよりも古い。

《平面形・規模・方向》長軸0.8m、短軸0.6mの不整な橢円形の燃焼部と直径0.62~0.64mの不整円形の前庭部からなるかまと本体は長軸1.4m(東~西)、短軸0.6m(北~南)で、確認面から0.28~0.33m掘り下げ、かまと本体は内部の横断面が橢円形になるように粘土で架構したと考えられるが上部構造はほとんど消失していた。長さ0.52m、幅0.14~0.22mの煙道部がかまと長軸に対し北側に26度傾いて付けられていた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

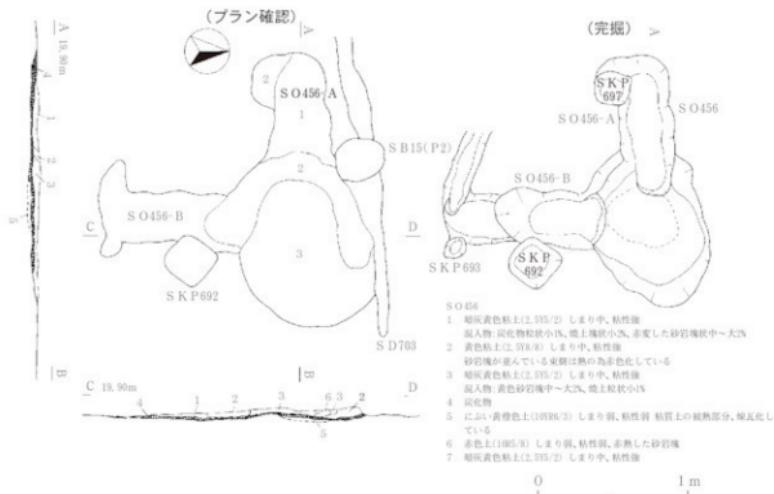
《特記事項》底面に堆積する炭化物層(11層)を年代測定し、95.4%の確率で1,480~1,635年という歴年数値を得た。



第15図 S O 455かまど状遺構実測図

S O 456かまど状遺構(16図)

《位置・確認》 L S51グリッドのⅢ層上面で赤色砂岩塊と暗灰黄色粘土の広がりを確認した。



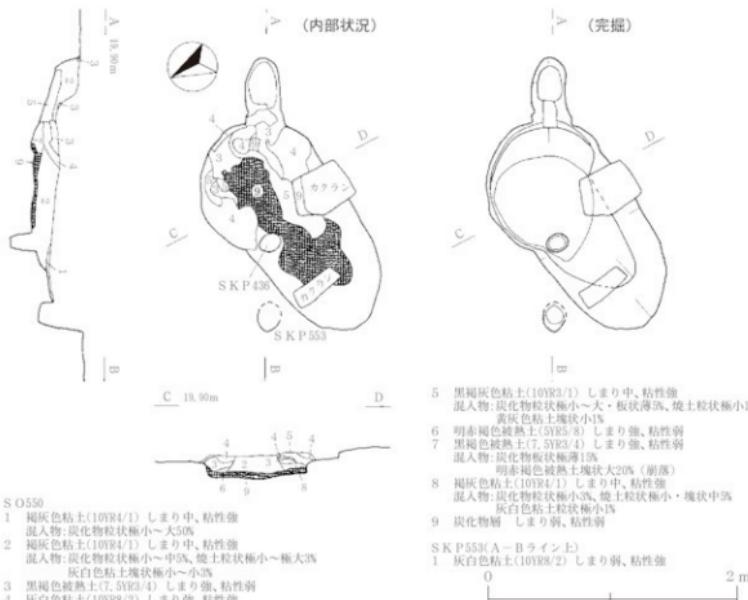
第16図 S O 456かまど状遺構実測図

《重複》 S K P 692・693・697柱穴様ピットと重複するが、いずれの柱穴様ピットよりも古い。

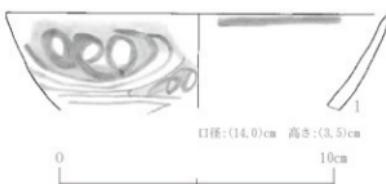
《平面形・規模・方向》 当初南北方向のかまど状遺構(S O 456-B)として構築されたが、燃焼部をそのまま煙道部の主軸を86度変更し、東西方向のかまど状遺構(S O 456-A)として造り替えていた。

S O 456-Aは、長軸1.0m、短軸0.75mの楕円形の燃焼部と長さ0.69m、幅0.37mの隅丸長方形の煙道部からなる本体は長軸1.69m(東-西)、短軸0.75m(北-南)で、確認面から0.05~0.07m掘り下げ、燃焼部と煙道部の境界には馬蹄形に赤色砂岩塊が並べられていた。燃焼部底面は、高熱により地山粘質土が煉瓦化していた。かまど本体は内部の横断面が楕円形になるように粘土で架構したと考えられるが上部構造は滅失していた。

S O 456-Bは、燃焼部をS O 456-A構築時に改変されている可能性があるが南側に長さ1.09m、



第17図 S O 550かまど状遺構実測図



第18図 S O 550かまど状遺構出土磁器実測図

幅0.37mの隅丸長方形の煙道部が付設されている。煙道部底面は二段になっていた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S O 550かまと状遺構(第17図、図版3-5)

《位置・確認》L T 50・51、M A 50・51のⅢ層面にて煙道部分のみ検出した。その後S K P 545柱穴様ピットの壁面で焼土塊が見つかり、かまと状遺構本体を確認した。S B 13掘立柱建物跡の内部に設置されたものと判断した。

《重複》S K P 436・545柱穴様ピットと重複するが、本遺構が古い。

《平面形・規模・方向》本体は長軸1.84m(東-西)、短軸1.03m(北-南)で楕円形を呈する。確認面から0.25m掘り下げ、かまと本体は内部の横断面が楕円形になるように粘土で地山面より上部に架構したと考えられるが上部構造は滅失していた。かまと底面には炭化物が0.03~0.05mの厚さで堆積していた。長さ0.56m、幅0.28mの煙道部が、かまと長軸に対し南側に35度傾いて付けられていた。

《出土遺物》底面から肥前磁器碗(Ⅱ期)の口縁部破片1点が出土した(第18図)。

(3) 井戸跡

S E 298井戸跡(第19図、図版3-6~8)

《位置・確認》L T 53グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複・覆い屋》S D 614溝跡と重複するが、本遺構が古い。上屋と思われるものは確認できなかった。

《平面形・規模》確認平面は隅丸方形を呈し、長軸1.35m(東-西)、短軸1.3m(北-南)、確認面からの深さは1.7mである。およそ0.7mの深さで段差が設けられ、方形の木枠が残っていた。

《枠・施設》長軸0.96m(東-西)、短軸0.8m(残存) (北-南)、厚さ0.02mの方形の木枠である。

《出土遺物》煙管の雁首と吸口(第20図2)、及び17世紀前半の肥前磁器(初期伊万里)碗(第20図1)、擂鉢(第20図4)、瓦質土器、須恵器甕片が出土した。

S E 361井戸跡(第19図、図版4-1)

《位置・確認》L T 52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

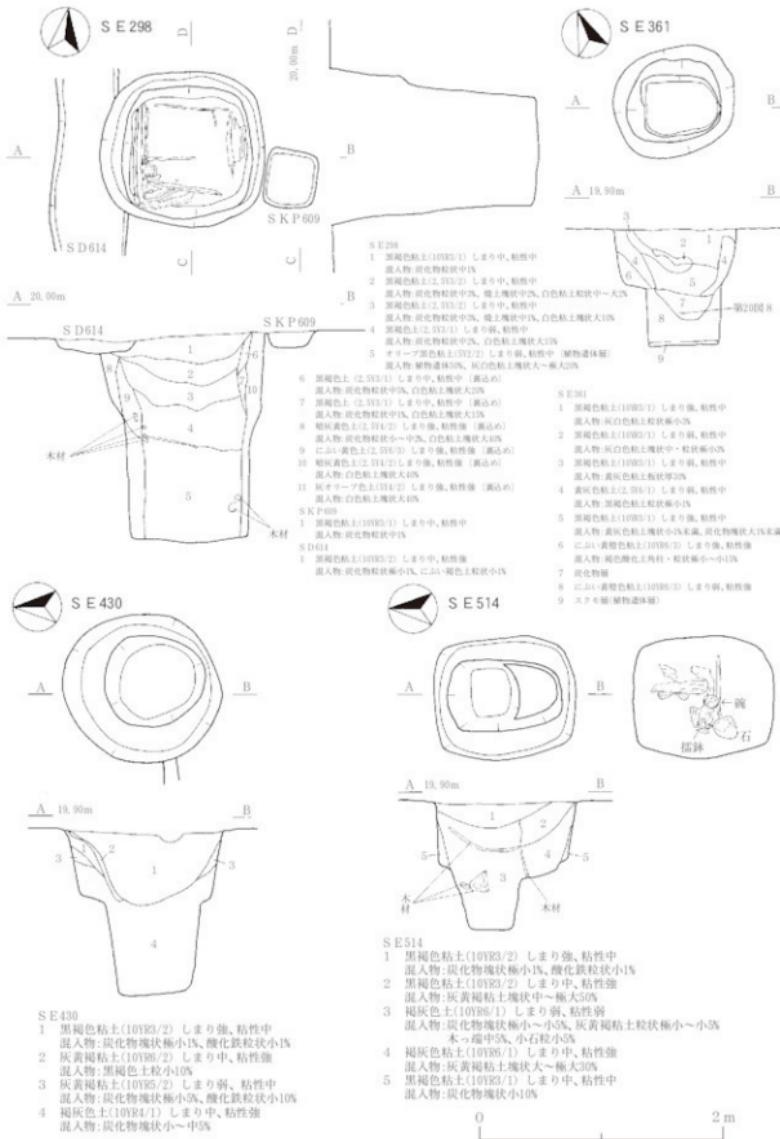
《重複・覆い屋》S B 05掘立柱建物跡と切り合うが、新旧関係は不明である。また西側にS B 03掘立柱建物跡があるが、規模から見てS E 361井戸跡の上屋施設の可能性がある。

《平面形・規模》確認平面は楕円形を呈し、長軸1.02m(北西-南東)、短軸0.88m(北東-南西)、確認面からの深さは0.95mである。およそ0.5mの深さで段差が設けられ、そこから長軸0.63m(北西-南東)、短軸0.55m(北東-南西)方形の掘り込みで底部に達する。

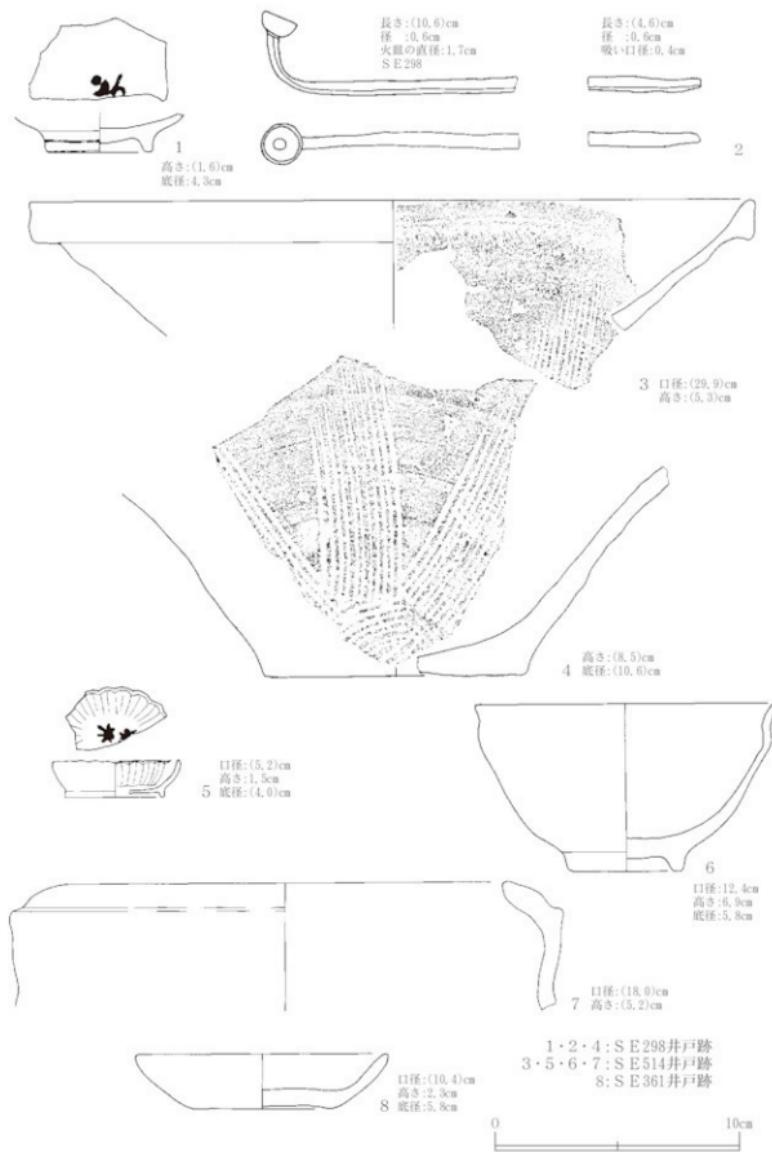
《堆積土の状況》廃棄の際に黒褐色土で一括して埋め戻していた。4・5層は井戸を作った際の裏込土と思われる。

《枠・施設》なし。S E 298井戸跡同様、木枠をはめていたものと考えられる。

《出土遺物》大窯時代と思われる瀬戸美濃産灰釉陶器皿が出土した(第20図8)。



第19図 S E 298・361・430・514井戸跡実測図



第20図 S E 298・361・514井戸跡出土煙管、陶磁器実測図

S E 430井戸跡(第19図)

《位置・確認》 L S・L R45グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複・覆い屋》 S D 467溝跡を切っている。上屋と思われるものは確認できなかった。

《平面形・規模》 長軸1.3、短軸1.2mの略円形である。確認面からの最深部は1.4mである。

《堆積土の状況》 確認平面は円形を呈し、長軸1.3m(北-南)、短軸1.2m(東-西)、確認面からの深さは1.4mである。およそ0.6mの深さで段差が設けられ、そこから長軸0.8m(北-南)、短軸0.7m(東-西)の梢円形の掘り込みで底部に達する。

《枠・施設》 なし。

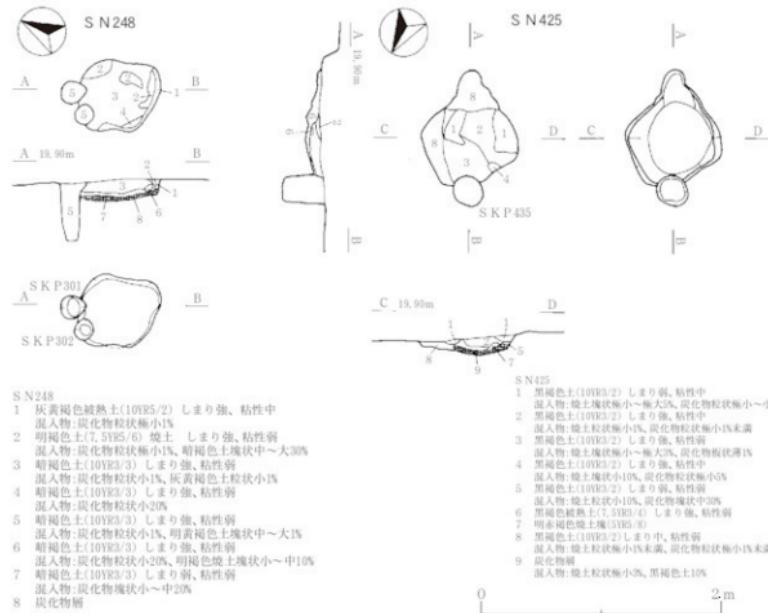
《出土遺物》 底部より木籠や箸が出土した。

S E 514井戸跡(第19図、図版4-2)

《位置・確認》 L P 46グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複・覆い屋》 S B 06掘立柱建物跡はS E 514井戸跡の上屋施設と考えられる。

《平面形・規模》 確認平面は隅丸方形を呈し、長軸1.16m(北-南)、短軸1.0m(東-西)、確認面からの深さは1.0mである。0.4mの深さで段差が設けられ、長軸0.8m(北-南)、短軸0.7m(東-西)の梢円形の掘り込みで底部に達する。



第21図 S N 248・425焼土遺構実測図

《堆積土の状況》廃棄の際に黒褐色土で一括して埋め戻していた。2・4・5層は井戸を作った際の裏込土と思われる。また廃棄の際に抜き取った木枠の一部と思われる板材や杭などの破片が堆積土中に混じっていた。

《枠・施設》なし。S E298井戸跡同様、木枠をはめていたものと考えられる。

《出土遺物》陶器では肥前産の甕片(第20図7)、擂鉢(第20図3)、17世紀前半の天目型甕(第20図6)や磁器では18世紀の紅皿(第20図5)が出土した。

(4) 焼土遺構

S N248焼土遺構(第21図)

《位置・確認》MA47グリッドのⅢ層上面で焼土塊と炭化物の広がりとして確認した。

《重複》SKP301・302柱穴様ピットと重複するが、本遺構が古い。

《平面形・規模・方向》長軸0.85m(北西—南東)、短軸0.6m(北東—南西)で、確認面から0.2m掘り下げられていた。底部には炭化物層が確認された。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

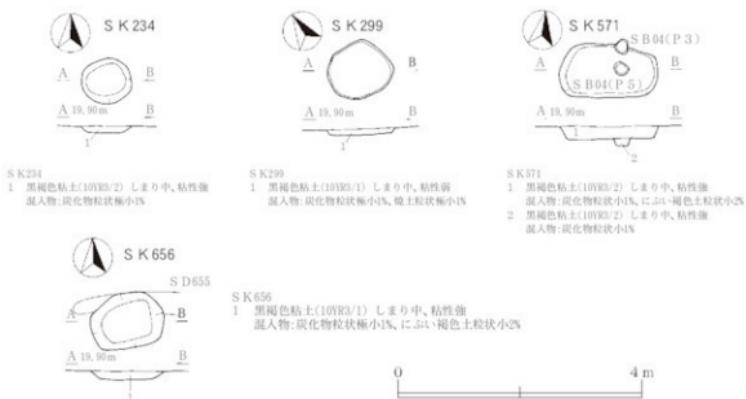
S N425焼土遺構(第21図)

《位置・確認》LS53グリッドのⅢ層上面で焼土塊と炭化物の広がりとして確認した。

《重複》SKP435柱穴様ピットと重複するが、本遺構が古い。

《平面形・規模・方向》長軸1.2m(北西—南東)、短軸0.8m(北東—南西)で、確認面から0.2m掘り下げられていたが、上部構造は滅失し焼土塊が散乱し南東側には炭の堆積を確認したので、小型のかまと状遺構だった可能性もある。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。



第22図 SK 234・299・571・656土坑実測図

(5) 土坑

S K234土坑(第22図)

《位置・確認》 M C48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複》なし

《平面形・規模・方向》長軸0.86m、短軸0.84mの楕円形を呈する。長軸は東一西方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.12mで、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S K299土坑(第22図)

《位置・確認》 L S48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。西側に近接してS O405かまと状遺構があり、S O405かまと状遺構と共にS B07掘立柱建物跡に覆われる。

《重複》なし

《平面形・規模・方向》長軸1.22m、短軸1.0mで、北東側と南東側隅が方形を呈する不整楕円形である。長軸は北西一南東方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.13mで、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S K571土坑(第22図)

《位置・確認》 L R49グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複》 S K P572・573柱穴様ピットと重複するが本遺構が古い。

《平面形・規模・方向》長軸1.73m、短軸0.9mで西側壁が張り出す長方形とも観察される。長軸は北東一南西方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.2mで、底面はほぼ平坦である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S K656土坑(第22図)

《位置・確認》 L R50グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《重複》 S D655溝跡と重複するが、本遺構が新しい。

《平面形・規模・方向》長軸1.23m、短軸0.39mの不整な楕円形を呈する。長軸は東一西方向である。

《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.16mで、底面はほぼ平坦である。

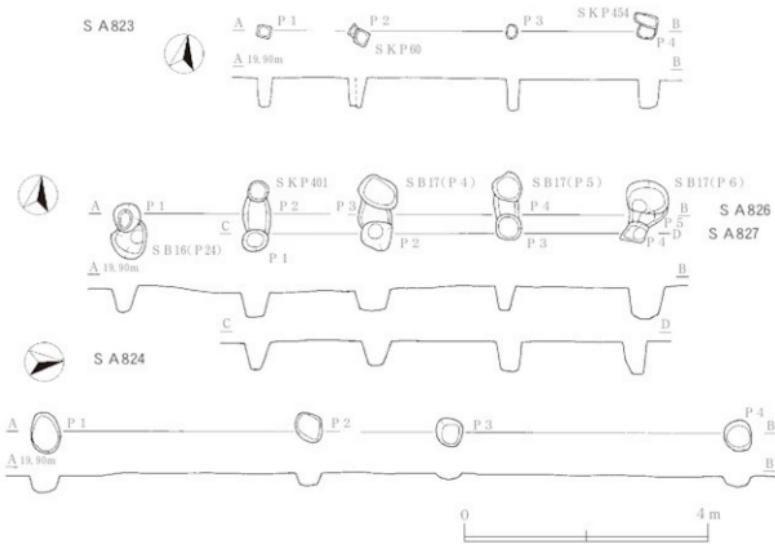
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

(6) 柱列

S A823柱列(第23図)

《位置・確認》 M B・M C51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北東一南西方向に3間の総長6.2mで、柱間距離はP 1から1.5m+2.5m+2.2mである。



第23図 SA823・824・826・827柱列実測図

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S A 824柱列(第23図)

《位置・確認》L Q45~48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北一南方向に3間の総長11.4mで、柱間距離はP 1から4.3m+2.3m+4.8mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S A 826柱列(第23図)

《位置・確認》MB・MC・MD51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北東一南西方向に4間の総長8.5mで、柱間距離はP 1から2.2m+1.9m+2.1m+2.3mである。

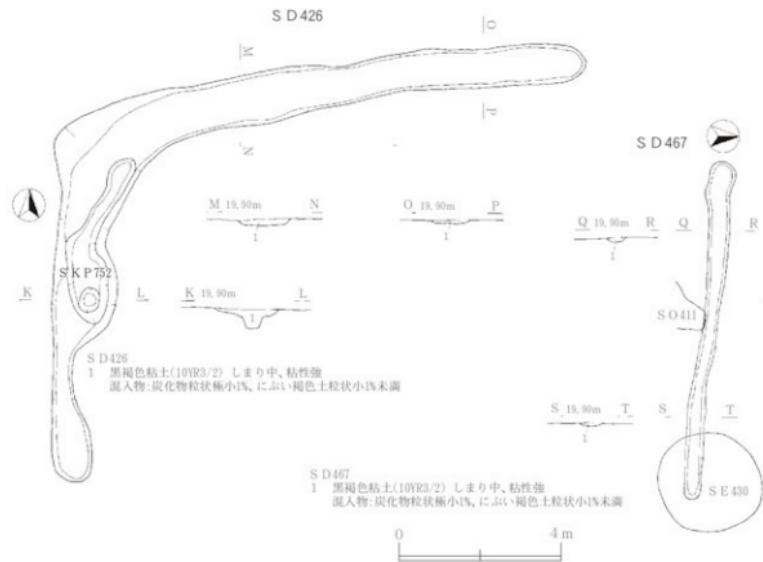
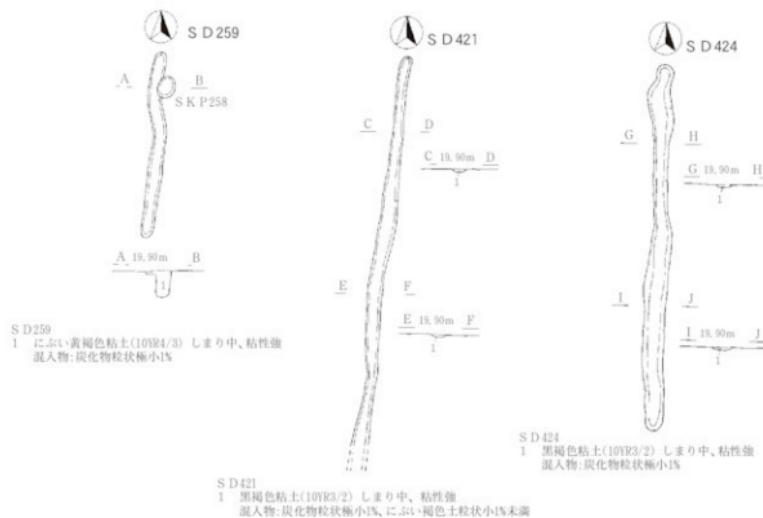
《出土遺物》遺物は出土しなかった。

S A 827柱列(第23図)

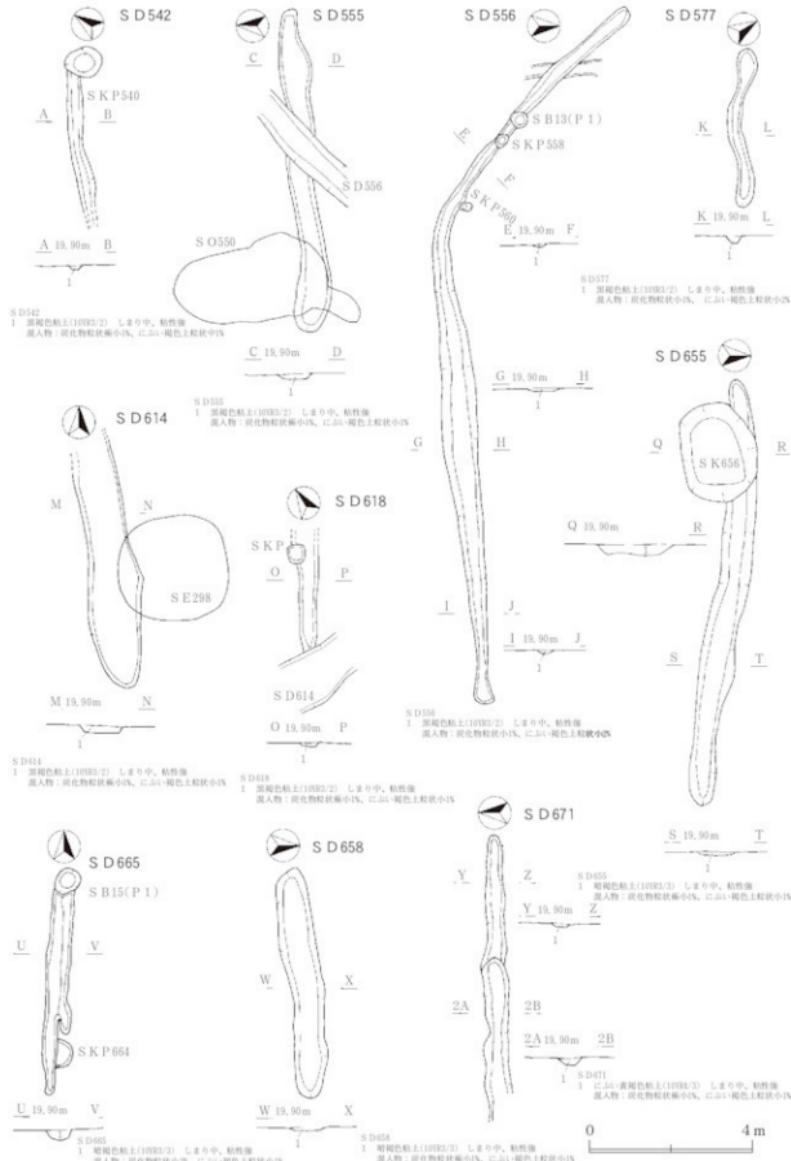
《位置・確認》MB・MC51グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

《規模・方向》北東一南西方向に3間の総長6.3mで、柱間距離はP 1から2.0m+2.2m+2.1mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

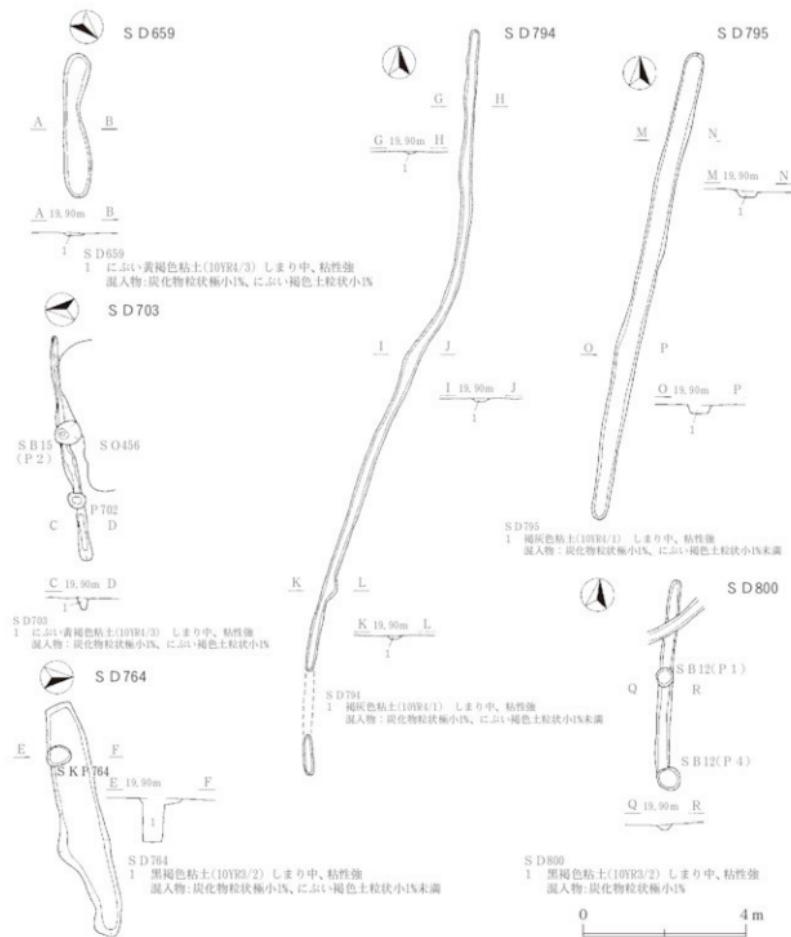


第24図 SD 259・421・424・426・467溝跡実測図(1)



第25図 SD 542・555・556・577・614・618・655・658・671溝跡実測図(2)

沖田II遺跡



第26図 S D 659・703・764・794・795・800溝跡実測図(3)

(7) 溝跡(第24図～第26図)

溝跡は22条確認した。計測値等は第1表のとおりである。

《出土遺物》 S D 618溝跡より陶磁器15片が出土した(第27図1・3)。

(8) 河道跡(付図)

河道跡は2条検出した。

《出土遺物》 S L 586河道跡より陶磁器3片が出土した(第27図2～4)。

第1表 溝跡観察表

遺構番号	検出グリッド	大きさ			出土遺物 ：点数
		長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	
S D 150	M A 48	12.03	0.19 ~ 0.26	0.10	—
S D 259	L T 45・46	2.30	0.15 ~ 0.20	0.32	—
S D 421	L T 45・46	4.86	0.11 ~ 0.22	0.04	—
S D 426	L S 46・47	8.27	0.24 ~ 1.11	0.24	—
S D 467	L S 45	4.18	0.17 ~ 0.32	0.06	—
S D 424	L T 46	4.52	0.16 ~ 0.30	0.04	—
S D 542	L T 50	1.77	0.15 ~ 0.22	0.06	—
S D 555	L T 51	3.91	0.19 ~ 0.43	0.07	—
S D 577	L Q 49	1.94	0.12 ~ 0.25	0.10	—
S D 556	L T 51	9.26	0.12 ~ 0.45	0.04	—
S D 614	L T 52・53	3.07	0.50 ~ 0.68	0.10	—
S D 618	M A 53	1.29	0.15 ~ 0.27	0.06	陶磁器:15
S D 655	L R 50	5.25	0.23 ~ 0.45	0.14	—
S D 658	L R 50	2.83	0.35 ~ 0.47	0.04	—
S D 659	L Q 50	1.75	0.19 ~ 0.35	0.04	—
S D 665	L T 51	2.48	0.11 ~ 0.33	0.14	—
S D 671	L S 51	3.53	0.18 ~ 0.34	0.10	—
S D 703	L S 51	2.76	0.05 ~ 0.17	0.14	—
S D 764	L R 45	2.90	0.30 ~ 0.65	0.54	—
S D 794	L N 47・48	9.37	0.11 ~ 0.18	0.04	—
S D 795	L N 47・48	5.77	0.20 ~ 0.28	0.10	—
S D 800	L T 48	2.28	0.10 ~ 0.18	0.06	—

(9)性格不明遺構

S X 404性格不明遺構(第28図)

《位置・確認》 L Q 50グリッドに位置し、Ⅲ層上面で確認した。

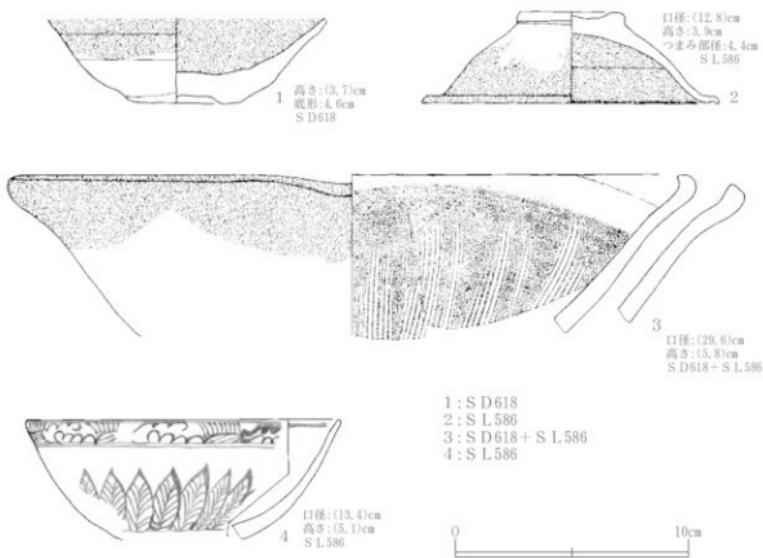
《重複》なし。

《平面形・規模・方向》長軸3.5m、短軸2.4mの東側に張り出しのある楕円形を呈する。長軸はほぼ北-南方向である。柱穴様ピット6基が確認された。柱穴様ピットは本遺構より古い。

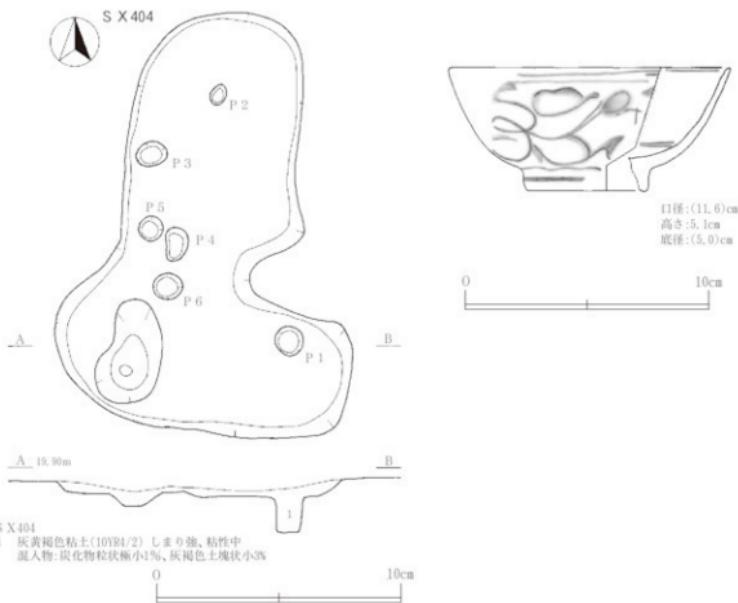
《深さ・底面の状況》確認面からの最深部は0.12mである。底面はほぼ平坦であるが南西隅に窪みがあり、焼土塊が確認された。

《出土遺物》磁器1片が出土した(第28図)。

沖田 II 遺跡



第27図 S D 618溝跡、S L 586道路出土陶磁器実測図



第28図 S X 404性格不明遺構と出土磁器実測図

第2表 柱穴様ビット観察表(1)

S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数	S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数
			長軸(cm)	短軸(cm)					長軸(cm)	短軸(cm)	
002	M E 52	楕円形	34	24	—	058	M C 51	不整な楕円形	23	18	—
006	M D 53	楕円形	23	18	—	060	M C 51	長方形	24	21	—
007	M D 53	方形	11	10	—	062	M C 51	長方形	23	18	—
008	M D 53	長方形	14	10	—	063	M C 51	方形	16	16	—
009	M C 54	方形	16	15	—	064	M C 51	方形	18	18	—
010	M D 53	長方形	18	15	—	065	M D 51	円形	36	36	—
011	M D 53	楕円形	24	14	陶磁器:2	068	M B 53	楕円形	27	23	—
014	M E 53	楕円形	20	17	—	069	M B 53	楕円形	24	22	陶磁器:1
016	M C 54	方形	18	18	—	070	M B 53	長方形	40	30	—
017	M C 53	長方形	28	26	—	071	M C 51	不整な楕円形	16	14	—
019	M C 53	楕円形	20	16	—	074	M B 51	不整な楕円形	24	12	—
020	M C 53	長方形	20	18	—	075	M D 51	方形	15	14	—
021	M C 53	(楕円形)	40	(35)	—	077	M C 52	楕円形	36	30	—
022	M C 53	楕円形	34	28	—	078	M C 52	楕円形	33	16	—
024	M C 53	円形	20	19	—	079	M C 52	長方形	16	14	—
025	M C 53	(楕円形)	25	(18)	—	080	M C 52	長方形	16	14	—
026	M C 53	楕円形	24	17	—	081	M B 53	長方形	32	26	—
027	M C 53	(長方形)	(20)	14	—	082	M B 53	長方形	32	18	—
028	M C 53	長方形	30	27	—	083	M B 53	(楕円形)	28	(20)	—
030	M C 53	楕円形	28	26	—	084	M B 53	楕円形	50	40	陶磁器:1
031	M C 53	(楕円形)	(28)	18	—	085	M B 53	長方形	33	26	—
032	M C 53	(楕円形)	(26)	24	—	087	M C 52	長方形	18	13	—
033	M C 53	長方形	28	18	陶磁器:2	088	M C 52	長方形	25	18	—
037	M D 52	長方形	19	15	—	089	M C 52	長方形	37	30	—
038	M D 52	長方形	32	30	—	090	M B 50	円形	20	20	—
039	M C 53	楕円形	42	37	—	091	M B 51	円形	22	21	—
040	N D 52	方形	22	21	—	093	M B 50	長方形	40	36	—
041	M E 51	楕円形	20	15	—	094	M B 50	長方形	45	18	—
042	M E 51	(楕円形)	(22)	20	—	095	M B 50	長方形	22	20	—
043	M D 52	楕円形	32	25	—	096	M B 50	長方形	22	19	—
045	M C 53	円形	26	26	—	097	M B 50	長方形	17	14	—
046	M C 53	長方形	28	23	—	099	M B 51	楕円形	33	27	—
047	M D 52	方形	26	25	—	101	M B 50	不整な楕円形	35	30	—
049	M C 52	楕円形	30	25	—	102	M B 50	長方形	34	18	—
050	M C 52	楕円形	33	29	—	103	M B 50	楕円形	22	18	—
051	M C 52	長方形	24	20	—	104	M A 50	楕円形	35	26	—
052	M D 52	長方形	22	20	—	107	M B 51	楕円形	20	18	—
053	M D 52	長方形	30	19	—	108	M B 52	楕円形	22	18	—
054	M D 51	長方形	20	17	—	109	M B 51	長方形	20	14	—
055	M D 50	長方形	22	15	—	110	M B 51	楕円形	30	27	—
057	M C 51	楕円形	45	36	—	111	M A 51	(長方形)	(28)	24	—

第3表 柱穴様ピット観察表(2)

S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 : 点数	S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 : 点数
			長軸 (cm)	短軸 (cm)					長軸 (cm)	短軸 (cm)	
112	M A 51	不整な楕円形	37	28	—	171	M A 48	(楕円形)	43	(35)	—
113	M A 51	楕円形	37	35	—	172	M A 48	楕円形	46	24	—
114	M A 51	楕円形	30	25	—	173	M A 48	長方形	80	52	—
115	M A 51	楕円形	39	25	—	175	M A 48	長方形	22	20	—
116	M A 51	楕円形	27	20	—	176	M A 48	長方形	22	18	—
117	M A 50	長方形	22	15	—	179	M A 49	楕円形	20	18	—
119	M C 53	円形	10	10	—	180	M B 49	長方形	20	17	—
120	M C 52	楕円形	21	18	—	187	M A 48	長方形	24	15	—
123	M C 51	楕円形	25	19	—	191	M C 48	楕円形	45	37	—
125	M D 52 (楕円形)	34 (30)	—	—	—	193	M C 49	楕円形	31	25	—
126	M D 52	長方形	26	20	—	198	M C 50	楕円形	26	24	—
127	M D 52	方形	20	20	—	201	M C 47	楕円形	58	55	—
128	M D 52	楕円形	28	23	—	202	M A 48	長方形	19	16	—
129	M B 51	方形	15	14	—	203	M A 47 (楕円形)	24 (20)	—	—	—
130	M A 51	長方形	17	14	—	204	M A 47 (不整な楕円形)	27	21	—	—
131	M A 50	長方形	24	20	—	206	M A 47	楕円形	23	19	—
132	M D 50	長方形	38	22	—	207	M A 47	楕円形	26	22	—
135	M E 53 (長方形)	(15) 15	—	—	—	208	M A 47 (楕円形)	36 (30)	—	—	—
136	M B 51 (長方形)	33 (32)	—	—	—	209	M A 47	円形	18	18	—
137	M B 51	楕円形	27	25	—	210	M A 47	円形	23	22	—
138	M B 52	円形	16	15	—	211	M A 47	長方形	28	25	—
142	M B 49	楕円形	23	18	—	213	M A 47	楕円形	40	36	—
143	M B 49	長方形	26	24	—	214	M A 47 (楕円形)	18 (17)	—	—	—
144	M B 49 (楕円形)	23 (9)	—	—	—	222	M B 50	長方形	28	12	—
146	M B 49	不整な楕円形	33	32	—	223	M B 50	長方形	20	16	—
147	M B 49	楕円形	24	20	—	226	M D 50	長方形	22	18	—
149	M B 49	方形	32	31	—	227	M C 49	不整な楕円形	24	15	—
151	M A 49	楕円形	25	20	—	228	M C 49	長方形	22	20	—
152	M A 49	楕円形	30	27	—	229	M C 49	楕円形	22	20	—
154	M A 49	楕円形	31	22	—	230	M C 49	長方形	20	16	—
155	M A 48	長方形	48	32	—	231	M C 49	不整な長方形	20	17	—
158	M A 48	長方形	17	14	—	232	M C 49	方形	25	24	—
159	M A 48	楕円形	25	22	—	237	M C 48	長方形	20	17	—
160	M A 48	長方形	25	22	—	238	M C 49	長方形	25	20	—
161	M A 49	楕円形	30	20	—	239	M C 49	長方形	27	20	—
162	M A 49	長方形	23	20	—	240	M C 49 (楕円形)	(30)	22	—	—
163	M A 49	楕円形	20	20	—	241	M C 49	円形	22	21	—
165	M A 49	長方形	19	17	—	242	M C 49	楕円形	45	38	—
166	M A 49	楕円形	26	22	—	245	M C 49	楕円形	32	24	—
168	M B 48	長方形	25	15	—	249	M B 50	方形	28	28	—
169	M B 48	楕円形	25	18	—	257	L T 46	楕円形	20	18	—

第4表 柱穴様ビット観察表(3)

S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数	S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数
			長軸 (cm)	短軸 (cm)					長軸 (cm)	短軸 (cm)	
258	L T 46	楕円形	30	22	—	354	L R 48	楕円形	18	17	—
262	M A 53	楕円形	23	21	—	355	L R 48	楕円形	30	21	—
264	M A 53	円形	18	18	—	356	L R 48	楕円形	30	25	—
265	M A 53	楕円形	32	28	陶磁器:1	357	L R 48	楕円形	26	21	—
267	M A 53	(楕円形)	26	(23)	—	359	L R 48	(長方形)	(30)	30	—
268	M A 53	楕円形	22	20	—	362	L R 52	円形	28	28	—
269	M B 52	楕円形	29	22	—	366	L R 52	(楕円形)	(25)	18	—
273	L S 48	円形	21	20	—	367	L R 52	円形	30	30	—
277	L T 49	楕円形	27	25	—	372	L S 47	楕円形	25	23	—
289	M B 51	楕円形	24	16	—	373	L S 48	楕円形	41	27	—
290	M B 51	楕円形	20	13	—	374	L S 47	楕円形	27	25	—
292	M A 52	楕円形	26	22	—	375	L S 47	円形	25	24	—
295	M A 52	円形	28	28	—	377	L Q 48	不整な楕円形	34	24	—
301	M A 47	楕円形	23	19	—	380	L Q 48	楕円形	30	28	—
302	M A 47	円形	17	17	—	382	L R 52	楕円形	48	30	—
303	M B 53	楕円形	27	25	—	383	L R 52	(楕円形)	20	(17)	—
304	M B 53	楕円形	30	26	—	386	L R 52	円形	21	20	—
305	M B 53	(楕円形)	(26)	24	—	387	L R 52	長方形	56	30	陶磁器:1
306	M B 54	(楕円形)	18	(16)	—	388	L R 52	(楕円形)	32	(28)	—
307	M B 54	円形	21	20	—	390	LR・LS 52	長方形	45	40	—
310	M B 54	円形	20	20	—	392	L Q 52	長方形	13	11	—
311	M B 54	楕円形	36	29	—	400	M E 51	楕円形	22	20	—
320	M A 52	楕円形	26	22	—	401	M C 51	楕円形	35	33	—
321	M A 52	長方形	16	14	—	402	M C 51	(楕円形)	(56)	48	—
322	M A 52	長方形	22	20	—	408	M B 51	楕円形	30	27	陶磁器:1
323	M A 52	楕円形	34	29	—	413	M A 52	長方形	30	21	—
326	M A 52	楕円形	38	36	—	417	LS・LT 51	(楕円形)	22	(17)	—
327	M A 52	楕円形	64	40	—	418	L R 52	長方形	20	18	—
329	L Q 51	方形	20	20	—	419	L Q 48	楕円形	24	19	—
335	L Q 52	楕円形	42	35	—	420	L T 49	楕円形	68	54	陶磁器:1
336	L Q 52	楕円形	35	32	陶磁器:1	423	M B 51	楕円形	36	25	陶磁器:1
339	L Q 51	楕円形	33	25	—	427	L T 50	長方形	23	18	—
340	L Q 51	円形	20	20	—	429	M A 50	楕円形	22	13	—
345	M C 54	楕円形	31	29	—	434	L Q 45	円形	34	33	—
346	M B 53	楕円形	30	26	—	435	L S 53	楕円形	26	24	—
347	M D 51	楕円形	24	20	—	436	L T 51	楕円形	18	15	—
349	M D 51	楕円形	20	17	—	451	M D 51	長方形	23	21	—
350	M D 51	楕円形	26	18	—	452	M B 52	楕円形	56	47	—
351	L R 48	楕円形	33	26	—	453	M B 51	楕円形	38	30	—
352	L R 48	楕円形	30	20	—	454	M B 51	(楕円形)	30	(23)	—
353	L R 48	長方形	25	20	—	457	M B 47	楕円形	50	40	—

第5表 柱穴様ピット観察表(4)

S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数	S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数
			長軸 (cm)	短軸 (cm)					長軸 (cm)	短軸 (cm)	
459	M B 47	楕円形	30	20	—	523	L P 45	楕円形	133	65	—
461	M B 47	長方形	18	14	—	524	L P 45	楕円形	23	14	—
462	M B 48	長方形	25	13	—	525	L P 45	楕円形	38	25	—
464	M B 49	方形	20	20	—	526	L P 45	長方形	20	17	—
466	M B 49	円形	19	18	—	527	L P 45	円形	25	24	—
468	M A 48	楕円形	26	23	—	528	L P 45	長方形	20	18	—
469	M A 48	楕円形	25	18	—	529	L S 48	楕円形	25	22	—
471	L S 46	楕円形	18	15	—	530	L S 48	(楕円形)	(26)	23	—
472	L S 46	長方形	39	32	—	531	L R 48	楕円形	25	20	—
473	L S 46	円形	15	15	—	534	L R 48	楕円形	23	20	—
474	L R 46	楕円形	25	23	—	535	L R 48	(楕円形)	(28)	25	—
475	L R 46	楕円形	35	23	—	537	L T 50	楕円形	36	30	—
476	L R 46	不整な楕円形	68	28	—	538	L T 50	楕円形	36	25	—
477	L R 46	楕円形	54	30	—	539	L T 50	楕円形	24	20	—
478	L R 46	楕円形	30	25	—	540	L T 50	不整な楕円形	47	38	—
479	L R 46	方形	70	70	—	541	L T 50	楕円形	20	16	—
480	L R 46	不整な長方形	33	30	—	543	M A 50	楕円形	44	31	—
481	L R 46	楕円形	19	13	—	545	L T 50	楕円形	26	22	—
485	L Q 46	楕円形	23	20	—	546	L T 50	円形	20	20	—
487	L Q 46	楕円形	47	30	—	547	L T 50	楕円形	20	18	—
488	L Q 46	円形	28	28	—	548	L T 50	楕円形	27	21	—
489	L Q 46	長方形	85	75	陶磁器 1. 漢唐器 1.	549	L T 50	楕円形	20	18	—
490	L Q 46	楕円形	20	18	—	553	M A 51	楕円形	33	24	—
491	L Q 46	楕円形	40	36	—	554	M A 51	楕円形	26	21	—
492	L R 48	楕円形	27	25	—	558	L T 51	楕円形	40	30	—
493	L R 48	(楕円形)	(20)	18	—	559	L T 50 - 51	楕円形	24	18	—
494	L R 48	楕円形	25	20	—	560	L T 50	楕円形	32	22	—
495	L R 49	楕円形	23	15	—	561	L T 50	楕円形	21	19	—
498	L T 51	楕円形	34	21	—	565	L Q 48	楕円形	26	24	—
499	M A 49	楕円形	23	18	—	566	L R 49	楕円形	25	20	—
504	L T 49	長方形	60	55	—	567	L R 49	楕円形	24	20	—
505	L T 49	楕円形	26	23	—	569	L R 48	楕円形	47	25	—
506	L T 49	楕円形	30	28	—	570	L S 48	楕円形	27	22	—
507	L T 49	楕円形	36	31	—	578	L S 48	長方形	34	25	—
508	L T 49	楕円形	44	35	—	579	L S 48	(楕円形)	(15)	12	陶磁器 1.
509	L T 49	楕円形	18	14	—	582	L S 48	(楕円形)	48	(30)	—
515	L R 46	方形	26	25	—	585	M A 50	楕円形	20	16	—
516	L R 46	長方形	90	65	—	587	L R 47	楕円形	22	20	—
520	L R 46	楕円形	25	20	—	590	M A 52	円形	16	15	—
521	L R 46	楕円形	18	16	—	591	M A 52	不整な楕円形	28	24	—
522	L R 46	楕円形	20	18	—	593	M A 52	長方形	28	20	—

第6表 柱穴様ピット観察表(5)

S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数	S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 :点数
			長軸(cm)	短軸(cm)					長軸(cm)	短軸(cm)	
594	M A 52	長方形	24	18	—	660	L Q 50	橢円形	25	22	—
595	M A 51	橢円形	21	17	—	661	L S 50	橢円形	25	21	—
596	M A 51	方形	20	20	—	662	L Q 50	不整な橢円形	25	22	—
597	L T 52	長方形	53	35	—	664	L T 51	(橢円形)	33	(22)	—
599	L T 52	橢円形	44	33	—	667	L T 51	橢円形	20	18	—
600	L T 52	長方形	30	24	—	668	L S 51	方形	36	35	—
601	L T 52	橢円形	26	23	—	669	L S 51	橢円形	23	20	—
602	L T 52	橢円形	30	23	—	670	L S 51	長方形	30	28	—
603	L T 52	(橢円形)	44	(36)	—	675	L S 51	方形	31	30	—
604	L T 52	橢円形	28	26	—	680	L S 51	橢円形	19	17	—
605	L T 52	円形	25	24	—	681	L S 51	(橢円形)	29	(25)	—
607	L T 53	不整な橢円形	26	23	—	683	L S 51	橢円形	35	30	—
608	L T 53	橢円形	32	26	—	684	L S 51	不整な橢円形	28	20	—
609	L T 53	長方形	48	42	—	685	L S 51	(橢円形)	43	(33)	—
611	L T 53	長方形	32	28	—	686	L S 51	橢円形	19	16	—
612	L T 53	橢円形	43	34	—	687	L S 51	橢円形	27	25	—
613	L T 53	長方形	83	75	—	688	L S 51	橢円形	18	16	—
615	M A 53	橢円形	27	22	—	689	L S 51	橢円形	33	26	—
616	M A 53	長方形	27	23	—	690	L S 51	橢円形	33	29	—
617	M A 53	長方形	24	22	—	691	L S 51	橢円形	22	16	—
620	M B 51	長方形	24	20	—	692	L S 51	長方形	32	30	—
621	M C 51	橢円形	28	26	—	693	L S 51	橢円形	18	14	—
622	M B 51	円形	25	24	—	694	L S 51	橢円形	17	15	—
623	M B 51	橢円形	20	15	—	697	L S 51	長方形	25	22	—
624	M B 51	橢円形	21	15	—	700	L S 51	橢円形	25	20	—
625	M B 51	橢円形	22	13	—	702	L S 51	橢円形	23	19	—
626	M B 51	橢円形	26	21	—	704	L R 51	橢円形	23	21	—
629	M B 51	長方形	40	33	—	705	L R 51	長方形	23	18	—
630	M B 52	円形	20	19	—	706	L R 51	方形	20	20	—
631	M B 52	長方形	20	18	—	707	L R 51	長方形	30	25	—
632	M B 52	円形	21	20	—	708	L R 51	長方形	20	15	—
633	M B 53	橢円形	20	18	—	709	L R 51	円形	27	26	—
634	L R 48	(橢円形)	43	(23)	—	710	L R 51	橢円形	27	25	—
638	L Q 48	長方形	23	20	—	711	L R 51	橢円形	22	20	—
639	L R 48	橢円形	20	16	—	712	L R 51	橢円形	24	20	—
640	L R 49	橢円形	18	16	—	713	L R 51	橢円形	18	15	—
641	L S 49	橢円形	23	20	—	714	L R 51	方形	15	15	—
642	L S 49	橢円形	25	23	—	717	L R 52	橢円形	15	13	—
646	L T 48	長方形	22	20	—	718	L R 52	橢円形	25	20	—
647	L T 47	長方形	19	16	—	720	L R 52	円形	28	28	—
649	L T 47	(橢円形)	(40)	27	—	721	L S 52	橢円形	18	16	—

第7表 柱穴様ピット観察表(6)

S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 ：点数	S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 ：点数
			長軸 (cm)	短軸 (cm)					長軸 (cm)	短軸 (cm)	
722	L S 52	円形	30	30	—	772	L Q 45	楕円形	70	48	—
723	L S 52	楕円形	30	26	—	773	L Q 45	長方形	30	25	—
724	L S 52	方形	27	27	—	774	L Q 45	方形	30	30	—
725	L S 53	楕円形	24	18	—	775	L Q 45	楕円形	23	14	—
728	L S 53	楕円形	26	23	—	776	L Q 44	楕円形	29	25	—
729	L S 53	楕円形	43	37	—	777	L Q 44	円形	22	21	—
730	L S 53	方形	21	20	—	778	L Q 44	楕円形	44	28	—
732	L S 53	不整な楕円形	25	21	—	779	L P 44	方形	20	19	—
733	L S 53	円形	35	35	—	780	L P 44	円形	16	15	—
734	L R 53	楕円形	24	20	—	781	L P 44	円形	17	16	—
736	L R 53	長方形	25	20	—	782	L Q 43	楕円形	30	25	—
737	L R 53	長方形	30	25	—	783	L Q 43	楕円形	27	20	—
738	L R 53	(楕円形)	40	(30)	—	784	L P 43	円形	21	20	—
739	L R 53	楕円形	24	18	—	785	L P 43	楕円形	23	18	—
742	L R 53	円形	20	20	—	786	L P 43	円形	18	18	—
743	L R 53	円形	32	32	—	787	L P 42	円形	18	18	—
744	L R 53	楕円形	30	22	—	788	L P 42	不整な楕円形	25	19	—
745	L Q 53	楕円形	21	16	—	789	L P 42	不整な楕円形	25	22	—
747	L P 52	楕円形	30	23	—	790	L P 42	楕円形	20	18	—
748	L Q 47	楕円形	24	20	—	791	L P 42	長方形	33	20	—
749	L Q 48	楕円形	32	25	—	792	L P 42	楕円形	25	18	—
750	L Q 46	長方形	60	46	—	793	L P 42	楕円形	20	17	—
751	L S 46	楕円形	39	20	—	796	LQ43 南	楕円形	20	17	—
752	L S 46	楕円形	30	25	—	797	L T 47	楕円形	40	29	—
753	L S 46	楕円形	43	36	—	801	L M 51	円形	21	20	—
754	L S 46	(楕円形)	24	(15)	—	802	L M 51	楕円形	31	26	—
755	L R 45	円形	26	25	—	803	LM51 東	楕円形	24	21	—
756	L R 45	楕円形	26	23	—	804	LM51 東	楕円形	48	30	—
757	L R 45	楕円形	40	32	—	805	L M 50	楕円形	28	26	—
758	L R 45	方形	25	24	—	806	L M 50	楕円形	18	16	—
759	L R 45	長方形	25	22	—	807	L M 50	楕円形	20	18	—
760	L R 45	楕円形	22	19	—	808	L M 50	楕円形	45	40	—
761	L R 45	楕円形	29	20	—	809	L M 50	楕円形	20	18	—
762	L R 45	楕円形	33	25	—	810	L M 50	(楕円形)	38	(20)	—
763	LR45・46	円形	20	20	—	811	L M 50	楕円形	28	25	—
765	L R 44	楕円形	18	16	—	812	LM50 東	円形	20	20	—
766	L R 43	楕円形	20	18	—	813	L M 49	長方形	22	18	—
767	L R 43	楕円形	25	21	—	814	L M 49	楕円形	25	18	—
768	L R 44	方形	13	12	—	815	L M 49	楕円形	22	20	—
769	L Q 46	楕円形	29	25	—	816	L M 49	方形	17	17	—
770	L Q 46	不整な楕円形	30	25	—	817	L M 48	楕円形	26	20	—

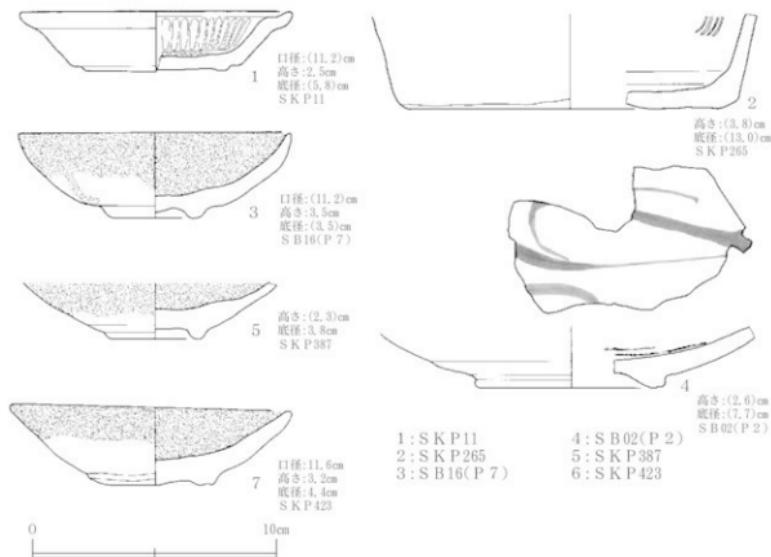
第8表 柱穴様ピット観察表(7)

S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 ：点数	S K P 番号	検出 グリッド	平面形	大きさ		出土遺物 ：点数
			長軸 (cm)	短軸 (cm)					長軸 (cm)	短軸 (cm)	
818	L M48	円形	21	20	—	825	L S48	橢円形	35	32	—
819	L M48	長方形	25	20	—	828	M D51	長方形	20	15	—
820	L M48	長方形	23	18	—	829	M C53	方形	30	30	—
821	L M47	長方形	22	20	—	830	M C53	長方形	33	30	—
822	L S51	橢円形	35	30	—						

(10)柱穴様ピット(付図)

調査時に確認した柱穴様ピットは656基であるが、その後に掘立柱建物跡の柱穴となったものもあり、最終的には501基である。計測値等は第2表～第8表のとおりである。

《出土遺物》 S K P11柱穴様ピットより陶磁器片2点[その内の1点(第29図1、図版4-3)]、S K P 265柱穴様ピットより陶磁器1点(第29図2)、S K P387柱穴様ピットより陶磁器片1点(第29図5)、S K P423柱穴様ピットより陶磁器片1点(第29図6、図版4-4)が出土した。



第29図 S B02(P 2)・16(P 7)掘立柱建物跡、SKP11・265・378・387・423柱穴様ピット出土陶磁器実測図

2 遺構外出土遺物

遺構外からは、中・近世陶磁器と、古代の土師器・須恵器などが中コンテナで7箱分出土した。

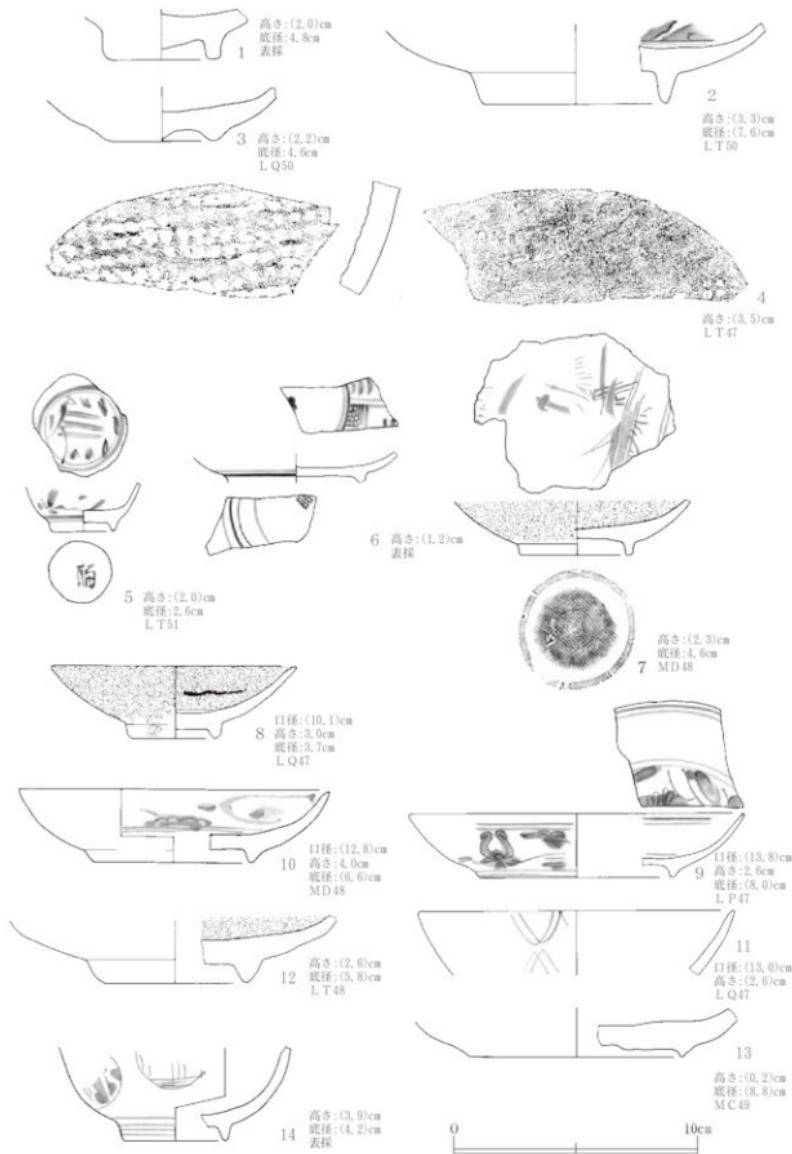
(1) 肥前陶磁器

陶器は、16世紀末～17世紀初頭に生産された胎土目積みと砂目積み段階の皿(第30図3)が多数出土したほか、内側に波状叩き痕や格子目状叩き痕(第30図4)のある瓶・甌類(第31図25・26)、17世紀後半～18世紀前半にかけ京焼の影響を受けた京焼風陶器(第30図7)、内側に銅緑釉・外側に透明釉を掛け、見込み蛇目釉剥する内野山窯産の皿(第30図12)などが出土した。

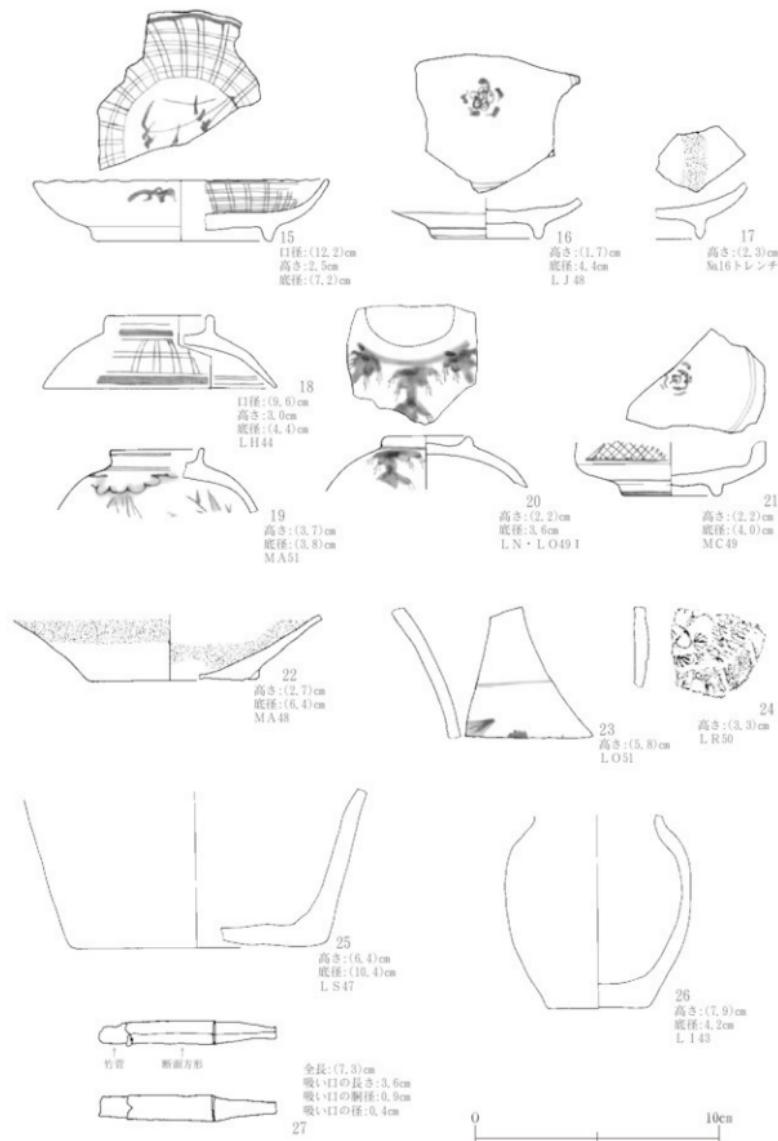
一方磁器は、磁器生産が始まった17世紀初頭に作られた通称「初期伊万里」碗・皿(第30図1・2)をはじめ、17世紀後半に見込みを蛇目釉剥する皿(第30図8)や素地が厚手で飴色の「くらわんか」手と呼ばれた粗略な安価な波佐見産の碗(第30図14)・皿(第30図11)が、また海外輸出用に生産された「芙蓉手」皿(第30図6)や見込みに「五花弁」を押したコンニャク印判の技法を使用した皿(第31図16)、19世紀に流行した端反碗蓋(第31図19・20)などが出土した。

(2) その他の遺物

江戸時代初頭の瀬戸美濃陶器や中国産と思われる皿(第30図9)、江戸時代後期の関西系行平鍋(第31図22)などの陶器類、貝風呂などの土製品、煙管(第31図27)や寛永通宝などの金属製品、砥石、八世紀の土師器や須恵器の甌・壺が出土した。



第30図 造構外出土陶磁器実測図(1)



第31図 遺構外出土陶磁器、煙管実測図(2)

第3章　まとめ

沖田II遺跡は、旧雄物川沿いの標高20~21mの微高地上に立地する近世の集落跡である。遺跡のある北橋岡は、江戸時代には羽州街道の宿場駅が存在していた。そのため沖田II遺跡は北橋岡宿場との関連が考えられ、近世秋田の地方の人々の暮らしを探るための重要な遺跡である。

1 文献から見る北橋岡

遺跡周辺の羽州街道は、道筋が現在の国道13号線とほぼ同じであった。北橋岡という地名の初見は『梅津政景日記』元和六(1620)年九月条に「北なら岡」、また菅江真澄『月の出羽路』によると、もとは「神宮寺新町村」、後に「新町」と称したと記されている。これは羽州街道の整備により、神宮寺村の新町として北橋岡(1660年)が誕生したことを示している。以後宿場の月当番を神宮寺とともに半月交替で務めることとなった。

2 検出遺構

(1) 堀立柱建物跡及び柱列跡

堀立柱建物跡18棟、柱列跡4条を確認した。天明八(1778)年に幕府巡検使に同行して来秋した古川古松軒は『東遊雑記』で、「此辺の家を見るに、建てやうもかわりて、一家も残りなく土間住居なり」と記していることから、これらの堀立柱建物跡は土間床に藁壁の粗末な造りであったと思われる。堀立柱建物跡の主軸は18棟中3棟(S B 01・16・14)が北東-南西で、10棟(S B 02・04~07・09・11・13・15・18)が東-西、他に4棟(S B 03・10・12・17)北-南、1棟(S B 08)が北西-南東であるが、重複する堀立柱建物跡が少なく、主軸による具体的な堀立柱建物跡の編年は不明である。堀立柱建物跡の間尺は基本的に、江戸時代前期には6尺3寸(1.91m)や6尺5寸(1.97m)などが主流だが、検出された堀立柱建物跡群はそのいずれにも属せず、木材の規格性もない。S B 16堀立柱建物跡は他の堀立柱建物跡より比較的大きく、この集落の村役的な人物が住んでいた可能性がある。またS D 150・556・426溝跡、S L 195河道跡はそれぞれ屋敷区画の役割をしていたと思われる。

(2) かまど状遺構

かまど状遺構は中世の遺構とされてきたが、沖田II遺跡の調査により、近世にも使用されていたことが明らかとなった。9基(1基は作り替え)が確認され、煙道、燃焼部本体、焚口部からなる。同様の遺構が、近隣では岳遺跡、薬師遺跡でも確認されているが、形状は岳遺跡のかまど状遺構に似て、燃焼部を中心とした煙道部と焚口部が直線でなく、広角度をもつものがほとんどである。また煙道の向きは、南1、南東3、南西1、東2、北東1、北1である。S O 456は煙道が南-西へ作り替えられているが、その他は明確な時期差を捉えることができない。また煙道の方向にも規則性を見ることができない。

(3) 井戸跡

井戸跡は、4基確認した。径1.0~1.3m、深さ1.0~1.7mと同規模で比較的浅い掘り込みで、確認面から0.4~0.7mの深さで段差があり、そこからさらに掘りこまれている。S E 298井戸跡では木枠が残存していた。S E 514井戸跡からは数点の遺物が出土し、この中には完形の天目型肥前陶器碗(江戸時代初期)があった。その出土状況から廐棄儀礼が行われたと考えられる。また久保田城下(秋田

市)遺跡である古川堀反町遺跡でも井戸跡が2基検出されたが、上級武士の屋敷跡らしく、井戸は桶の底を抜いたものを数段重ねた構造で、廃棄儀礼として、砂や巨岩で井戸を埋め戻した状態も明確であった。しかし沖田Ⅱ遺跡の生活者は被支配階級であり、儀礼も簡略化し、一気に埋め立てた様子がうかがえ、支配階級と被支配階級の儀礼に対しての認識の違いを読み取ることができる。

3 出土遺物

瀬戸美濃陶器は、大窯時代と思われる見込み部分を釉剥した灰釉陶器皿や稜花皿が出土している。

肥前陶器(唐津焼)は、16世紀末～17世紀後半に生産された胎土目積み段階(1580～1610年)、砂目積み段階(1610～1640年)の皿が数多く出土し、砂目積み段階には、口縁部N字状溝縁皿(1610～1630年)やS E 298井戸跡からは天目型碗が出土した。17世紀後半～18世紀初頭にかけ、京焼の影響を受けた京焼風陶器甌や、18世紀前半の内野山窯産の皿も出土している。一方、壺・壺類は、内側の叩き成形痕が波状と格子目状の二種類を確認した。1630年頃を境に、波状から格子目状へ移行する。

肥前磁器は、1610～1650年代のものを特に「初期伊万里」と呼び、その時代の碗や皿の他、17世紀後半になると波佐見産の安価な見込蛇目釉剥ぎの白磁や青磁、「くらわんか」手の碗・皿が出土している。しかし18世紀も後半になると遺物の出土数が極端に減少する。19世紀に流通する端反碗蓋や江戸時代後期の関西系平鍋、在地系土製品である貝風呂なども出土しているが、18世紀前半以前ほどの出土量はなく、遺構内出土もないことから、他所から持ち込まれたものと推測される。また出土する近世陶磁は、比較的安価な大量生産品であり、久保田城下遺跡と出土遺物の内容差が歴然である。

金属製品では「寛永通宝」や煙管が出土していた。煙管は、S E 298井戸跡から出土した雁首は火皿が補強され首部と接合していたり、遺構外から出土した吸口も肩部があることから18世紀前半以前のものと推測される。

以上から、沖田Ⅱ遺跡は、16世紀後半～18世紀前半に集落が存在し、その後突如この集落を捨て、いざこかへ移り住んだと考える。その原因是、調査中でも柱穴底部に達する前に水脈に当たるという水はけの悪さである。また18世紀後半には、数度の洪水により東隣の神宮寺でも、この時期廃村に追い込まれた村がある。北橘岡も同様に考えられ、遺物の出土状況とも一致する。

引用・参考文献

- 秋田県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅷ 南部羽州街道』秋田県文化財調査報告書第141集 1986(昭和61)年
『角川日本地名大辞典』編集委員会『角川地名大辞典 5 秋田県』角川書店 1980(昭和55)年
秋田市『秋田市史 第十五巻 美術・工芸編』2000(平成12)年
秋田県教育委員会『薬師遺跡－一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第388号 2005(平成17)年
小林克『岳下遺跡検出の窓跡について』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第10号 1995(平成7)年
秋田県教育委員会『古川堀反町遺跡－秋田中央警察署改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第435集 2008(平成20)年
大橋康二『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』ニューサイエンス社1989(平成元)年
九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000(平成12)年
江戸遺跡研究会編『図説江戸考古学研究事典』柏書房 2001(平成13)年



1 遺跡全景（東から）



2 西区近景（南西から）



1 西区基本土層（南から）



2 東区基本土層（西から）



3 S O 100かまど状遺構確認状況（南から）



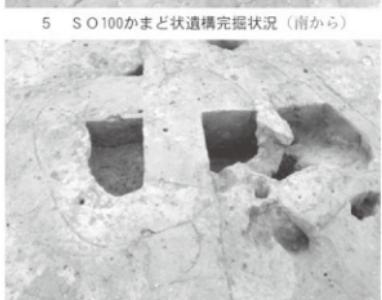
4 S O 100かまど状遺構断面（南から）



5 S O 100かまど状遺構完掘状況（南から）



6 S O 410かまど状遺構確認状況（南西から）



7 S O 410かまど状遺構断面（北東から）



8 S O 261かまど状遺構断面（北西から）



1 S O 261かまど状遺構完掘状況（北西から）



2 S O 405かまど状遺構確認状況（西から）



3 S O 405かまど状遺構完掘状況（西から）



4 S O 455かまど状遺構確認状況（西から）



5 S O 550かまど状遺構完掘状況（西から）



6 S E 298井戸跡断面（南から）



7 S E 298井戸跡完掘状況（南から）



8 S E 298井戸跡遺物出土状況（南から）



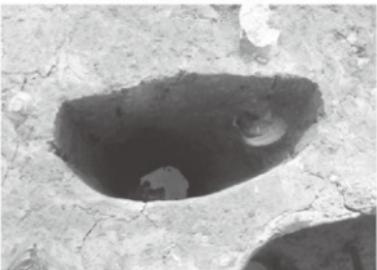
1 S E 361井戸跡完掘状況（南から）



2 S E 514井戸跡遺物出土状況（西から）



3 S K P 11柱穴様ピット遺物出土状況（西から）



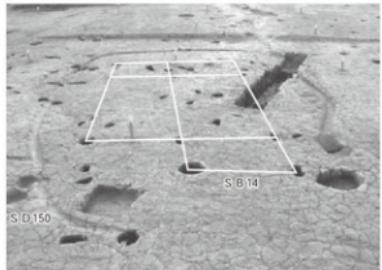
4 S K P 423柱穴様ピット遺物出土状況（東から）



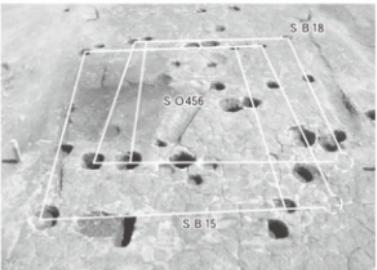
5 西区南側（西から）



6 S D 794・795溝跡完掘状況（南から）



7 S B 14掘立柱建物跡、
S D 150溝跡完掘状況（東から）



8 S B 15・18掘立柱建物跡、
S O 456かまど状遺構完掘状況（西から）

報 告 書 抄 錄

秋田県文化財調査報告書第443集

沖田遺跡・沖田Ⅱ遺跡

—一般国道13号神宮寺バイパス建設事業に係る

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

印刷・発行 平成21年3月
編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330
発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話(018)860-5193
印 刷 株式会社フロム・エー



付図 沖田Ⅱ遺跡遺構配置図

